
狐と八十一の嘘

はんどろん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狐と八十一の嘘

【Nコード】

N6330F

【作者名】

はんどろん

【あらすじ】

竹林を背景に古めかしく佇む骨董品屋『夜渡蓮』。そこは狐面の若い男が営む不思議な店だった。更新停滞中。一月前後に復活します。

きつねさん、きつねさん

私はこれからは顔を隠す為ではなく、あなたを想ってこのお面を被るのです

*

ちりんつと一瞬、軽やかな鈴の音が聞こえた気がした。

天愛は音がした方を見たが、門奥に掛けられている風鈴の音だろ
うということはなんとなく分かっていた。天愛のいる場所からでは
その様子は見えないが、先日訪れた時にもその音を聞いている。

天愛は苦々しい思いで面を上げ、目前に広がる古めかしい屋敷を
陰鬱な表情で眺めた。

今は昼間で、天気も快晴。

それなのに、その屋敷は背後にある薄暗い竹林のせいか、どんよ
りと重い印象を与える。

ここに来るのは、二度目だ。

天愛は先日自分の不用意な発言を悔んだ。

ことの起こりは三日前だった。

腰を悪くした祖母の見舞い帰りにこの道を通った時、少女は今と
同じ様に耳に入った鈴の音で、この屋敷に目を向けた。門の横に連

なる塰は、長い。大きな屋敷なのに、この鈴の音がなければ目もく
れなかっただろう。それ位、その屋敷はひっそりと佇んでいたのだ。
門の所に目をやってみるとどうやらこの屋敷は古物商を営んでい
るらしく、これもまた古めかしい木の看板が取り付けられていて、
黒い墨で『骨董品・夜渡蓮』と書かれていた。

天愛は気がつくと、まるで引き寄せられる様に門の中へと足を踏
み入れていた。いつもなら、こんな入ったら出にくくなるような店
に自分から進んで入ることはない。その時はどうしてか、そのこと
に少しの違和感も感じることはなかった。古い硝子ばりの引き戸を
ゆっくりと開けると、古い木のおいや本のおいのような、独特
なおいが流れた。

「――いらつしゃい」

戸を開けた直後に奥から若い男の声がして、天愛は肩を奮わせた。
急に声を掛けられたことにも驚いたが、何より男の人はどうにも
苦手なのだ。

「今日は二人目のお客さんだ。ゆっくり見て行って下さいね……て、
珍しいなあ」

声の主は天愛の様子に気付いてか気付かずか、気安い声色で喋り
続けたが天愛の姿を見て少し驚いた様に、また声の調子を変えた。

「女子高生かあ。しかも藤浮ふじうき高校の制服じゃん」

どこか嬉しそうな声に、天愛は古い水屋の上に置かれたランプに
向けて固まっていた視線を、そろりと男の方へと向けた。

歳の頃は天愛と同じか少し上位だろうか。金に近い、明るい髪色
に、すらりとした細身の体に纏うのは、ダウンベストに色落ちした
腰履きのデニム。道でよく歩いているような、いかにも「今時」な
人だ。

余りにもこの古めかしい骨董品屋の雰囲気にな釣合いなその男の
見た目と喋り方に、天愛はつい呆然と青年を眺めた。

「あの、ここのお店の人ですか？」

天愛がそう聞くと、男はきょとした様子で天愛を見た。

「うん。だからいらつしゃいって言ったんだけどな」

そう言いながら男は可笑しそうにくすくすと笑った。笑うと少し幼く見える男の顔に天愛は見入りながらも、自分の失言に気付いたのか、顔を赤くさせた。

「……そう、ですよ」

「まあ、よく似合わないって言われるから。ところで、何か探し物でも？」

「いえ、気が付いたら中に……」

「へ？」

男がまたきよとした様子で聞くものだから、天愛は気まずくて視線を落とした。

今日の自分はどうかしている。普段なら入らないような店に入ったり、訳のわからないことを出会ったばかりのお店の店員に言ったり。

本当に、どうかしている。

そもそも骨董品にも、興味を惹かれたことなんて今まで一度もないのだ。店内の様子を見ると、いかにも骨董品というような高い物ばかりを置いてある様子はなく、昔の一般家庭で使われていたものなどが殆どを占めているのだろう。皮製のトランクやランプ、大小さまざまな硝子瓶。それでもそれらはもう時代に過ぎ去られてしまった物たちで、どこか色あせているように天愛の目には映った。普段見慣れない光景は何かしらの強い雰囲気を持って見えはしたが、興味がなければ少し汚いガラクタの山だ。天愛にはとても、その中に自分の欲しい物があるとは思えなかった。

「あの、探し物とかじゃなくて、たまたま通りかかったんで……」

「たまたま、ねえ」

「……へ？」

男の呟きをよく聞き取れずに、思わず先程の男と同じ調子で聞き返してしまう。

「いやいや、なんでもないよ。つか、うちはひやかしても全然オッ

ケーだから！ 滅多に人來ないから店番しててもつまないんだよね」

「そうなんですか……」

天愛の消え入りそうな声と重なって、けたたましい電話のベルの音が鳴り響いた。古い、黒電話の音のようだ。天愛も小さな頃に祖母の家でよくその音を聞いたし、ダイヤルを回す震動が心地よくて電話を掛けるふりをして遊んだことがあった。

「あ！ やべ。多分八十彦^{やっちゃん}さんからの電話だ……。君、ほんとゆっくり見てってね！」

男はそう言うのと慌ててスニーカーを脱ぎながら、奥の居間へと小走りで行ってしまった。

天愛としては、男がいない方が落ち着けるので、少しほっとすると改めて店内を見渡した。本当はこの間に店を出てしまってもよかったけれど、一度顔を合わせてしまった以上、黙って去るのは男に悪い気がしたのだ。それにどうせなら見物してみるのもいい。天愛にとってガラクタの山には違いはないけれど、もしかすると少しは面白いものがあるかもしれない。とにかく此処には物が多いのだ。

店内には祖母の家の蔵で見たことがある様な物がたくさんあったが、中には天愛が見たこともないような物品が所狭しと、整理はされているが乱雑に置かれているように見えた。

古いランプや、振り子時計、鳥かご、革の大きなトランクに回転椅子、重々しい葉棚があるかと思えば西洋風の硝子の戸棚もある。

天愛は、黒に金や赤で薔薇や蝶の描かれている中国棚の上に置かれた、何やら用途の掴めない物をふと、手にとってみた。

長細い円柱の箱のような物から、じょうろのような筒が一本と、そこから先に三つ穴の開いた筒、箱の真ん中にも細い筒があつて、その横には小さなピンセットのような物がささっている。筒が立っている反対側には蓋があつて、かぱつと開けてみたが中は円柱の空洞になっていて、何に使うものなのかさっぱり見当もつかない。

使われていた当時は金色だったのであろうそれは、今では古く、

黒ずんでいてよく見えないが鳥や梅の花の模様が繊細に彫られている。

「それは水煙草だよ」

「っ！」

急に近場で声がしたので、真剣に手の中の物に見入っていた天愛は驚いて飛び上がりそうになった。危うく手に持っていた商品を落としそうになってしまつて、冷や汗をかく。

「ごめん、驚かしたみたいだね。電話終わつて戻つてきてみたら、君がそれに真剣になつてたから声かけられなかつたんだ」

男は申し訳なさそうにいいながらも、天愛の様子が面白かつたのかまたくすくすと笑つていた。天愛は恥ずかしくてまた顔を少し赤らめたが、それさえも男には面白かつたようだ。

天愛をじつと見ながらも、それ以上の笑いを堪えているようだった。

「……あの、水煙草つて？」

「ああ、煙草の煙を一回水に通して浮上してきた煙を吸うんだって。俺も吸つたことはないけど、水がニコチンを少しとってくれるからいいみたいだよ」

「へえ……煙草吸つてる人、みんなこれにしたらしいのに……」

天愛は単純に思つたことをしみじみと呟いた。

それも男の耳に届いたのか、男はまたくすりと笑う。

「おもしろいでしょ。俺も此処きてからそんなん知つたんだ」

「アルバイトなんですか？」

「うん。ここの主人とうちの親が知り合いで紹介してもらつたんだ」

「へえ」

「あ、そうだ、君今バイトとかしてる？」

「してませんけど……」

「じゃあ、ここでアルバイトしてみない？」

「……は？」

天愛は急な申し出に目を見張らせた。本当に唐突過ぎて「冗談なの

かどうかも見極められずに啞然としてしまう。まだ店内もろくに見ていないし、男とも少し話しをただけだし、人不足で困っているようにも見えない。

「楽だよ、ここ。時給いいし。することって言ったら、店番と商品店内の掃除、あと配達と年に二回の出店位かなあ。配達とかは俺が殆どするし、君は大体店番電話番号と、掃除だけでいいと思うよ」

「はあ……いや、でも、なんで急に……アルバイト募集してるんですか？」

天愛は言いながらもつい店内を見渡してしまった。悪いがとても繁盛しているようには見えない。

アルバイトの経験もなく人見知りしてしまう天愛にとっては好条件だったけれど、そもそもアルバイトのこの男に天愛を雇うと決めることができるのだろうか。

「うん。してる。てか、したみたいだよ。たったさつき」

「……さつき？ あの、時給って？」

天愛は男の言っていることをよく理解できずに小首を傾げたが、好奇心で聞いてみた。働く上ではとても大切なことだ。

男は天愛の質問に待ってましたとばかりに微笑んだ。

「千円」

男の言葉に天愛は揺らいだ。というよりも、ここでバイトしたいという思いはじめてしまう。

此処は先程男が言っていたように、昼過ぎだというのに客は天愛で二人目で、普段から客足は少なそうだ。それに、高校生の天愛にとって千円という時給は良すぎるという位良い。

大きく揺らいだ天愛に気付いているのか、もう一押しとばかりに男は言葉を続けた。

「今日はいないけど、普段は居間の方に優しいお手伝いのおばあさんがいて、おやつとかお茶とかよく出してくれるし、昼とか夜とかにいとご飯とかも出してくれるんだ。なんでもそのおばあちゃん、昔は京都の方でお店とかやってたみたいでおばんざいとか、作るも

のめっちゃおいしくて。あ、あとこの主人とアルバイトが俺一人ね。慣れればすごい気楽だと思うよ？ お客さんも常連さんが多いから気兼ねないし。優しいお年寄りが多い」

「そうなんですか……。あ、さっき言ってた出店って？」

「ああ、此処の近くの九勝寺きつしょうじって所で三ヶ月に一回、骨董市みたいなしてるんだけど、それに年二回出てるんだ。それは俺も行くから大丈夫だよ。文化祭の出し物みたいな感じ」

それは、なんだか楽しそうだと天愛は思った。接客は嫌だと思っ
天愛も文化祭での出店は何故が大好きだ。それに、食い意地がはつ
ているかもしれないが、先程のおばあさんの料理やお茶にも少しばかり心惹かれるものがあつた。

ここまで来るのに電車に乗らないといけなが、幸い通ってる高校の近くだし、どうしても遅くなりそうな時は近くの祖母の家に泊まらせてもらえばいい。

「あの」

「ん？」

「バイト、したいです」

「まじで？ やった！」

男が本当に嬉しそうにするものだから、天愛は不思議に思う。男がそこまで喜ぶ原因が何なのか全く分からなかった。

「じゃあ、早速だけど三日後にまたここに来てくれる？ 履歴書持つて。一応、主人に面接してもらわないと。あ、面接つっても殆ど顔合わせみたいなもんだから緊張しないでね」

「はい」

「あ。あと、君お茶煎れる？」

「はい。一応は？」

思い出したように聞いてきた男の言葉に天愛は首を傾げた。

流石にお茶くらい淹れることはできる。それにいつも食後にお茶を淹れるのは、天愛の役目だ。普通程度には美味しく淹れられるだろう。

けれど、それがなにか関係あるのだろうか。常連客にはお茶を出すことにしているのだろうか。お茶を出さなければいけないお客さんのなかに、お茶にうるさい人がいるとか。

「うーん。うちの狐さまはお茶が大好きでねえ」

男はそういいながらも、不思議そうな顔をしている天愛の顔を見て苦笑した。

それが、三日前。

そして、嫌な噂を聞いたのが一日前のこと。

——夜渡蓮の店主はかなりの偏屈で変わり者。

学校の友達の綾香が夜渡蓮のことを知っていたことには驚いたが、綾香は此処の近所に住んでるし、この近所では有名な話らしい。

その偏屈な店主が営む骨董店でアルバイトを始めると言ったら、猛烈に反対された。恐らく余り良い噂はないのだろう。

ただでさえ人見知りをする自分が、そんな人と付き合っていけるだろうか。なにしろ、その人は普段はさばさばとして余り立ち入ってこない綾香が、猛烈に反対する程の人物なのだ。

天愛はあの軽しい雰囲気のアルバイトの男を思いだした。あの人なら間に入ってくれそうだと、勝手に思い込むことにする。そうしないと、これからの「面接」に行かなければならない足が、益々重いものになってしまう。黙って行かずにおこうかとも考えたが、流石に駄目だと思いそれは止めておいた。本当に無理そうなら、一言自分の口から伝えればいいのだ。

天愛は必死で三日前に出会ったばかりの男を思い出しながら、涼やかな鈴の音の鳴る夜渡蓮の門をくぐった。

「あらあら、可愛らしいお客さん」

三日ぶりにやってきた夜渡蓮で天愛を迎えたのは、若い男の声ではなく、品の良い老婦の声だった。

上品に着物を着こなしたその老婦は、天愛を少し驚いた様子で見た。けれどすぐにその目は穏やかな微笑みの形をつくる。優しいような老婦の様子に、天愛も少し肩の力を抜いてしまう。

この人が京都でお店をしてたとかいう、おばあさんだろうか。

「あの、今日アルバイトの面接お願いしてた椿ですけど……」

天愛がそう言くと、老婦はどこか嬉しそうに、ただやはり上品に微笑んだ。

「ああ、そうやったんね。ちょっと待っててね。店主を呼んできますから」

そう言くと奥の方へと少し急いだ様子で入って行った。天愛は再び沸き起こってきた緊張感に下唇を噛み、その様子をじっと見届けた。どうやら、今日はあのアルバイトの男は来ていないようだ。

「八十^{やと}さん、八十さん。この前^{まへ}晃くんが言ってた女の子が来はりましたよ！」

「——ああ、」

店と奥の部屋の間にかけられた暖簾で顔は見えないが、その向こう側の部屋に置かれた肘掛に、紺色の着物を着流した男が肘を掛けて、何か本を読んでいるようだった。その姿は天愛が思い描いていた、どっしりとしたおじさんとはかけ離れていて、ひよろりと手足が長く、今微かに聞こえた声も若い男の声だ。『偏屈で変わり者』
といえば強面のおじいさんかおじさん、と思い込んでいた天愛はぼんやりと、歩いてくる男の胴体を眺めた。何かあるでもないのに、若いであろう男が着物を着ているのはとても珍しい。けれど、少し草臥れた紺青の和服に黄土色の角帯を巻き付けた姿は、この店の風

景によく馴染んでいる。

天愛はまるで自分が時代を間違えて来てしまったような、場違いのような懐かしいような妙な気分に関われた。

けれど、男が暖簾を片手で上げた次の瞬間、驚いて喉の奥でひつと息を呑む。

男は少しの間、恐怖で動けなくなっている天愛の様子をじっと見ていたが、思い出したかのように呟いた。

「ああ、君が東雲しのめが言ってた女の子ね。成る程」

何が成る程なのか分らなかったが、それが何のことなのか考えている余裕は、今の天愛にはなかった。

金縛りにあつたように、動けなくなる。

男の声はやはり若く、着物から出ている手足も若い。おそらく、二十代前半位の年頃だろう。もしかすると、天愛と同じ位なのかもしれない。

けれど、天愛はそんなことよりも目の前に佇む男の顔にあるそれに、釘付けになっていた。

にっと吊り上げた赤々しい唇で、どこか人を馬鹿にしたような表情のそれは、狐のお面だった。不気味に笑った狐の顔は、天愛をじっと見ている。

「八十さん、娘さん驚いてますよ。そやから今日だけでも、狐のお面じゃなくて蛙のお面にしときなさいって言つたやない」

老婦のどこかの外れな言動にようやく少しだけ恐怖が薄れ、肩の力を抜くことができた天愛は、ゆっくりと冷めてきた頭の隅っこで、友人の言葉を思いだす。

『変わり者』

祭りの日でもないのに狐面を被つた男は、天愛にとっては変わり者どころではなく不気味としか言い様がないのだが、確かに変わっている。変だ。先程の老婦の口ぶりからして、この男は今だけふざけて付けている訳ではなく、恐らくほぼ毎日のように狐面を付けているのだろう。夏でもないのにだらりと着流した着物も、余計に狐

面の男の不気味さを強調していた。それでもその姿は妙に出来上がっていて、それでいて違和感がありすぎる。もしかすると、老婦と共にふざけている可能性もあったけれど、天愛にはこの上品な老婦が、とてもそんな悪ふざけをするような人には見えなかった。

冗談じゃない、と天愛は必死で逃げる言い訳を考えた。

小さい頃から狐面が苦手で仕方なかったのだ。きつと誰にでも、暗闇だったり木目だったり、不気味に感じて仕方がないというものがあるだろう。天愛にとっては狐面がそれだった。真つ白な面に塗られた真つ赤な紅も、にやりと三日月のように笑う三白眼も、気味が悪くて仕方がない。そしてそれを付けている人はなお更不気味だった。

「――あ」

「ただいまー」

口を開いた途端、がらりと勢いよく開かれた後ろの戸の音と、軽やかな声で天愛は口を開いたまま振り返った。天愛をアルバイトに誘った張本人であるアルバイトの男は、声と同じように軽やかな雰囲気ですのうの前立に立っていた。口を開けたままの間抜けな顔をした天愛を見やると、嬉しそうな顔をしたけれど、その先に居た店主の姿を見つけて、天愛と店主を見比べると笑みを残したまま、何か失敗でもしてしまったような微妙な表情をした。

「東雲、戸は静かに開けなさいと何度も言っただろう？」

と、天愛の後ろから聞こえた男の声はため息交じりだ。

アルバイトの男は少し慌てた様子になり、必死で話しを逸らした。「すみません！ この前の子きたんだ。驚いただろ、八十彦さんがこんな狐のお面付けてるから」

「……あ……はい」

天愛はうつかり正直に答えてしまう。

しまった、と思って少し俯いたが店主は別段気にした様子もなく、腕を組んだ気だる気な佇まいで言葉を紡いだ。

「で、東雲。筑波さんの方は？」

「ああ、相変わらずだよ。届けた物も気に入ってくれたみたいで喜んだ。で、そのあと気分良くなった筑波さんは俺相手に永遠と長話し……」

「その割には早かったね」

「がんばって切り抜けてきたから」

そう話す二人の様子を天愛は呆然と眺めていた。この轻轻松松い雰囲気（きんきんきんきん）の男と話しているからなのか、先程の異様さを狐面の男からはそれ程感じない。先程感じた妙な感覚も天愛はもう忘れ去っていた。アルバイトの男はどう見ても普通の人で、軽い雰囲気（きんきんきんきん）は天愛の気分も少し軽くしてくれた。

ただ、店主がその顔に蓋をするかの様にある狐面は、どう見てもやはり不気味で、目の端に映るだけでも浮かび上がっているように目立って見えてしまう。

「お二人共、娘さんを待たせるのは可哀相だよ。とりあえずみんな居間に上がりましょう。お客さんもおれへんことやし。そうそう、今日ちようど新しい茶葉が届いたんよ」

そういうと老婦は暖簾をあげて天愛を手招きした。

「え？ あ……」

「あがりなさい」

狐面の男の出現で早々に立ち去りたかった天愛だったが、有無を言わさないその男の言葉で何も言えなくなる。

「大丈夫だよ。とって食われる訳じゃないから」

そう苦笑しながら囁かれたアルバイトの男の言葉が、天愛の恐怖を一層深いものにさせた。

通された居間には古びた本棚があり、その中には古書が乱雑に並べられていた。本棚にも入りきらなかったのか、その前には小さな本の山が四つ程できている。

お茶を運んでくれた老婦が、本棚の方を見ている天愛の視線に気付いたのか、少々ばつが悪そうに「本棚をもう一つ入れなさい

と何度も言ってるんやけどねえ」と言った。

天井から吊るされた小さな四つの電球が纏う乳白色の傘には、黒い花の模様が描かれている。直ぐ隣にある縁側からは、裏にある薄暗い竹林が見えた。

天愛はちらりと、どつしりと重いテーブルの向こう側、天愛の正面に座る男の方に目を向けた。

狐面は、外していない。

それは天愛にとっては、どうしても心臓に悪いものだった。

男は狐面を付けているせいで表情は分かりにくい。けれど、狐面の瞳に開けられたまん丸な穴から覗く真つ黒な瞳が天愛をじっと観察するように見ていたので、天愛は居心地が悪くなつて視線を自分の膝元に落とした。

「いつから来る？」

意外にも優しい声色に天愛は顔を上げた。

「え？」

「アルバイトだよ」

「あ、あの……」

隣に座る男の助言で質問の意味は解かったが、唐突にそんなことを聞かれても困る。

面接、と確か隣に座る男は言っていた。面接をしなくてもいいのだろうか。

「ちなみに、君の隣に座ってる東雲と云う男は殆ど毎日来てるよ」

「いや、来てるっていうか来させられ……」

「東雲」

「……はい」

東雲と呼ばれた男は狐面の男には逆らえないのか、否定しかけた言葉を飲み込んだ。

その様子を天愛は不思議な気持ちで眺めた。アルバイトの男は敬語を使つてはいるが、二人は仲のいい兄弟のような関係にも見える。雇用関係どうこう以前に、打ち解けた間柄のようだった。親同士が

友達で、二人も昔からの顔見知りなのかもしれない。けれど、狐面で和服姿の男と茶髪の少しチャラチャラした男が話している様子子は、なんだか滑稽だ。

「ああ、そういえば名前乗ってなかったね。俺はこの店主で、あやおりやとひこ彩織八十彦と云います。履歴書、持ってきてくれたかな？」

「あ、はいっ」

狐面をつけた風変わりな様子とは違って、少し落ち着いて聞いてみると八十彦の声や言い方は穏やかで優しいものだった。けれど、その狐面と履歴書という言葉は似合わなさすぎる。

天愛はそう思いつつも足元に置いた学校指定の鞆から、慌てて履歴書の入った封を取り出し八十彦に差し出した。

それを受け取った八十彦は「ありがとう」と言っと、近くに置かれていた漆塗りの木の箱から、古びた銀製のペーパーナイフを取り出して封を開けた。

隣に座っていた男が、履歴書の中を見ようと身を乗り出したので、近くに腰を下ろした老婦が叱るように顔を少し顰めた。

「つばき、てんあい……？」

身を乗り出した男が呟いた言葉に天愛は苦笑した。昔から、まともにも名前を読まれたことは余りなかった。

「つばき椿 あまな天愛って読みます」

「ああ、ごめん。仮名振りしてあるのに」

男はそう謝ると、身を乗り出すのを止めて天愛の隣に落ち着いた。「最近の子って、変わった名前の子多いよね。こんなん言ったらオヤジ臭いけど。そいや、俺も名前言ってなかったや。天愛ちゃんのアルバイト、多分決まったようなものだし名前知っというてもらわないと」

天愛は会って間もない男に下の名前で呼ばれて一瞬顔を顰めたが、男は気にした様子もなく続けた。

「俺は東雲しのめあき晃ひつていいいます。よろしくね」

邪気を感じさせない東雲の笑顔に、急に下の名前で呼ばれたこと

も別に良いように思えた。おそらくとても人懐こい人なのだろう。

「希望がないのなら、早速明日から来てもらってもいいかな？」

履歴書をゆっくりと読んでいた八十彦にそう言われて、天愛は少し戸惑った。

どうやら、自分がここにアルバイトに来るのは東雲の言うように、本当に決まってしまうているらしい。

天愛は八十彦の狐面を見て、再び先日の自分と、おまけに早々に立ち去らなかつた先程の自分もを呪いたくなった。こんな状況では断りにくいし、断れた試しがない。ようは、気が弱いのだ。

「……はい、宜しく願います」

諦めたように天愛が言うと、隣りで東雲が全てお見通しという風に天愛に囁いた。

「大丈夫だよ。八十彦さんは滅多に店の方には顔を出さないから」

その言葉を聞きながら、できれば明日には狐面をはずしてくれていますように、と切に願った。あの狐面と時々でも顔を合わせてしまうという可能性の中では、きっと心中穏やかではいられないだろう。天愛は自分から辞める、という根性さえきつと持ち合わせていないことを自分でも分かっていた。何か失敗をやらかしてそれを理由に、という手もあったけれど、そんなこともとてもできない。

そんなことを頭の中でぐるぐると考えながら、これからの日々の不安にまた気を重くした。

「……あの、大丈夫なんでしょうか？ この店」

こんなことを尋ねるのはどうかと思いつつも、アルバイトに來始めて三日目の午後、天愛はとうとう心配になって尋ねた。

「ああ、全然大丈夫だよ」

とひらひらと手を振って答えたのは、天愛と同じくアルバイトの東雲だ。

天愛が落ち着きなくそわそわしているのに対して、東雲はその隣りで平然と、先程お手伝いさんの染野そめのが持ってきてくれた苺大福を食べていた。

小さな皿の上に置かれたそれは薄っすらと白く、中に入った苺と餡の色をうつしている。

「天愛ちゃんも食べなよ、染野さんのお手製苺大福。まじでおいしいから」

迷いながらも、天愛は東雲に進められるままに小さな皿に置かれた苺大福を少しだけ口にした。甘い物は余り好きではないが、東雲があまりに美味しそうに食べていたし、勧められて断ることはできない。

「……おいしい」

程よい甘みの餡子と、甘酸っぱくて瑞々しい苺の組み合わせが絶妙だった。それに思っていたよりも随分とあっさりとしていて食べやすい。そのおいしさに天愛は一瞬、先程までの心配事を忘れて一口、また一口と頬張った。

東雲が隣りでその様子をおもしろそうに眺めているとも知らずに、あつと言つ間に平らげてしまう。

「あんまりおいしいもんだから、他のこと一瞬飛ぶよね。はい、お茶」

「あ、ありがとうございます」

と、天愛は東雲が入れてくれた熱いお茶をごくごくと飲んで、一息ついたところでようやくはつとした。

「本当に一瞬飛んじやってたんですけど、大丈夫なんですか？ この店」

天愛は再び同じ質問をした。

訊きたいのは「この店潰れないんですか？」ということだった。アルバイトに始めてからのこの店の客足は、天愛の想像以上に少なく、昨日なんてひやかに、常連だという老人が一人やって来ただけだった。趣味程度にのんびりとやっているだけならまだしも、学生のアルバイトを二人、しかも結構な高賃金で雇っているのだ。とてもやっていけるとは思えなかった。

それに、仕事と言った仕事もしていないのに給料を貰っているのだろうか、と思ってしまう。天愛がここに来てからした事といえば、店内と商品の掃除と、毎回染野が出してくれるおいしい手作り菓子を食べて、これまたおいしいお茶を飲むことくらいだ。掃除をする物は山ほどあるようにも見えたけれど、見た目の劣化が激しい物でも、どれも隅々まで綺麗に掃除されていた。天愛はそれらに埃が積もらないように拭き掃除をして、時間を過ごしたりしていたが、自分はどう考えても必要のないような気がして、時たま居た堪れない気分になくなってしまふ。

本当に一体どうして、もう一人雇おうと思ったのか理解もできなかった。

「うーん。俺も最初は心配だったけど、意外と常連さんも多いし……たまに希少なお客さんが希少な物を持ってきてくれるから、それを嗅ぎつけた鼻のいい常連さんが結構な高額で買ってってくれるんだよ」

東雲は急須から湯のみにお茶を継ぎ足しながら言った。よい香りが立ち上ってくる。

「そうなんですか……」

希少なお客さんって、なんだろう。凄いお金持ちとか。

天愛はそんなことを思いながら、なみなみと注がれるお茶をぼんやりと眺めた。黄緑の透き通ったそのお茶は、先日染野が購入したという茶葉で淹れられたものだ。

その茶葉が一体幾らほどするのか、天愛には想像もつかなかった。恐らくとても上等な物なのだろう。この店主は、茶に対して大した拘りを持っているのだと、一日目に東雲が言っていた。

「多分そろそろ、またその『希少なお客様』がやってくると思うよ」

東雲はおもしろそうにそう言うと、お茶を啜り、店の戸口の方を見た。

天愛も東雲の視線の先を辿ってみたが、そこには誰もいない。古びた木の門と、その先のアスファルトの道路に引かれた白線や真新しい電柱は、合っていないようで妙に馴染んでもいる。その道路の向こう側は、所々木と雑草が生えた空き地だ。夏には地面が見えない程の、長く生い茂った雑草が覆い尽くしてしまつらしい。

「来る、て連絡があつたんですか？」

天愛がそう尋ねると、東雲は何が可笑しいのか声を上げて笑った。「ははっ！ 連絡は多分今までできたことないなあ。そのお客様達はいつもランダムに、突然来るんだ」

「『お客様さん達』ってことはたくさんいるんですか。常連さんとか」
「ああ。大体一度取引きをしたお客様さんが、もう一度此処に来るってことはないかな。つか多分、もう来れない」

東雲はまだおかしそうに笑いを残したまま答えた。

天愛にとつては東雲の言うことはいまいち核心をつかなくて意味が分からない。首を少し傾げながら、もう一つだけ聞いた。

「だったらどうして、そのお客様さんが来るって思うんですか？」

「ああ……俺も、鼻がいい方なんだ」

東雲はそう言うとき硝子戸の方に目を向けた。天愛はやはり意味の掴めない東雲の言葉に小首を傾げながらも、つられるように引き戸の方に目をやる。

もう日も暮れかかり、外の景色は赤く染まっていた。遠くで子供の声がする。時々車の騒音が少し離れた場所から響いてきた。開け放たれたままの広い門の間から、夕日の明かりが長く伸びて店内まで届いている。薄暗い店内から見た外は、随分と明るく感じる。

——今日はもう、お客さんは来ないかもしれない。

そうぼんやりと思いながら、苺大福の載っていた皿と湯のみを片付けようと天愛が立ち上がった時だった。

その日一日動かなかった硝子戸ががり、と開かれたのは。

*

その客は、天愛の姿を見ると顔を顰めたが、東雲の姿を見た途端目を見張らせた。

心なしか、顔が引きつっているような気がして、天愛は東雲の姿を凝視して固まったまま、なかなか入ってこようとはしない客をじっと眺めた。

中学生位の年頃の少年だ。白い着物の上に羽織を着て、紺の袴を履いている。

今時そんな格好は中々見れないので、天愛は踊りの教室かなにかの生徒さんで、その帰りによったのかな、と勝手な想像を巡らせた。それに子供がこんな店に入ってくるなんて、違和感がある。近所の子だろうか。

「……あの、外国の方ですか？」

緊張した面持ちで言われた、その少年の第一声に天愛が今度は目

をまるくした。視線を変えずに言ったので、おそらく東雲に聞いているのだろう。天愛は髪も黒いし、どう考えても日本人にしか見えない。けれど東雲も、最近多い綺麗な顔だが、ほりがそんなに深い訳でもないし、どう見ても日本人だ。ただ髪が明るいというだけで、外国の人になんてまず間違いはしないだろう。それに今時、こんな髪色の青年は珍しくもないし、むしろ溢れかえっているくらいだ。

天愛が少年と東雲を交互に見ていると、東雲がなぜか慣れた様子で「違うよ。俺、完璧日本人だから」とにやにやしながら答えた。けれど少年は訝しげに東雲を眺めたまま、いまだに開けた戸の向こう側で立ちすくんでいる。

「とりあえず、どうぞ中に……」

天愛ができる限り愛想よくそう言つと、少年は一瞬怯んだように体を揺らせたが「ああ」と短く答え、ゆっくりと警戒するように店の中へと一歩足を踏み入れた。

「——っ」

少年が戸の木枠を通り越したその一瞬、天愛は鋭い耳鳴りを覚えて咄嗟に耳を塞いだ。今までに感じたことがない、気が遠くなる程のものだった。他の音が一切聞えなくなってしまうような位の耳鳴りで、鼓膜が痛んだような気さえた。

前を見れば、少年も眉間に皺をよせて耳を塞いでいたが、やがて訝しげに手を離れた。

東雲だけが、ただ平然と木の椅子に座ったまま微笑んでいる。

「あの、今……」

凄い耳鳴り、しませんでした？

天愛がそう訊こうとすると、東雲はその先を読んだかのように天愛の言葉に続けた。

「耳鳴りでもした？」

「はい。あの、東雲さんも？」

「俺は別に」

天愛が首を傾げると、東雲は苦笑した。肩を竦めて、小首を傾げる。

「二人とも、急に耳塞いだから、耳鳴りでもしたかなあって思ってたはあ、」

どう考えても、今の状況も、東雲の言い方も少し変だった。東雲に耳鳴りがなかったのだったらなお更だ。二人の人間が何も無いのに突然耳を塞いだ理由が、耳鳴りだったと気付いたその勘の良さは一体なんなのだろうと、天愛は釈然としないままため息のような返事をするしかなかった。

「あの」

いつの間にか天愛と東雲の近くまで来ていた少年がやけに通る声で言ったので、天愛は慌てて少年の方へと体を向けた。少年は先程とは違って、少し迷っているような、途方に暮れたような顔をしていた。一瞬視線を彷徨わせたあと、東雲の方がこの店の店主だと思つたのだらう、力を籠めて東雲と目を合わせながら言った。

「此処にすれば、なんでも買い取ってくれると聞いたのですが……」

「ああ。なんでもって訳じゃないけど、それなりに価値があるものなら」

「……価値があるかは判りませんが、こんな物でも買い取ってくれるでしょうか？」

そう言つて少年は、手に持っていた茶色い油紙に包まれた小さな何かを、東雲に手渡した。

東雲はそれを手に取つて一瞬目を細めたが、紙を開かず少年の方を見た。微笑んだままだが、その目は真剣みを帯びている。

「これは？」

「ちえ子の骨です」

少年の言葉に天愛は目を見開いて、東雲の手の上にある小さなそれを凝視した。

三角に折られた油紙は、小さく膨らんでいる。

ちえこの、ほね。

「うーん。それだとちよつと俺が決めるのは難しいなあ。今は店主もいないし、悪いけどまた明後日これを持ってきて貰ってもいいかな?」

「明日では駄目ですか?」

「もしかして、急ぎかな?」

「……できるだけ早く、これを手放したいんです」
少年はそう言つと苦しそうに顔を歪め、俯いた。

少年は、東雲に名前を告げるとさっさと帰ってしまった。結局明日またやって来るらしい。

東雲は今は奥で、不在の八十彦に電話を掛けている。

天愛はぼんやりと硝子戸から見える、代わり映えのしない外の景色を眺めてため息をついた。

暇だ。

ここに来てから暇も苦になるのだと始めて知った。時間が進むのがとんでもなく遅い。暇だったら宿題でもしてていいよ、と東雲が言ってくれたが、その宿題もあつという間に終わってしまった。

天愛はぼんやりとした頭で、今日やってきた少年のことに頭を巡らせた。

ちえ子の、ほね。

そう言った少年の名前は、確か『寺島元基^{てらしまもとき}』と言った。まるでおじいちゃんみたいな名前だ。そのおじいちゃんみたいな名前をした少年は、人間の骨を持ってきた。

天愛は、昔から死の気配のするものは苦手だった。骨とか、お墓とか、ぞつとする。生きて動いている、温かい体温を持った人間が、冷たくなって動かなくなつて、いずれはその容を変えてしまう事実。それは、生きている人間にとっては途轍もなく底知れなくて恐ろしいこと。

此処の店主は『ちえ子の骨』を買い取るのだろうか。

普通ならありえないことだが、何故かあの店主なら買い取りそうな気がした。買い取るということは、それを欲しがる客がいる可能性があるということだ。

自身の考えが馬鹿らしくなつて一人苦笑した時、天愛は近くで鈴の音が聞こえた気がして、後ろを振り返った。

「……？」

奥で電話で喋っている東雲が見えたが、他に誰もいない。

猫を飼っているなんて聞いたこともないし、やはり気のせいかと思った時だった。本当に真近で、ちりんっと鈴の音がはつきりと聞こえて、また振り向く。直ぐ真後ろで、ふわっと赤いもやのようなものが見えて、天愛はひとつ息を呑んだ。

「あれ？ 天愛ちゃん、どした？」

電話を終えて戻ってきた東雲は、固まっている天愛を見て不思議そうに首を傾げた。

目の前で手を振られて、漸く金縛りが解けたように天愛はふっと息を吐く。

それと同時に、背中に冷たい汗を感じた。

「……あの、」

「ん？」

「ここって……」

なにか、います？

そう聞こうと開きかけた口を噤んだ。もし頷かれましたら、此処にくるのは益々苦痛になる。たださえ狐面をつけた八十彦がいるのだ。

「もしかして、なにか見えた？」

「わーっ！ー！」

からかうように、面白そうに言った東雲の言葉を打ち消そうと天愛は声をあげたが、もう遅い。

「どうして言うんですか！」

「聞きたくなさそうだったから」

東雲は可愛らしい笑顔で、そう言った。確かに、言った。いくら可愛らしくても、今の天愛にはその笑顔は悪魔の微笑みに見える。

天愛は東雲のことを見た目は少し派手でも、少々天然気味の人の良いお兄さんだと思いこんでいた自分を罵った。

「怖い？」

「恐いから、聞きたくなかったんです！」

天愛はおもしろそうに笑いながら聞く東雲に心の底から苛ついて、声を上げた。

「別に俺、ここに何かいるとは言っていないよ？」

「……いないんですか？」

「うーん。色んな古いものを扱っているから、分からないけど……俺、そもそも靈感なんてないし。天愛ちゃん、幽霊とか信じてるんだ？」

「……半信半疑です」

「まあ、そういうもんだよね」

東雲は苦笑しながらそう言うと、天愛の隣に腰を落ち着けた。

「……真近で、鈴の音が聞こえたんです」

「へえ」

東雲は少し目を見開いて、興味深気に天愛を見た。

「で、振り向いたら、一瞬赤い何かが……」

天愛は自分で言いながらも悪寒が走るのを止められなかった。

赤い、一瞬だけとはつきりと見えたあれは一体なんだったのだろうか。

東雲は一瞬少し驚いた顔をしたが、手で口元を覆うと考え込むようにして「ふうん、そっか……」と呟いた。

できれば否定して欲しかった天愛は、やけに神妙な様子の東雲を横目で見て軽く項垂れた。

昨日、染野は天愛と東雲にお裾分けと言って、八十彦の好物だというきんつばを帰りに渡してくれた。

常連の老人が、何故か山ほどくれたらしい。「あの人はいつもそうなんよお」と染野さんは可笑しそうに笑っていた。

そして、何故か同じ紙袋が三つ。

嫌な予感はしていたが、まさかそんなことはないだろう、と天愛は油断をしていた。

天愛は学生鞆とは反対の、机の横に掛けた紙袋を見てため息をついた。

「なに。呪いのビデオでも入ってんの？ その袋」

「綾香」

机の前に立つた長身の友人を見上げて、うつかりもう一度大きなため息をつきそうになって、天愛は堪えた。

綾香にはまだ、『夜渡蓮』でバイトを始めたことは言っていない。

「……私、三日前から夜渡蓮でバイトしてるの」

「止めたのに」

今度は綾香が大きなため息をついた。

猛烈に反対していた割には、驚いた様子もない。諦めたような、もうどうでもいいような感じた。

「じゃあそれ、夜渡蓮の……呪いのお面なんか？」

的を得た綾香の質問に、天愛は目を見開いて綾香を凝視した。

「有名なの？」

「あ、やっぱりお面だったんだ。なんのお面？」

「蛙」

「……カエル？」

「多分、呪われてる」

天愛はそう言うときまたその紙袋に視線を向けた。

昨日、染野さんが用意してくれた天愛の分のきんつばと、東雲の

分のきんつば、東雲が今日、夜渡蓮に行く前にお客の家に届ける筈だった、蛙のお面。

家に帰って箱を開けた天愛と母は、同じタイミングで体をビクつかせた。きんつばが出てくる筈が、蛙のお面が出てきたのだ。蛙と言っても、可愛らしさの欠片もない、古い、木で出来た蛙のお面。緑色の顔面には黒で不思議な模様が描かれていた。まん丸な大きい目の中には何十にも丸い輪が描かれていて、その中心にある六ミリ程度の穴は蛙の小さな瞳孔だ。横に大きく切り裂いたかのように開かれた口の中には無数の尖った歯があり、真つ赤な舌があった。

蓋を持ったまま固まっていた母は、そのままそつと蓋を閉めて、まるで何かの封印のように風呂敷で素早くそれを包み、紙袋へ戻すと、テーブルの端へとそれを寄せた。

「明日、ちゃんと持って言って謝りなさいよ」

そう言った母の声色には微かに怒りが混ざっていた。

天愛も母も、呪いを信じる信じないかは別にして、こういう不気味なものは大の苦手なのだ。母は特に、縁起の悪いもの等を嫌がる。小学生の頃、天愛は曼珠沙華を持ち帰り、こつ酷く叱られたことがあった。

その後、天愛は直ぐに東雲に電話をしたが、東雲はのん気な声で「ああ、大丈夫だよ。何時頃行くって言ってた訳じゃないから」と言った。

結局、天愛は自分の部屋にそれを持ち込むのが嫌で、今日の朝までリビングのテーブルにそれを置いたままだった。

「あそこって、どんな客くんのか？」

「おじいさんとか、おじいさんとか……そういえば昨日は、中学生位の子が来た」

「……へえ、近所の子たちの遊びで罰ゲームとか？」

「ちゃんと、お客さんだったよ」

天愛はそう言つと、時計をちらりと見た。

もう、三時半だ。タイムカードなどは無いが、四時からのバイト

で、天愛はいつも二十分は早く着くようにしていた。学校から夜渡蓮までは歩いて丁度十分程度だ。

「私、部活の子とここで待ち合わせしたから、先に帰ってて」

綾香がそう言うてくれたので、天愛は頷くと学生鞆と紙袋を持って立ち上がった。

少し綾香が後ずさったので、首を傾げる。

「どうしたの？」

「なんでもない……遅刻するよ」

「あ、うん。じゃあまた明日ね」

荷物を持った瞬間、綾香が嫌そうな、少し苦しそうな顔をした気がしたのだが。

天愛は不思議に思いながら、まだざわざわとうるさい教室を出た。

夜渡蓮の長い堀の端の所までくると、丁度東雲がバイクでやってきた所だった。

天愛は腕時計を見てほっと息をつくと、手に持っていた紙袋の存在を思い出し、東雲に手渡す。

変わりに、きんつばの入った袋を渡してくれた。

「天愛ちゃん、ごめんね。袋全部同じだし、箱の大きさも大体同じ位の大きさだから、間違わないようにしてたつもりんだけど……あ、中見た？」

「……はい、すみません」

「ううん。大丈夫だよ……てか、大丈夫だった？」

「え？」

天愛は嫌な予感がして顔を顰めた。

「呪われてそうじゃない？ 買い手が見つかってよかったよ。それが店の中にあるのマジで嫌だった。素でこえーし」

夜渡蓮の店内で、東雲がああ薄気味悪いお面に戦っているのを想像して、天愛は苦笑いしながら少しだけ見慣れてきた硝子戸を開け

た。

「おはよう」

優しいその声は、八十彦のものだ。

天愛は店の奥を見て固まった。今日はめずらしく店に出ているらしい。大体いつも、東雲が天愛がいない時には染野が店番をしているのに。

傍らには寺島元基が立っていて、天愛達を見ると軽く会釈した。

その姿は、今日も着物に袴という身なりだった。固まった状態の天愛を怪訝そうに眺めている。

東雲は入り口で突っ立ったままの天愛の背中を軽く押すと、苦笑しながら「とりあえず、入りなよ」と言った。天愛は黙ったまま頷くと、八十彦と寺島少年がいる方へとなんとか歩いた。

八十彦とは最初に会った日以来、直接は顔を合わせていない。

「……おはようございます」

「おはよーございまーす。あと、いらっしやい」

弱弱しい天愛の声とは違って東雲は明るい声で八十彦と寺島少年に挨拶をすると、八十彦の手の中にある物を覗き込んだ。

ちえ子の骨だ。

「……あの、彩織さん……それ、買い取るんですか？」

天愛は四日前に聞いた、八十彦の苗字をなんとか思い出して、おずおずと質問した。

八十彦は一瞬、東雲の方に目を向けたあと、お面の下で少し笑う。少女が自分に怯えているのが面白いかのよう。東雲はまた苦笑すると、天愛の方をちらりと見た。天愛はそんな二人の様子に少しも気づかずに、八十彦の手の中にある、白い紙に包まれたまま開かれていない『ちえ子の骨』にじっと見入っている。

「店主は、買い取ってくれるみたいですよ」

答えたのは、八十彦ではなく寺島少年だ。

天愛が目を向けると、その少年も八十彦の手の中にある『ちえ子の骨』をじっと見ていた。

天愛は少し目を見開くと、八十彦の、お面穴から覗く真つ黒な瞳を見た。八十彦は少し肩を竦めると、骨を大切そうに、近くにあった小さな桐の箱に入れてしまう。

「東雲、お茶」

「……はいはい」

東雲は天愛の肩をぽんぽん、と軽く叩くと靴を脱いで奥の方へと引つ込んだ。

「……あのっ私も荷物、置いてきます」

「此処においておいたらいいよ」

慌てて東雲の後を追おうと靴を脱ぎかけた天愛に、八十彦は自分の隣にある机を手で軽く叩いてそう言った。

「はい……」

天愛はそう言うしかなく、八十彦に見えないところで軽く項垂れると机に荷物を置いた。

「あの、じゃあ僕はそろそろ帰ります……」

そう言うて立ち上がった寺島少年は、東雲が置いて行った荷物にぶつかり床に落としてしまった。白い紙袋の中からは桐の箱と、その間から緑色の、あのお面が見える。

天愛はそのお面が見えるときよっとして固まった。

あの時、母がしっかりと風呂敷に包んだ筈なのに。

「……それ、一之瀬爺さんの……」

「え？」

なにか、勘違いしてるのだろうか。

寺島少年はその蛙の面を見て、呆けた様子で呟いた。

八十彦は、寺島少年の言葉に目を細め、ゆっくりとその面を拾った。

「これを、知っているみたいだね？」

「……いえ、そんな筈はないので……僕が見知っている物と、似ているだけだと思います」

寺島少年はまだ少し呆けた様子だ。

「それに、僕が見たのは、緑で塗られてはいませんでした」

「……へえ、」

八十彦はそう呟くと、床に倒れた紙袋と箱を拾って、その箱の中に蛙の面を入れると蓋を閉めた。

風呂敷は、箱の回りでくしゃくしゃになっていた様だ。

天愛は、寺島少年の言葉の意味が解らないのと、何故か解けてしまっていた風呂敷に、混乱してしまう。

「誰かが、悪戯で風呂敷を解いたみたいだね」

急須と四人分の湯飲みを載せたお盆を持って戻ってきた東雲は、どこか楽しそうにそう言った。

誰かが、なんておかしい。

天愛が東雲に紙袋を渡した時、東雲は紙袋の中を覗いていたから風呂敷に包まれた箱を見ている。あれから袋の中を誰も触っていない筈だ。東雲も、それを知っている筈なのにどうしてそんなことを言うのだろうか。

目を白黒させて固まっている天愛を見て、八十彦と東雲の二人は顔を見合わせて、天愛の知らないところで笑った。

狐の主人と、東雲と天愛と寺島少年は、なぜか四人で座卓を囲って東雲の入れたお茶を飲んでた。寺島少年は遠慮してか、帰ろうとしたが東雲がお茶に誘ったのだ。

八十彦と東雲はゆったり座って寛いでいる様子だが、天愛と寺島少年はそわそわしていた。

なんだこの状況、と思うが二人ともそれを口には出せなかった。

八十彦は人前でだけして狐面を外すつもりがないのか、東雲にお茶を頼んでおきながら一口も飲んでいない。

四人の中心にある大きな座卓には、面の入った紙袋と、ちえ子の骨が入った小さな箱が置かれている。

「東雲、君達が来る前に向坂さん（こうさか）から連絡があつたよ。今日は面はもういいらしい」

「へえ、そりやまたなんで？」

「夕方から、出かけるって」

八十彦はそう言うのと、紙袋から面の入った箱を取り出した。中身が何か分かつている天愛は、その箱にさえ禍々しさを感じてしまう。一方の寺島少年は何を考えているのか分からない表情で、黙ってそれを見つめた。

東雲は、二人の様子を見て密かに苦笑した。

「君はさつき、この面と似たものを知つてると言つたね？」

「……はあ、」

「君の知っている面の、作者の名前は？」

「……一之瀬、八重蔵です」

一瞬不思議な顔をした寺島少年がそう答えると、八十彦は箱から出した面を天愛の方へ差し出した。

部外者の気分で二人の会話に耳を傾けていた天愛は、唐突に前に出されたそれに戸惑う。蛙は変わらず不気味な面構えをして、空虚

な眼で天愛を見つめる。

「……あの？」

「椿さん、裏見て」

天愛はそれに触れるのが嫌だった。が、八十彦にそう言われてしまったので、仕方なく受け取って裏を見た。ずっしりとしたそれは嫌に冷たかった。

表面とは違って古い木の色を残した荒い面には、真ん中に黒く、達筆で何か書かれている。

――一之瀬八重蔵。

たった今、寺島少年が言った名前と同じだ。寺島少年が知っている面と同じ作者なのだろうか。

天愛は八十彦の意図が全く解らなくて、多少慄きながらも八十彦の狐面を見た。微動だにしないその顔を見てもわかる筈もなく、今度は八十彦の隣に座る東雲の顔を見てみたが、東雲はただ苦笑するだけだ。

「やっぱり……一之瀬爺さんが作ってたのと、全く同じ形だ」

寺島少年は天愛が持つ蛙の面をしげしげと眺めながら呟いた。

近くで寺島少年の顔を見た天愛は、今更ながらよく見ると、その顔が見知った人の顔に似ていることに気づいた。

友達の、綾香に似ている。

奥二重の下にある真つ黒な大きな瞳も、通る鼻筋も。顔だけではない、その身に纏う雰囲気も少し似ている様な気がした。意識してみると、少年の声変わりのしていない声も綾香のものと近いもののように聞える。

寺島少年は天愛にじっと見つめられていることに気づき、少し顔を赤くすると前に座る八十彦に向き直った。

「あの。これ、どうしたんですか？」

「これ、とはその面のことかな？」

「はい……僕の知ってる人が、さっき言った一之瀬八重蔵が作っているお面と、そっくりどころじゃなくて、全く同じみたいなんです。

違うと言え、色が付いてるかついてないか位に見えます」

「それは昔、土師^{はぜ}さんと言う方から買い取らせてもらった物だよ……知ってるかな？」

そう尋ねられた寺島少年は、横に首を振った。

反応したのは、天愛の方だった。

『土師』なら、綾香の苗字だ。

この近辺では余り聞かない、珍しいその苗字は、関西から来た綾香の父親のものだった。

「……その土師さんって、土に師って書く土師さんですか？……もしかして、この近くに住んでます？」

「ああ、そうだよ。よく知ってるね」

間違いない。

綾香自身にも聞いたことがあるが、こちらで土師なんて苗字は綾香の家だけで、綾香はよく苗字を読み間違えられて困ると言っていた。

もしかしたら綾香はこの蛙面のことを知っていたのかもしれない。

「あら、お客さん来てはるの？ いらっしゃい」

のんびりとした声がして、天愛と寺島少年は振り返った。

染野だ。染野は天愛が手に持ったままの蛙の面を見て微笑んだ。

「それ、向坂さんに届けるんちゃうかったの？」

「明日持つて行くことになったんだ。色々あつて……天愛ちゃんと俺、袋間違えて持つて帰っちゃってさ」

「あら、誰かの悪戯かしら」

染野は先程の東雲と同じようなことを言つて、楽しそうに笑った。

「天愛ちゃん、それ面白いでしょう？ お客さんが来はる時は、狐の面じゃなくてそれに付け替えた方がいいって、何度も八十彦さんに言ってるんやけどねえ。その方が縁起が良し」

面白い、だろうか。

天愛からしてみれば狐面といい勝負だ。東雲からしてみれば、狐面なんかよりもその蛙面の方がよっぽど薄気味悪いのだろう。呪わ

れてる、と言つてた位なのだ。

東雲と天愛は同じく染野の言葉に苦笑いしていた。

「……縁起、いいの？」

その、不気味な蛙面が。

とでも言いたそうに東雲は聞いた。

「『無事帰る』つて言うからね」

「じゃれじゃん」

八十彦の言葉に東雲は苦笑したまま言った。

「『狐にばかされる』よりはいいんちゃうの」

染野は何故か蛙面を支持している。

そういえば、天愛が面接に来た日も、染野はそんなことを言っていた。あの時は染野の口調から、面白い蛙の面を思い浮かべていたが、こんな「呪いの蛙面」だったとは。八十彦がどちらを選んでいたとしても天愛への第一印象は最悪だ。出来れば選ぶ前にお面をつけないでほしいと天愛は切に願う。

「あの、すみません。僕もうおいとまします……用もあるんで」

暫く黙っていた寺島少年が、よく通る声で言った。

客ではあるが部外者の自分が、店員たちとお茶を飲むことがよっぽど居心地が悪かったのだろう。眉が下がり気味で少し情けない顔になっている。店員である天愛でさえもまだ慣れていないのだ。天愛はそんな少年の様子を見て、申し訳ないような、可哀想な気分になった。

「いや、ごめんね。引き止めちゃって」

東雲がそう言うと、寺島少年は情けない顔に微妙な笑みを浮かべ軽く会釈した。

「つか、最後に聞きたいことあるんだけど、その骨本当に売っちゃつていいの？ 後悔しない？」

東雲の言葉に情けなかった寺島少年の顔が少し険しくなった。

「先程も言いましたけど、その骨があると、母は駄目になってしまいます」

寺島少年はそう言うと、俯いた。

天愛と東雲からしてみれば初耳な話だ。

「母は、ちえ子がいなくなつてからもちえ子の影を追い求めているんです。代わりを見つければいいのに」

「代わり？」

天愛は驚いて顔を上げた。

「誰かの代わりが、違う誰かにできるの？」

天愛がそう言うと、寺島少年は苦しそくに顔を歪める。

八十彦と東雲と染野は、じつと寺島少年と天愛の様子を見ていた。

「……できないと思いますが、何もないよりは少しはましになる筈です。僕は、母がちえ子を失った悲しみをなくす為に、母の周りにあるちえ子の名残りを全てなくしてしまいたいんです」

「……」

そういうものののだろうか。

天愛には解らなかった。物がなくても、亡くした悲しみが癒える訳ではない。けれどももしかすると、その悲しみが遠のくのは、物があるよりもはやいかもしれない。

「まあ、君がそう思うのだったらいいんじゃないかな。生きてる、君がそう思うならね。俺達が君達のことに関心し出せることでもないし……けど、さっき言つたように取引が終わると、もう二度と、君はちえ子の骨を取り戻すことができなくなるけど、いいかな？」

「……っーかさ、お母さんの了承なしで売っちゃってもいいの？」

八十彦と東雲が続けざまにそう聞くと、寺島少年は苦々しい顔をして小さく頷いた。

取引が終了すると、もう二度と取り戻せない。

天愛は八十彦の言葉を疑問に思った。寺島少年がその気になれば、買い戻すこともできる筈だ。

「それじゃあ、失礼します」

寺島少年はそう言うと、店になっている土間の方から外へと出て行った。

それ以降、天愛がその寺島元基に会うことは二度となかった。

それから数日後、ちえ子の骨の正体を天愛が知ったのは、意外な、天愛の近しい人物からだった。

「夜渡蓮での、バイトはどんな感じ？」

いつもの調子で聞かれて、天愛は教科書から目を離して目の前に立つ綾香を見た。

ざわつく休み時間の教室の中でも、綾香の声はよく通っていて、ざわつきが気にならない程ずっと天愛の耳に入った。

艶やかなショートカットの黒髪は、大人びた美人顔の綾香の顔によく似合っている。

けれどそれは、中学生くらいのあの少年を天愛に思い出させた。

「ん。やっぱり結構暇だよ。お給料貰うのが申し訳ないくらいに」

「変人な主人と付き合っていく代金だと思えばいいんじゃない？」

「別に、変人ではないんじゃないかなあ……」

「……狐面つけてて、よくわからない、人でも？」

歯切れの悪い天愛の言葉に綾香は苦笑しながら言った。

天愛は思わずじつと綾香の顔を見つめてしまう。

「綾香って、やっぱり夜渡蓮に入ったことあるの？」

「昔、近所で友達と遊んでる時の罰ゲームでね。昔からあそこの店主は実は化け物だって、近所の子供の間では有名なんだよ」

綾香はそう言うとう肩を竦めてみせた。

「それに、うちのおじいちゃんも昔行ったことあるらしいんだけど、あそこの主人の変人っぷりは代々受け継がれてるものみたいだね。

多分、皆狐面を付けてるんじゃないかな」

天愛は目をまるくして綾香を見た。

代々、狐面をつけてる、ということとは、八十彦のあれは代々受け継がれてきたものなのか。なにか、意味があるのだろうか。

綾香は驚いた様子の天愛を見て、苦笑する。

「それに、昔私が罰ゲームで入った時、蛙の面を見たことがあるん

だけど、おじいちゃんも昔あの店で見たことあるみたい……おじいちゃんの知り合いが作ったものらしいんだけどね。変な話しなないけど……」

綾香の言う蛙面は、恐らく天愛がこの前学校に持ってきていたものと一緒のものだろう。

「おじいちゃんが、子供の頃あの店で、その面の出来上がった状態のものを見たことがあるんだって。その時は、おじいちゃんの知り合いはまだその蛙の面を完成させてなかったから、似たような物なんだと思っただけだけど、知り合いが完成させた面はその時見た物と全く同じものだったらしいよ」

綾香の言う言葉の意味が判らない。けれど、知っているような話しだ。

天愛は先日夜渡蓮に来た、綾香に似た少年の顔を思い出した。

「それに、猫の骨なんて買いつけてくれたらしいから、やっぱり変だよ。あの店」

「猫？」

「うん。ちえ子って言ったかなー多分」

その名前を聞いた途端、天愛は愕然とした。骨を買い取るということだけでもありえない話なのに、その骨の生きていた頃の名前が同じなんて、ますますおかしい。

まさかと思い、馬鹿な、とも思った。

けれど綾香が言ったことと先日 of 出来事は天愛の中でまるで1本の糸のように繋がってしまった。

そんな訳ないじゃない、と自分の考えを打ち消そうとしても、繋がってしまったものはなかなか離れてくれようとはしなかった。

だからその日はバイトの日でもないのに、学校が終わると直ぐに夜渡蓮へと向かった。

かなり馬鹿げた話だし、もし違ったら相当間抜けだ。

「あれ？ 天愛ちゃん」

道でバイクを押す東雲と鉢合わせした途端、先ほどの自分の考えがますます馬鹿らしいものに思えて後悔した。バイトの休みの日にまでやって来て、何をしているんだろうと思う。

天愛がまごまごしていると、東雲はにやりと笑い、まあ入りなよ、と軽い調子で言った。

「どうしたの？ 今日休みの日じゃなかったっけ？ …… まあ、大体予想はつくけど」

「あの、予想って？」

「土師さんの娘さん、天愛ちゃんと同じ学校に通ってるだろ？ 大方、友達とか？」

「…… どうして知ってるんですか？」

「土師さんはね、常連さんなんだよ。それに天愛ちゃん、土師さんの家がここら辺って知ってたみたいだから、もしかして友達なのかなあって思ってたんだ」

天愛は自分の知らないところで接点があったことにそわそわした。綾香も、何故黙っていたんだろ、と不思議に思う。

「で、先日の寺島元基さんのことについて、その土師さんの娘さんから何か聞いたかな？」

すらすらと出てくる東雲の言葉に天愛はぎょっとして、扉の前で立ち止まった。

東雲は振り返りかえると申し訳なさそうに、けれどやはりおもしろそうな色を瞳に滲ませて笑った。

「ごめんね。バイトが決まった時点で説明しとくべきだったんだろうけど、普通に信じられることじゃないから」

そう言って首に巻いていたマフラーを取り、鞆につっこむとカウンター代わりの木の机の下に入れた。

天愛もようやく足を動かし店内に入った。

夜渡蓮の中は暖色の電球のせい、昼間でも少し薄暗い。作られ

た場所も時間も全く違う物たちが隙間なく置かれていて、非現実的な雰囲気が出来上がっている。それに、あの狐の店主だ。先ほどまで頭の中で馬鹿にしていたことも、信じてしまいそうになる。東雲が言った言葉は、天愛の中の思い浮かびをますます確信に近いものにさせた。

「あの」

「まあ、八十彦さんにも説明してもらおうから……八十彦さん」
「っ！」

天愛は思わず体をびくつかせて後ずさった。

東雲が呼んだ途端に音もたてずに八十彦が、暖簾の間から狐面を覗かせたのだ。

「来たのか」

「八十彦さん、それやめようよ。天愛ちゃんマジでびびってるからつか、俺でもびびるから」

「そうか。まあ、上がってきなさい。君が聞きたがってることを説明しよう」

「……は、はあ」

悪びれた様子もなく言われた言葉に、天愛は擦れた声でなんとか答えると、どきどきと体を振るわせる自身の心臓の音を聞きながら、ゆっくりと八十彦と東雲がいる方へと進んだ。

「うちは色々事情があるから、アルバイトは滅多に雇わないんだ」

「どんなに好条件でも、こんな変な店ないもんなあ。正直そんなに人手もいらないんだけど」

「……」

「椿さんを八十さんが雇うって言って、実際椿さんを見た時は普通の可愛らしいお嬢さんやから、びっくりしたわあ」

「俺も、天愛ちゃんが此処に来た時に八十彦さんが電話で『その子をバイトで雇え』って言うてきた時はびっくりしたなあ。俺の場合は元々家同士の付き合いがあって、親が此処の事情を知っていたも

の、天愛ちゃんは通りすがりの女子高生だし」

「あの」

天愛はどう切り出したらいいいのか分らなくて、三人の話を黙って聞いていたが、痺れを切らして発言した。

それと同時に三人共すつと黙りこんで天愛の方をみたものだから、天愛は少し顔を赤らめて俯いた。

「あの……」

聞きたいことがあったが、どう聞いたらいいのか分らずに口籠もった。

しんつと静まりかえった中で、頭のは冷えていくのに、言葉が見当たらない。三人は、じつと天愛の言葉を待っている。

天愛は小さく深呼吸をすると顔を上げた。

「どうして、土師さんのおじいちゃんの寺島元基さんが、『先日』やってきたんですか？」

言ったあとで、自分の言葉の可笑しさに苦笑いしそうになった。

口元が笑みのかたちを作ることも叶わずにひくつく。

綾香の祖父の名前を聞いてみたらやっぱり『寺島元基』で、今はもういないと言う。寺島元基は、綾香の母方の祖父の名前だったのだ。もしかしたら同姓同名だけかもしれないが、綾香は、猫の骨を買い取ってくれた、とも言っていた。

天愛は、ちえこの骨は人間の骨だと勝手に思い込み、本人に確かめることはできなかったが、「ちえこ」はもしかしたら猫だったのかもしれない。

ペットロスの母親に心を痛めた幼い少年は、なんとかその猫のことを忘れさせようと手を尽くしていたのかもしれない。天愛は少年の様子から妹か何かだと思っていたが、猫だったとしても寺島少年の母親が大切に思っていたのならその悲しみは量り知れない。

それに、蛙の面のこともある。けれど、そうは思ってみるものの、何十年前もの綾香のおじいちゃんの子供の頃の話と、先日の出来事を結びつけるのはやはりあまりにも馬鹿らしいことだった。

突拍子のないことを言ってしまったのではないかと、後悔する。

「この店はね、さつき東雲が言ったように、変なんだ」

「へ？」

天愛は八十彦の言葉に間抜けな声を上げた。

八十彦の隣で、東雲がうんうんと頷いている。

「変に、時間が交差する」

「簡単に、大げさに言つと、タイムストリップみたいなもんだねー」

「……」

天愛は俄かに信じ固い、八十彦と呑気な声の東雲の言葉を呆然と聞いた。自分の中で馬鹿にしていた考えを簡単に、答えとして出されてしまつて混乱する。東雲が言つた「タイムストリップ」なんて大それたことは考えていなかったけれど、それに似た不思議なことがあるのだとはなんとなく思っていた。

「タイムストリップつつつても、俺達が色んな時間を好きに行き来する訳じゃなくて、客がたまーに勝手に違う時間の扉を開くんだけだ。ちなみに、俺の最初の体験は死んだばーちゃんの十八の頃、娘さんの時でした」

「夜渡蓮は昔から常にこの場所にあるけれど、そういう希少な客は取引が終了すると何故かもう二度とうまく同じ時間の夜渡蓮の扉を開けないんだ」

「だから、寺島さんも多分、もう二度と俺たちと会うことはないんじゃないかなあ。凄い確率でまた会うこともあるかもしれないけど、それは俺達にも分からない」

「……あの、本当ですか？」

天愛は二人が本気で言つてるのか冗談で言っているのか計り兼ねて思わず聞いた。余りにも可笑しな話し過ぎる。自分で思つておいて、二人の話を聞いても中々信じられることではなかった。

「……信じられないつてのが普通だよ。まあ、その内慣れるよ」

「たまに、ここにいる人間の身近な人も引き寄せられるのか、やつて来ることがあるから今は信じられなくても、きっとその内信じざ

る得なくなるんじゃないかな」

続けて言う二人に頂垂れる。

狐の仮面をつけた主人である八十彦がいるだけで、ここは充分異質な空間であるのに、その上場所自体がこんなおかしな所であるというのだ。

「あ、もしかして、自分の考えに否定をいれてもらってすっきりしなかった？　だめだめ、慣れてもらわなきゃ」

東雲が頂垂れる天愛に追い討ちを掛けるように明るい声でそう言った。

ちらりと見上げると、あの可愛らしい笑顔を満面に浮かべている。染野も楽しそうだ。狐面をつけている八十彦の表情だけが読めない。三人の視線を受けて、それを信じられない自分の方がおかしい風にも思えてくる。天愛はため息をつく顔を上げた。

驚きついでに言ってみるのもいいかもしれない。

「あの、彩織さん」

「なになに」

「そのお面、取ってもらえませんか……私、実は昔から狐のお面が苦手なんです」

「君が苦手なのは知っているけれど。悪いけど、それは無理だな」

「どうしてですか？」

「君がもつと驚くことになるからだよ」

「……驚くこと？　今だって充分驚いてます」

やけくそ気味にいう天愛を三人はおもしろそうに眺めた。

天愛の方は今まさに、狐につままれた気分だ。

「それ以上に、君は驚くことになる」

時間が交差するなんて馬鹿げたことよりも、お面の下に隠された八十彦の顔に驚くなんてことがあるのだろうか。

天愛は到底信じられなかったが、少しの好奇心も沸いてくる。

「怪我してるとかですか？」

「違う」

「鼻とか、目とか、部品が欠けてるんですか？」

「違う」

「見たことのないような可笑しな顔をしてるとか……？」

「違う」

「……天愛ちゃん、もしかして怒ってる？ おちついてー」

「落ち着いてます」

そう言つて天愛はもう一度ため息をついた。

八十彦はどうしても狐面をとるつもりはないらしい。

「だったら、辞めさせてもらいます」

「えっ！」

「まあ」

きつぱりと言い切つた天愛に東雲は大げさな声を上げた。同時に染野はぽけつとした顔で呑気な声を上げた。

天愛も自分がこんなことをあつさり言えるなんて予想もしていなかったが、変に勢いづいている今の内に言つてしまえと思ったのだ。「天愛ちゃん！ 落ち着いて、落ち着いて……八十彦さんも、なんか言つてよ！」

天愛の本気に気付いたのか、東雲はやけにおろおろとして八十彦に助けを求めた。

八十彦は狐面の下で目をすつと細めるとじつと天愛を見る。それは優しそうにも、人を馬鹿にしているようにも見える。

「じゃあ、ヒントをあげようかな。この面の下顔は、君にも見覚えがある筈だ」

「え？」

「そのうち、君の中の問題が落ち着いたら、見せてあげよう」
「問題つて」

「君が、どうして狐面が苦手なのか、とか」

天愛はその言葉に目を見開いて八十彦の顔を見た。
八十彦の顔のようにぴったりと顔についたそれは、馬鹿にしたように天愛に向けて真っ赤な口の端を吊り上げている。

「……苦手なのをなおせつてことですか」

「なおさなくても、慣れるだろう？」

「……」

八十彦から感じる威圧感の正体がようやくわかった。

狐面に対する恐怖のせいで狐面のせいだと惑わされていたが、独特な発音の声に他人が聞き入ってしまうような力があるのだ。

それでも。

天愛は上目遣いに八十彦の、狐面の穴から覗く瞳を睨んだ。

それでも、何様だろう。「見せてあげよう」とか「慣れるだろう？」とか。普通は人前でその面を取るのが礼儀ではないだろうか。血が上った頭で、ようやくそのことに気付く。

「夜渡蓮の店主が、変わり者で偏屈だって、本当だったんですね」

「ようやく気付いたの？」

そう言つて肩を竦める八十彦に益々腹が立つてくる。

今の天愛の頭からは先ほどの不思議な話しが一切飛んでいた。

東雲は天愛の言葉でぎょっとした様子で天愛の方を見て固まっていたが、やがて気付いたように声をあげた。

「まあ、ま、もうちよつと続けてみたら？ 天愛ちゃん。そういえば、染野さんのおいしいご飯もまだ食べたことなかったよね？」

やみつきになつちゃうよ！ それに、高校生で時給千円なんてここ以外なかなかないからさ」

「……そうですね。続けます」

「よかった！」

「彩織さんの、そのお面の下を見るまで」

「……」

東雲は大人しい天愛がこんな執念深さを発揮させるなんて予想もしてなかったのだろう。「よかった！」の表情のまま再び固まった。

「まあ、君にそれだけ続けられる根性があるならね」

八十彦が、天愛を煽るようにそう言った。

あの、昨日言ったのは本当に勢いで。本当は思ってもみなかったことで……。

そこまで考えて天愛は盛大にため息をついた。今更なに言ったって言い訳だ。そう思いつつも、次から次に湧いてくる言い訳を頭の中で持て余していた。できたら、昨日のことは戻ってやり直したかった。「じゃあ、辞めさせてもらいます」以降から。あの勢いはそこで止めておけばよかったのだ。

「——わっ」

「わあっ！」

「おはよー。天愛ちゃん」

「……おはようございます、東雲さん」

急に肩を叩かれ、驚いて振り返るとにこやかな東雲が真後ろに立っていた。悪びれのない笑顔を見て、天愛は少しうんざりする。

そんな天愛に気づいてか気づかずか、東雲はにこにこ笑ったまま、天愛が今最も思い出さくないことを言い出した。

「いやー昨日はびっくりしたよ。天愛ちゃんって意外と執念深い女だったんだねー」

東雲は冗談交じりに言っただけだろうが、天愛にとっては足取りを重くさせるものだ。さあっと血の気の引く頭で昨日の皆の視線を思い出す。いきおいで、彩織に物凄いことを色々言ってしまったのだ。

「あーっ」

「大丈夫、大丈夫」

急に声を上げて頭を抱えた天愛に、東雲はのん気な声でそう言って、慰めるように肩をぽんぽん、と叩いた。

なにが大丈夫なのかさっぱりわからない天愛は、思わずじとりと東雲を見てしまう。

「てか、今日は八十彦さんいないし」

「え？」

「買い付けに、ちょっと市まで出てるんだよ」

「いち？」

「うん。まあ、骨董市みたいな」

「はあ……」

天愛は少しほっとしながらも、嫌なことを先延ばしにされた気分になり、頂垂れた。けれどすぐ目の前のことではなくなったからか、少し心に余裕ができて、昨日の八十彦と東雲の言葉を思い出す。

時間の交差とかなんとか。

一日経てば昨日聞いた時よりも、天愛のなかではその話しは現実味がないものになっていた。

「……あの、昨日のことって本当ですか？」

「んん、嘘じゃないつもりなんだけど……まあ、信じなくてもいいよ。幽霊の話みたいなものでしょ？」

東雲は曖昧にそう言うのと片手で髪をくしゃつとした。

「幽霊の、はなし？」

「半信半疑。正体が分かりそうで、分からない」

「はあ」

天愛は力なくそう呟くと、前を見た。いつの間にか夜渡蓮の門をくぐり、東雲は門と店の間にある大きな松の木の下にバイクを停めていた。店の戸口まで続く石畳は、いつもきれいに掃除されている。小さな鈴の音が聞こえた気がして辺りを見渡したが、別に何も無い。門の内側に掛けてある風鈴は音が鳴らないことは、先日気づいたことだ。

たまに天愛は夜渡蓮でこの鈴の音を遠く近くで聞いていたが、それらしきものは見つけたことがなく、その度に少し薄ら寒い思いをしている。東雲は気づいていないのか、聞こえないのか、なんの反応も示さない。

この夜渡蓮に入るきっかけになったのが鈴の音だったから、天愛

はもしかしてなにかに憑かれているのかも、と最近思い始めていた。
「天愛ちゃん、入らないの？」

ぼんやりと奥の竹林の方に目を向けていた天愛に、東雲は戸の前から声をかけた。手にはヘルメットと古びた鍵を持っている。

「今日、染野さんもないんだ」

そういいながら硝子戸の木の淵にある鍵穴に鍵を差し込んだ。

がたがたと鈍い音がして戸を開くと、誰もいないからか、いつもより中は薄暗かった。

天愛が肩を強張らせたのに気づいたのか、東雲は苦笑しながら言う。

「まだ慣れない？」

「此処自体はそんな恐いと思ったことないんですけど……今日はいつもより暗いし」

「昨日あんな話、聞いたばっかだしね」

「……はあ」

「俺もいるから大丈夫だよ」

確かに、一人でなんてとても居ていられないだろう。東雲の外見はいかにも今時の人だから、正直この店の中で見ると少しほつとするのだ。けれどこの東雲だって、十分得体の知れなさがあった。

「……東雲さんって、藤浮の附属の大学に行ってるんですよね？」

「うん。そうだよ」

「友達とか、此処に来たりとかするんですか？」

天愛は荷物を木机の上に置きながら聞いた。東雲は離れたところで店の中の電気や、電灯の大きなランプをつけたりにしている。

橙色に染まった店の中は、それでもやはり少し薄暗い。

「来ないよ。此処でバイトしてることなんか二人くらいしか知らないし」

「そうなんですか」

東雲は友達が多そうなイメージが、天愛の中ではある。

机の上で東雲の置いた携帯のバイブが鳴って、ぼんやりしていた

天愛は小さく肩を震わせた。今人気のキャラクターの、小さなプラスチックのストラップが、振動でカタカタと揺れている。

「あの、東雲さん。鳴ってます」

「あー切るの忘れてた。ほっというて」

東雲はマフラーを外しながら、どうしてもよさそうにそう言った。友達からなのか、しつこい位に鳴り続けている。

天愛が気にして目を離せずにいると、東雲はひょいと机の上から取り上げて開き、鳴り続ける携帯の電源をあつさと切ってしまった。天愛が少し驚いてそれを見てみると、東雲はなんでもないようにまた携帯を元の場所に置いた。

「……あの、大丈夫なんですか？」

余計なことだと思いつつも、思わず聞いてしまう。

「だいじょうぶ、だいじょうぶ」

東雲が可愛らしく笑いながら、手をひらひらさせそう言うものだから、天愛は気にしないことにした。東雲はマフラーをはずして鞆と一緒に木の机の中につっこみ、肩を少し竦ませた。天愛はマフラーを巻いたままだ。店の中は外と余り変わりなく寒い。もしかしたら、外より空気が冷えているかもしれない。

「そろそろ暖房器具出さないかね……確か蔵の中に直したかな」

東雲はそう呟くと手を擦り合わせた。天愛も指先が冷えているのを感じて、手のひらに息を吹きかけた。

東雲は「ちよっと取ってくるよ」と言ってスニーカーを脱ぐと、それを手に持ち廊下の方へ行った。暖簾をくぐる時に、思い出したように振り返って天愛を見ると言う。

「そっぴや、言うの忘れてたけど、この店で携帯の電源はできる限り切つというて。それか居間の方とかに置いとくとか……携帯見てびっくりするお客さんもいるからさ。まあ、どのみち大概電波悪いんだけどさ」

「……はい」

びっくりするお客さん、とはやはりあれだろうか。

天愛は微妙な表情をして頷いた。東雲はその様子を見て少し苦笑していたが、すぐに奥へとひっこんで行った。

蔵へ行くのは中を通って行った方が早いらしい。

天愛は東雲の後ろ姿を見送ったあと、指定席になりつつある木の椅子に座った。座るところだけ、座り心地が良いように皮が張られていて中には綿が敷き詰められている、古びた椅子だ。これももしかしたら商品の一つかもしれない、と思い天愛はできるだけ椅子を引きずらないようにしている。

東雲がいなくなって、室温が二、三度は下がったような気がして天愛は小さく身を震わせた。

一応此処も住宅街の中にあるのだから、騒音や人の声が聞こえてきてもいいはずなのに、しんと静まりかえって全くなにも聞こえない。

天愛はできるだけ、机の上に置かれたままの東雲の携帯に意識を集中させた。

いかにも一時の流行もののそのキャラクターは、少しずつ表情と色が違うものが三体連なっていて、可愛らしいといえば可愛らしいが、馬鹿っぽく、嘘くさくて少し不気味だ。

携帯自体は、多分最新の型のものだろう。天愛はそういうのには疎かったが、最近CMで見たことがあるのを思い出した。

意識を集中させているつもりでも、やはり背後が気になって何度も振り返る。

暖簾の下から見える長い廊下は少し薄暗い。

薄暗いその中から、急に狐面をつけた八十彦がひよいと出てくる想像をしてしまう。その度に背筋に軽く悪寒が走っても、その想像は止められなかった。

それに、先程から耳についたままの鈴の音も離れない。

実際は今も聞こえているのだが、天愛は空耳と思い込むようにしていた。

「天愛ちゃん、ちょっとこっち来てくれない？」

のん気な東雲の声が聞こえて、天愛はほっとして長い廊下の方に振り向いた。

「は……」

はい。

そう返事するつもりだったのに、喉の奥で乾いた音がするだけだった。

暖簾の下からは、真っ赤な着物の裾から伸びる、小さな白い素足が見えた。天愛の方を向いて直立不動で立っている。暖簾で腰より上は見えない。

天愛は声も出せず、少しも動けないままその足を凝視した。指先と頭のとっぺんから、さあっと血の気が引いていく。

「いち」

その足の持ち主は、暖簾の間から白く細い腕をにゅっと突き出して天愛を指差すと、高い少女の声でそう言った。

そして次の瞬間、天愛が瞬きした間に微かな鈴の音を残して、忽然と姿を消してしまった。

呼んでもなかなか来る気配がない天愛を見に、東雲が店の方まで戻ると、天愛は東雲の方を向いて目を見開いたまま、じっと固まっていた。けれど東雲の姿を見ると、少しずつ眉ねを寄せて、目に溜まった涙をこぼさないようにするためのような、必死な顔になっていった。

「iiiiiiiiちって、」

「いち？」

震える声で言いながらも天愛は恐ろしいのか、首元のマフラーをぎゅっと握っている。状況の分からない東雲は、ただ首を傾げるばかりだ。

「市のこと？」

東雲はそう言ってみたが、天愛は自分の言ったことなのに「わかりませんっ」と言って首を横に振った。分からないのは、何があったか全く知らない東雲の方だ。今にも泣き出しそうに体を震わせる天愛に、困ったように頭を掻く。

「……てか、どうしたの？」

東雲は暖簾の下でしゃがみこんで、天愛の顔を覗き込んだ。ちょうど、先ほど少女の足が見えた手前辺りだ。天愛は顔を逸らして言った。

「女の子が、わたしのこと指指して『いち』って……」

そう言ってやはりまた悪寒が走って、天愛はますますマフラーをぎゅっと握った。

東雲は、大きな目を見開いて口を薄く開けた。

「へえ。それは、恐いね」

「……信じてくれないんですか？」

力の籠らない声で言われた天愛は、東雲の方を見て眉ねを寄せた。東雲は少し考え込むような顔になっていて、天愛に向けてた視線は、どこか遠くを見るようなものに変わっていた。

「ううん。ただ、本当に恐いなあって思ってた」

そう言う東雲の様子は前にも見たことがあったので、その時のことを思い出して天愛は身震いした。

前に天愛の話を聞いて東雲が、こんな風に考え込むようにしていた時も、天愛がここで鈴の音を聞いて正体不明の赤いものを見た時だった。その『なにか』が、先程の足の持ち主の着物と結びつく。まさか、あの時から？

天愛はそう思うと肩を竦ませて、マフラーを前に寄せた。

あの一瞬ちらついた赤い『なにか』が着物の端で、先程の足の持ち主だとすると、あの足の持ち主は寺島少年が来ていた時からいたのだ。もしかすると、天愛がくるずっと前からここにいたのかもしれない。

「あの、東雲さん」

「ん、なに？」

「あの女の子のこと、知ってるんですか？」

「赤い着物着た幽霊？」

天愛はその言葉に固まった。多分、東雲が言っているとおり、あの足の持ち主は幽霊だろう。そうじゃないと、説明がつかない。ぱつと現れたと思ったら、一瞬で消えてしまったのだから。

「俺は知らないよ。靈感零だから……八十彦さんと染野さんにもそんなこと聞いたことない。天愛ちゃん、憑かれてるんじゃない？」

東雲は少しおもしろがるように、最後にはにやりと笑って言ったが、それでも天愛の背筋はまたぞくぞくした。

「寒い？ ごめん、ストーブ取りに行つてたんだ……ちよつと取ってくるよ」

「私も行きます！」

天愛が必死に、叫ぶように言うと東雲は苦笑した。東雲が「じゃあ、ついてきて」と言うと、慌てて学校指定のローファーを脱いで手に持った。

暖簾をくぐる時に体を強張らせたが、先程の足の持ち主の少女はいなかった。まるで幻を見ていた気分になったが、それでもやはり恐怖ははつきりと残っている。

軽快に歩いていく東雲の後ろに隠れるようにして、恐る恐る廊下を進む。たまにぎしつと嫌な音がして、それさえも天愛の恐怖を増幅させた。

「し、東雲さん」

「んー？」

「そういえば、どうして赤い着物つてわかったんですか……」

天愛がそう言うと、東雲はきょとした顔で天愛を見た。

「どうしてって、さっき天愛ちゃんが言ってたよ？」

そう言われて思い出そうとしたが、全然思い出せなくて、天愛は眉を顰めた。もしかしたら、恐怖の余り色々無意識に口走っていた

のかもしれない。

「そうですか……」

「そうだよ」

東雲は苦笑すると天愛の肩をぽんぽんと叩いた。

蔵の中は、暗くて埃っぽかった。小さな箱みたいな外観とは違って、中は意外と広く、天井が高い。明かりは天愛たちが立つ入り口から、地面を力なく伸びる外の明かりと、東雲の持つ懐中電灯の丸い光だけだ。扉を開けると同時に、中からあふれ出てきた冷たい空気が足に当たって、天愛は肩を竦ませた。

天愛が躊躇していると、東雲は慣れた様子で蔵の中に入っていく。ごそごそとなにかを探し始めた。白く塗られた円柱型のレトロなストーブは、蔵の入り口に置かれている。天愛は訝しげに声をかけた。

「……あの、東雲さん？」

「うん？ なに？」

「ストーブなら、ここにありますが？」

「うん。だってそれさっき俺が出したから」

東雲は懐中電灯を右手に持って、がさがさと何かを探している。たくさん積まれた箱を下ろしては、開けて中身を探っていた。

天愛は眉を顰めながらそつと蔵の中に足を踏み入れた。外よりも冷たい蔵の中の空気は、不思議なおいがする。祖母の家の古い畳のにおいと、それは少しだけ似ていた。

辺りを見渡すと、木の箱やらダンボール箱が積まれていて、そのどれもが古い。見たことのないような古びた大きな乳母車や看板などは、そのまま置かれていて埃を被っていた。他にも木の箱に詰められた古い本の束や、木でできた、店にも置いてあった古くて大きい西洋のオルゴールなどもある。天愛の身長よりも大きなそれは、東雲にオルゴールと教えてもらうまで、なにか分からなかったもの

だ。

「ごちゃごちゃと物が多い蔵の中を、天愛がきよろきよろと見渡した。その最中に、また少し離れたところで、りんっ、と鈴の音が聞こえた気がして、はっとして慌てて東雲のところまで走った。

東雲は「たしかここら辺で見た気がするんだけどなあ」と呟きながら尚も箱を次々と探っていつている。

「なにを探してるんですか？」

天愛は東雲の横にしゃがみ込むと、東雲がごそごそ中を探っている箱の中を覗き込んだ。古い新聞につつまれた、黒い漆塗りの椀がちらりと見える。

「絵」

東雲は懐中電灯を天愛に手渡すと「照らしてて」と言っただけでまた中を探り始めた。天愛は言われたとおりに、次に東雲が下ろした木の箱の中を懐中電灯の丸い光で照らした。

「絵って、何の絵ですか？」

「天愛ちゃん知らない人だけど、多分見たら大体どういう人なのか分かる人の絵」

東雲は手を休めずにそう言った。天愛は訝しげに眉を寄せると小さく首を傾げる。東雲が言っていることは、全く意味不明だ。

「お店の方は、大丈夫なんですか？」

天愛は蔵の入り口の方に顔を向けて少し不安げに言った。今心配なのは、天愛たちがいない間にお店に人が来ることより、蔵の扉がひとりでに、勝手に閉まってしまいそうなことだった。

「多分、大丈夫だよ。それに、八十彦さんがいない間に天愛ちゃんに見せておかないと、と思って。あの人は君になにも言わな過ぎる」

「え？」

天愛は蔵の入り口の方から、また東雲の方に顔を戻した。懐中電灯の灯りが少しずれていたことに気づき、慌てて元に戻す。

小さな箱の中には、マトリョーシカの顔が見えて、天愛は顔を顰

めた。蔵に不似合いな、異国のカラフルな服を着たその人形の艶やかで少し嘘くさい顔は、東雲が携帯につけていたストラップのキラクターの顔にどこことなく似ている。そういえば、東雲は携帯を店に置いたままだ。ぼんやりと天愛がそんなことを考えているうちにも、東雲は次の箱を取り出していた。その箱が、天愛の持つ懐中電灯の白い光を反射したので、天愛は目を細めた。光の位置を少し移動させて、まだ開けられていない黒く艶やかな漆塗りの蓋を照らす。東雲が蓋を開けた時に一瞬古い紙のおいがしたが、東雲は少し顔を顰めたあと、「これはいいや」と呟いて直ぐに横によけた。そして、次々にまた違う箱を開けていった。

序々に懐中電灯の灯りがずれていくことに気づいた東雲は、顔をあげて天愛を見たが、天愛はそんな東雲の様子にも気づかず、東雲の開けた箱の中を凝視していた。懐中電灯の灯りはもう完全に天愛の真下を照らしているだけだ。

「……それ、」

天愛は掠れた小さな声で、呟くようにそう言ったまま箱の中身から目を離せないでいた。東雲は不思議に思い天愛が見つめている箱の中を覗き込んだが、入っているのはなんの変哲もない、古びたブリキの玩具だった。手の中に納まりそうな大きさのそれは、暗くてよく見えないが多分青い色をした車だ。おそらく小さな男の子がもともとの持ち主だろう。それが今はその子の元を離れてここにたどり着いている。サインペンで名前を書かれた後があったが、擦れてところどころしか読めない。子供らしい、拙い漢字だ。

「これがどうかした？」

「……いえ、なんでもないです」

そう言った天愛の声は、明らかに震えていた。眉ねには陰しく皺が寄せられている。

それは、天愛に見覚えのあるものによく似ていたけれど、どこにだってあったような、ありきたりな車の玩具だった。

天愛は東雲が黙りこくって自分を観察するように見上げているの

に気づくと、眉に寄せていた皺を引き伸ばした。りんつと鈴の音がした気がしたが、それをちゃんと聞き取れないくらいに天愛は動転していた。どうにか、なんでもないような顔を必死で作る。

東雲は怪訝そうな顔をしていたが、「そう？」と言うと立ち上がった。

「もういいや、ごめんね、つき合わせて。ありがとう」

そう言って笑うと天愛から懐中電灯を受け取り、蔵を出るように促した。

「……いいんですか？」

「なにが？」

「なにが、って……絵ですよ」

今度は天愛が怪訝そうな顔をしてそう言つと、東雲はあっけらかんとした顔で頷き天愛の背中をそつと押した。天愛はもう一度小さな車の玩具が入った箱を見たが、その箱はもう東雲によって元の場所に戻されていた。

どの箱も、もう何十年も同じ場所に置かれているような感じがする。きつと実際そうである品物もたくさんあるのだろう。それらの以前の持ち主たちは、この場所に、かつては自分の持ち物であったものが眠っていることを知っているのだろうか。それとも、そんな物を持っていたことさえ忘れてしまっているかもしれない。

それがどれだけ大切な物であったとしても、自分の手から離れてしまえば、あとは忘れる一方なのだから。

祭囃子の音に狐の仮面を被った男の子。その手にはその子が大事にしている青いブリキのおもちゃ。

小さな身長には、ジャングルジムは大きな遊び場だ。地面から離れて上まで登れば、視界が開けて自分まで大きくなつた様な気分になれる。

男の子を見上げると、真っ白な顔に真っ赤に切れたような口が笑いを作っていた。三日月型の三白眼の瞳に開けられた穴からは、光りを宿したこげ茶色の目が見下ろしてきている。

——きつねさん、きつねさん

くすくす笑いながらそう呼んだ小さな女の子は、確かにあの時の天愛だった。

その日、夜渡蓮にやってきた一人目の客は、優しそうな物腰のおじいさんだった。

その老人は帽子にスーツに杖と、緩やかに皺が刻まれた顔で、まるで穏やかな童話に出てきそうな風貌をしていて、いかにも老紳士という感じた。

常連の日埜さんという人だよ、と、東雲がこっそり教えてくれる。日埜は天愛の姿を見て一瞬驚いたような顔をしたので、天愛は首を傾げたが、本当に一瞬のことだったので誰かと見知った人と間違ったのかもしれない。

「……お嬢さん、」

「……はい？」

天愛は呼ばれ慣れない言い方に、思わず疑問系で返してしまう。多分人によつては、その呼び方一つで怪しくなってしまうけれど、その言葉を使う老人に違和感はない。

「新しいアルバイトの方かな？」

「あ、あい。椿と云います」

「ほう、綺麗な苗字だね。私は日埜と云います……お名前は？」

「天愛です」

椿が苗字だと分かった日埜に些か驚きながらも答える。日埜は店に入ってきた時に脱いだ帽子を片手で胸元に抱えると、目を細めて微笑んだ。柔らかで優しい雰囲気にも包まれて、天愛も無意識の内に頬を綻ばせた。

「晃くん、今日は狐はいるかね」

「うん。いるいる。奥に。呼んでこようか？」

「いや。あがらせてもらうよ」

日埜は天愛に軽く会釈すると、靴を脱いで勝手に奥へと入って行った。その様子を不思議そうに眺めていた天愛に、東雲は笑いかけ

る。

「日埜さんは、八十彦さんが子供の時から、此処の常連さんらしいよ」

「へえ……」

八十彦に子供時代があったなんて、天愛には想像もつかなかった。当たり前のことだけれど、人の子である限り八十彦も昔は子供だったのだ。なんとなく天愛の中で八十彦は昔話に出てくるような、妖怪に近い位置にいる。自分の雇い主に対してそれはあんまりだが、それ程までに天愛にとって八十彦は奇妙な存在だった。

殆ど店にいない八十彦は、外でも狐面をつけているのだろうか。どこに出かけているのか。

まだ半信半疑の店の事情よりも、八十彦が実は妖怪だった、という方が簡単に信じられる。

「天愛ちゃんが考えてること、分かるよ。八十彦さんにも子供時代があったなんて、信じられないよね」

「冗談めいた様子で言う東雲も、天愛の目にはたまに奇妙な存在に映ることがある。見た目は今時の普通の大学生で、最近では合コンに行くとかで天愛に店番と八十彦のお茶係を任せて仕事をサボったこともあった。けれど、たまに八十彦と似たものを醸し出すことがあるのだ。」

「……東雲さんは、いつからここにいますか？」

「俺はバイト始めたのは高校生のときからかな。始めて此処に来たのは中学の時だけだ」

それを聞いた天愛は、東雲の父親と八十彦の父親が知り合いだということ、前に聞いていたことを思い出した。

八十彦にも父親がいたのだ。今はいないのだろうか。姿を見たこともないし、話を聞いたこともない。

「あの、彩織さんのお父さんって……」

「あー……そっぴやどこ行っただろ。俺がバイトに来だした時には、もういなかったなあ……八十彦さんに聞いてみたら？」

今更いないことに気付いた様な東雲を天愛は不思議に思った。東雲の口調からするに、亡くなったわけではないのだろう。本当に謎だらけだ。

無粋な好奇心はあるが、八十彦にそれを聞く気にはなれずに、天愛は首を横に振った。

「そういえば、さつき日埜さん、彩織さんのことを『狐』って呼んでましたね」

日埜だけじゃない。此処に来る常連客の殆どが、八十彦のことをそう呼んでいるのだ。

「昔からの常連さんはね、此処の店主のことをそう呼ぶんだよ。見たまんまでしょ」

「此処の店主……もしかして、彩織さんのお父さんも？」

「鋭いねー。うん。八十彦さんのお父さんも、狐の面つけてたよ」

「……なにか意味あるんですかね？」

「んー？引き継がれる趣味？」

「……」

だとしたら、相当変な親子だ。

多分東雲の冗談だろうが、八十彦の父親も狐の面を付けていたというのは本当のことだろう。此処の店主は、狐の面をつけないといけないという、変な決まりでもあるのだろうか。

そんなことをぼんやり考えていて、ふと八十彦の言葉を思い出す。

——この面の下顔は、君にも見覚えがある筈だ。

その声色には、冗談もからかいも含まれていなかった。核心の籠った声。

言葉だけで思い出すと、どんな自意識過剰な人なんだろうと思ってしまう。

「有名人とか……？」

ぼそりと呟かれた声に、東雲は「え？ 有名人？」とオウム返しした。まさか聞こえてるとは思っていなかった天愛は、バツが悪くなりながらも小さめの声で答える。

「あの……八十彦さんが、前に自分の顔は私も見覚えのあるはずって言ってたんで……」

「で、有名人？」

「はい……」

小さく頷いた天愛は顔を赤らめた。突拍子のないことを言っているのは自分でも分かつている。

間もなく東雲が声を上げて笑い出したので、天愛は益々顔を赤くして口をついて出た言葉に後悔した。

「たしかに、近所の子供には不気味な屋敷の店の、狐の店主って噂で有名だけどね。それに子供の中には八十彦さんのこと、本気で妖怪かなかだと思い込んでる子もいるらしいよ」

本気とまではいかないが、天愛も似たようなものだ。

「古い家系だからね、近所のじいさんばあさんの中でも、ここの店主は妖怪だと思ってる人いるみたいだし」

東雲は笑いを抑えながら言った。

「どういうことですか？」

「代々此処の店主は狐面をつけてるってこと。多分、戦前から。いつから店を始めたかは知らないけど、店を始めるよりずっと昔から、この家系の男は狐面をつけてる」

まるでそのことを見知っているかの様に、確信の籠った声で言われた東雲の言葉に、天愛は言葉をなくした。綾香の祖父が子供時代にこの店の扉を開けたということは、その時にはもうすでにこの店はあって、東雲の言葉の通りならその時代の店主も狐面を付けていたということだ。そして、それよりもずっと前から。

「まあ、変わってるよね」

変わってる、と一言で片付けてしまった東雲を天愛は啞然とした顔のまま見た。

東雲はいつの間に鞆から取り出したのか、レポートを書いている。「変わってる、なんてもんじゃないです……」

「まあ、なんか理由があるんだろうね」

どうしてもよさそうに東雲は言う。確かに、代々の店主が狐面をつけているのには何か理由があるに違いない。それにどんな大層な理由かは天愛には予想もつかないが。

「ところでさ、気になってたんだけど、どうして天愛ちゃんは狐の面が苦手なの」

「え？」

「確かに気味悪いけど、本当に恐がつてるみたいだから」

「はあ……なんか、小さい頃から苦手なんです」

じわじわ。てらてら。

闇の中で広がる黒い染みを思い出して天愛は視線を落とした。遠くで聞こえる祭囃子も、煌めく明かりもその時は何も聞こえないし見えなかった。真っ暗になる視界の中で、嫌に白く目立つそれは、天愛をあざ笑うかのように赤い唇を嫌味に吊り上げていた。

「苦手なものって、人それぞれだよねえ。俺は小さい時から爬虫類が苦手。あと、苦いもの」

天愛の様子に気付いてか気付かずか、東雲はやけに明るいう言った。

「私は、甘いものも苦手です」

「あれ？ でも染野さんの作った甘いお菓子いつも食べてるよね」

「染野さんのお菓子は、甘すぎないし本当においしいんで」

「まあ、それは嬉しいわあ」

ほんわかした声で天愛と東雲は僅かに体を震わせた。いつのまにか二人の後ろにいた染野は、お盆にお茶とお菓子を載せて微笑んでいる。今日のお菓子はスイートポテトらしい。

「ちよっ、染野さん！ 恐いから！ 気配ねえんだから、急に後ろにこないでって前に言ったよね」

東雲は心臓の辺りを手で押さえながら、少しうんざりした様子で言った。そんな東雲の様子にも構わずに染野は、手に持っていたお盆の上の物を机の上に並べた。

「今日はスイートポテトを作ってみたの。焼きたてやから、あつ

たかいうちに食べてね」

「……無視ですか」

「あ、いただきます……」

天愛もまだ胸がどきどきしていたが、にこにこしている染野に頭を下げた。東雲も小さくため息をつくとありがと、と言ってまだ熱いお茶に手を伸ばす。

「染野さん、日埜さんに会った？」

「会ったよ。なんか折り入った話があるみたいやったけど……天愛ちゃんがここにいることに驚いてみたいやわあ」

「え？ 私ですか……？」

「ああ……此処ってバイト雇うことなんかないから。俺みたいに元々繋がりとかがあつたら別だけど、天愛ちゃんは全く何も知らない子だったしねえ」

「はあ、けどちょっと思ってたんですけど、私っていらないんじゃないですか？」

「まだ辞めたいの？」

「……というか、こう、ゆったりお茶できるくらいですし」

天愛がそう言つと、東雲と染野は顔を見合わせた。

「あのさ、天愛ちゃんが始めて此処に来た日、俺途中で電話取りに行つたじゃん？あれ、八十彦さんだったんだけど、その電話で急に『今店にいる子を雇え』って言い出したんだよ。あれは流石にびっくりしたなあ」

そういえば前に東雲はそんなことを言っていた気がしたが、あの時は頭が混乱していたし、それに今も天愛の頭からは血の気が引いている。

東雲が言ったことは、天愛を凍りつかせるのに十分な言葉だった。そんな天愛の様子を、二人は不思議そうに眺める。

「どうしたの？ 大丈夫？」

「固まつちゃったねー。どうしたの？」

「……あ、あの」

「うん？ なに？」

「恐すぎます……」

「え、そう？」

「そうって……だって、彩織さんは、私がいること知っててそう言っただんでしょ？ 別に東雲さんに聞いたわけでもないのに急に。なんで知ってるんですか！」

「ああ……なんとなく？」

特に不思議そうでもなくさらっと言った東雲に天愛は脱力した。

東雲が驚いたのはどうやらそこではないらしい。急に見ず知らずの娘を雇えと言いだしたことに驚いたのか、暇な店でこれ以上バイトを雇うことに驚いたのか、天愛は聞く気にもなれなかった。

染野は染野で、平然とした様子で東雲の後ろで微笑んでいる。

その時、暖簾が上がって、八十彦に会いに来た老人が出てきた。

三人が一斉に視線を向けると、日埜はあの穏やかな微笑みで返す。

「もう、帰りはるんですか？」

「ええ。狐にちよつと用を頼まれたんで……」

そう言った日埜が、手に小さな漆塗りの平べったい箱を持っていたのに天愛は気付いた。来る時には、確か持っていなかった。

日埜の手で隠れていてちゃんとは見えないが、艶やかな黒い面には水色と藍色でおそらく花の絵が描かれている。雅やかな色合いに、思わず目を奪われてしまう。

「この箱が、気になるのかな？」

日埜は、そう言つと手に持っていた箱を手のひらに載せて天愛に見せた。

あ、と東雲の小さな声が聞こえたが、その声の意味を考える暇もなく天愛は慌てて目を逸らす。

「あの、すみません……綺麗ななあ、と思って……」

東雲は何か言いたげに日埜の顔を見たが、天愛はそれに気付かない。

日埜は東雲の顔を見て微笑んだあと、天愛の方を見た。

「作者は不明らしいが、確かに、美しい物だと私も思うよ」

日埜が言ったので、天愛はもう一度それを見た。

蓋の中心に、大輪の花が一つ描かれているだけのシンプルなものだ。天愛には、その花の名前も分からなかったが、やっぱり綺麗だと思う。

つぶさにそれを見つめていると、あのりんつという鈴の音が聞こえて、天愛は目を見張った。日埜の後ろに赤い着物が見える。その着物の子供は日埜の足に隠れるような格好でやはり顔は見えなかった。

「日埜さん、これに包みますよ」

「ああ、すみません」

染野が、いつの間にか持つて来た風呂敷を机の上に広げた。日埜がそれを染野さんに手渡す間も、天愛はその赤い着物の子供から目を離せない。

皆、その子供には気付いていないようだった。東雲も、またフォークに刺してスウィートポテトに被り付いている。

見えないのだろうか。この中で、その鮮やかな赤は確かに目立つ筈なのに。もしかしたら、本当に天愛はこの子供に憑かれてもしているのかもしれないと天愛は思い、背筋に怖気が走った。

知らんぷりを決め込もうとしても、目が離せない。

染野が、箱を風呂敷に置いたちょうどその時、その子供は日埜の影から腕を突き出した。ぎょっと天愛は体を震わせたが、その腕はそのまま横に向けられ、風呂敷に包まれようとしている箱を指差した。天愛はその指が指す箱の方に目を向けたが、意味も分からずにまた赤い着物の子供の方へ目を向けた。けれど、天愛が再び日埜の影に目を向けた時には、もう赤い着物姿の子供はいなくなっていた。天愛はまた薄ら寒い気持ちになりながらも、やっと大きく息をついて、助けを求めるように手を彷徨わせ、隣で黄色いお菓子をおいしそくに食べている東雲の服を掴んだ。

「ん？ どうしたの？」

「あの……また」

天愛は、日埜の視線が自分に向いていることに気付き、声を小さくした。

赤い着物を着た子供が、今、日埜の後ろで立っていました、なんてとても言えない。きつと気味悪がられるか、変だと思われるだろう。

「また、今、子供が……」

「……子供？」

呟いた東雲が黙り込んだので、天愛は眉を顰めた。

前の話しはやっぱり冗談だとも思われていたのだろうか。ふざけた話しだと思って、忘れられたのかもしれない。

そもそも、あの赤い着物を着た人物は、確かに子供だったのかも、顔も見えていない天愛には分からない。

「前に言ってた赤い着物の子？」

暫く置いて東雲が天愛にあわせて小さな声で言ったので、天愛は何度も頷いた。

「どうぞ」

染野が、風呂敷に包んだ箱を日埜に渡す。日埜はいつの間にか靴を履き終えていたらしく、手に持っていた帽子を被るとそれを受け取った。

「ありがとうございます」

少し掠れた、温和な優しい声。

日埜が立っていた所には、なにもない。勿論、子供なんていない。「日埜さんが立ってた、後ろにいたんですけど……」

「そうなんだ。俺には見えなかった。やっぱ、天愛ちゃん憑かれてるのかもね」

言われて、天愛は顔を歪めると、無神経な東雲から顔を背けた。

小さな笑い声が聞こえてきて、いらっとする。本気にしていないのか、本気にしているにしろ、天愛が恐がるのを面白がっているのかは分からないが、本気の天愛からしてみれば只管不愉快だ。

「それじゃあ、お邪魔しました」

言つて、日埜は被った帽子を片手で頭の上に持ち上げた。一番近くにいた染野、東雲の隣に立つ天愛、東雲にそれぞれ会釈していく。深くお辞儀で返した天愛は、日埜が東雲に会釈したあと、誰もいない筈の場所にもう一度会釈したのには気付けずにいた。

日埜がやって来た次の日以降、天愛はあの赤い着物を着た少女らしき子供の姿をよく見かけるようになった。東雲がいつもバイクを停めている大きな松の木の影で、店の中で、客間の物陰で、通る度ぎしぎしと鳴る縁側で、裏の竹林の中で。あの少女のようなものは、ふとした瞬間に天愛の視界の隅に入っては、赤い残像を残して消えた。

最初は恐怖で動けなくなったりもしたが、そんなによく見るようになるのと流石に少しは慣れた。慣れたといっても、恐怖で背筋に走る悪寒は相変わらずで、ただ動けなくなるほどではなくなったただけだ。

そうよく見るようになって、どうしてか子供の顔はよく見えないうことが余計に不気味だった。その存在ははっきりしないけれど、天愛は少女だろうと思いついていた。そう思わないと、不確定な要素が多すぎる存在は益々不気味だ。

鈴の音は子供のものだと思っていた天愛だったが、それはどうやら違う、また別の場所から聞えることもあることに気が付いた。少女が姿を見せた一瞬の間に、何処か遠くの方で鈴の音が響いたことが一度だけあったのだ。耳を澄まさなければ聞き逃してしまう程の、本当に微かな音だったけれど、天愛は何故かそれはいつも聞く鈴の音と同じものだと思った。

初めて会った時以来、日埜も天愛がアルバイトにやってくる日に偶然毎回顔を出してくるようになった。と言っても、何かを買うでもなく天愛や東雲と、八十彦がいる時は八十彦と茶を飲み、店の中を物色もせずに帰っていくのだった。だから常連客と言うよりも、知り合いと言ってくれた方が天愛にはしっくりくるのだが、東雲はあくまで常連客だと言いつ張った。たまに大きな買い物や、変わった

物を売りにくるらしい。

日埜は柔らかい物腰で、相手を安心させるような雰囲気を持つ老紳士だったから、天愛はすぐにこの人に好意を抱いた。東雲は誰に対しても態度が余り変わらないからはつきりとはわからないが、東雲も少なくとも懐いているのだろ。日埜がやってくると嬉しそうにしていた。

冬から春になる季節の変わり目、天愛もこの不思議な店『夜渡蓮』によつやく慣れ始めた頃、八十彦に呼ばれて居間の方へ行くと、日埜と八十彦が座椅子に座っていた。

「……あの、なんですか？」

東雲は店の中で、呼ばれたのは天愛だけだ。

天愛は少し警戒しながら二人を見た。いくら『夜渡蓮』に慣れてきたとは言つても、狐面の店主にはまだ慣れていない。寧ろ印象は益々悪くなる一方だ。

優しい言葉使いに惑わされてすぐには気付けなかったけれど、八十彦はかなり傲慢な性格の持ち主だったのだ。とにかく人使いが荒いし、それも相手の都合を考えはしない。天愛はそこまで使われることはなかったけれど、東雲に対してはかなり我侬を通して、天愛はそんな場面を度々見ていて、益々この男が苦手になっていた。「日埜さんが、椿さんに渡したいものがあるらしいよ。そこにかきなさい」

八十彦は言つて、自分達の向かいにある座椅子を勧めた。相変わらず部屋の中は古書で散らかっている。染野がいくら片付けてもすぐにこうなってしまうらしい。そこかしこにある本を踏まないように気をつけながら、天愛は座椅子まで向かった。

天愛が座椅子の上で正座すると、日埜は納得するように微笑みながらうんうんと頷いた。

「……あの、日埜さん？」

「天愛さん。天愛さんは昔ここが山に囲まれた森の中だったことを知っているかな？」

「……え？ いや、知らないです。どうしてですか？」

「そこには、小さな村があつたんですよ」

天愛は、日埜の言葉に思わず怪訝な顔をしてしまった。何を言いたいのか全く掴めない。

「そこに住んでいた娘さんに、天愛さんはよく似ている」

「はあ、そうなんですか」

唐突過ぎて、天愛はぼかんとして間抜けに返した。村なんて、一体いつ頃のはなしだろうか。天愛が小さな頃にはこの周辺はもう、今と余り変わらない住宅街だったはずだ。

日埜は、気の抜けた天愛の反応を気にした様子もなく、足元に置いていた風呂敷包みを座卓の上に置いた。

「なんですか、それ」

見覚えがあるような気がしたけれど、それがどこで見たものなのか思い出せずに天愛は小首を傾げた。藤色の風呂敷に包まれているのは、黒い箱だ。日埜が取り出したその箱を見て、天愛はようやくそれをいつどこで見たのか思い出して、あ、と声を上げた。

黒い漆塗りの蓋の真ん中には、藍色と鮮やかな水色で描かれた大輪の花。日埜と初めて会った日に、日埜が持ち帰った物だ。

「ああ、覚えていたかな。けど、中身は見ていないだろう？」

静かにそう言つと、日埜はゆっくりと壊れ物を扱うようにその箱の蓋を持ち上げた。

中に入っていたのは、古ぼけた一枚の紙だ。かなり変色してはいるが、大切に保管されていたのだろう。破れも折れもない。

日埜はそれを箱に入つたままで天愛にさし出した。目で伺つと、頷かれて天愛はそれを受け取って紙を取り出した。やはり古い紙らしく少しパリツとしている。両手でしっかりと持つのは躊躇われて紙の端と端を指で摘んで紙を見た。古い紙のにおいがする。

その直後、天愛はその紙に描かれているものを見てぎょつとし、思わず紙を落としてしまった。

「す、すみません！」

「なにか、驚くようなものでも描かれていたかな？」

「いえ……」

天愛は紙を拾うと、もう一度そこに描かれているものを見た。

そこには少女が一人、上半身だけ真ん中にぽつんと描かれていた。茶色の着物を着た娘だ。分かりにくいがおそらく年の頃は天愛と同じ位だろう。色味は殆ど残っていない、顔も紙の色そのままだった。もしかしたらもともとから塗られていなかったのかもしれない。

そこまでは、なんの変哲もなかった。けれど、肝心の顔の部分。少女がどんな顔をしているのかもわからない。古ぼけた紙に描かれた少女は、狐の面を被っていたのだ。それは、八十彦と同じようなけれど天愛は、八十彦には感じるのとはまた別の、背筋がぞつとするような禍々しさを感じて、すぐに箱の中に紙を戻した。

理由も分からず、そのただの絵をなぜか恐ろしく感じたのだ。

「あの……なんなんですか、それ」

「俺の、先祖だよ」

ずっと口を閉ざしていた八十彦が言った。

「え？ 先祖……？ どうしてそれを日埜さんが持つてるんですか？」

「ああ、元々日埜さんの家にあつたものだから。この間はそれを日埜さんに返したんだ」

「うちは代々絵師の家系でね」

「はあ……けど、どうしてそれを私に見せるんですか？」

「怖がると思って」

「……は？」

「狐の面が怖いんだろう？」

天愛は呆気に捕られて八十彦の狐面を凝視した。普段ならそんなことはできないけれど、狐面に対する嫌悪感よりも驚きと呆れの方が勝つたのだ。まったく、昼行灯のような性格をしていながら、嫌がらせには労力を注ぐ。けれど、日埜までもがそんなことをわざわざするとはとても思えなかった。

「なにか、意味があるんじゃないですか？」

「ないよ」

「こらこら、狐。悪ふざけが過ぎる」

きつぱりと言い切った八十彦に、日埜が苦笑しながら言った。

「この絵では面を被っていて分からないが、このお嬢さんと天愛さんは、まるで双子のようにそっくりなんだよ」

「はあ、そうなんですか」

またもや天愛は間抜けな調子で答えた。他にどうやって答えればいいのか、分からないのだから仕方がない。似ているからと言って、それが一体なにか意味があるのだろうか。

日埜の次の言葉を待って、じっと見つめていると、あることに気付いた天愛は目を大きくした。

赤い布が、日埜の座る座椅子の後ろからほんの少しだけとび出している。あの少女だ。

「だから天愛さんと初めて会った時は、正直少しびつくりしたよ」

日埜は気にした様子もなくゆったりとした調子で続けた。気付いていないのだろう。天愛の方は、その布に目を引かれて仕方がない状況だ。それにやはり不気味過ぎる。

「あ、あの。この絵の子って、彩織さんのご先祖なんですよね？
だったらどうして日埜さんがその顔を知ってるんですか？」

天愛が日埜の座椅子の方をちらちら見ながら言つと、八十彦と日埜は目を合わせて、日埜の方は少しきよとした顔をした。

「ああ、先祖って言ったのは、狐の嘘だよ」

「……あの、彩織さん。わたし、店に戻っていいですか？」

「うん？ どうして」

「うんざりです」

「君も、言つようになつたね」

言つて八十彦は、狐面の下でくつくつと笑った。

その様子に苛立ちが募る。この店にはもう二ヶ月近くアルバイトに来ているのだ。いくらこの狐面の店主と顔を合わす機会が少ない

とは言っても、少しは慣れ始めている。八十彦が被る狐面を見ると、毎度背筋をぞわぞわとしたものが背筋を駆け上がるけれど、それが恐れに変わる前にいつも八十彦は天愛がうんざりする様な言動をする。

いつも天愛をからかって楽しんでいるが、天愛が反撃を行うことは難しかった。八十彦が打撃を受けるところなんて天愛には想像もつかないし、天愛が反撃のつもりで言葉を返したところで、意にも介さない。そしてそのことで天愛がフラストレーションを溜める様子を見て、八十彦は楽しんで、天愛はまた悔しい思いをする。天愛にとって、かなりの悪循環だ。

天愛はこのところ、自分がここでアルバイトをしたいと言った時に、東雲が必要以上に喜んでいた意味を今更ながらに理解していた。東雲は天愛がやってくるまで、理不尽な嫌がらせを一身に受けていたのだ。天愛がやってくることでそれが分散、または全て天愛に向けられるのだと思っていたのだろう。

天愛としては、蜘蛛の糸に飛び込んでしまった虫の気分だ。

せめてもの抵抗に、最近は受け流すことをやつと覚えてきた。

「じゃあ、わたし本当に戻りますね」

そう言っただけで立ち上がった時に、鈴の音が聞えて天愛は殆ど無意識に振り返った。赤い着物はまだ日笠の後ろでひらひらと動いている音が鳴ったのは、裏にある竹林の方からだ。天愛たちのいる部屋からは縁側を通して、竹林がよく見える。

「どうかしたのかい？ 天愛さん」

「いえ、なんでもありません。それじゃあ日笠さん、失礼します」

天愛は深くお辞儀をすると、少し慌てた様子で部屋をあとにした。薄暗い竹林の方から鈴の音が聞こえて、ますます不気味になったのだ。

天愛が部屋を出て行くと、日笠は天愛が凝視していた竹林の方を探るように見ていたが、結局なにも見えなかった。八十彦の方は、

染野が淹れたお茶を啜っている。

「狐、お前は本当に悪ふざけが過ぎる。お前の父も、そんなには酷くなかったぞ」

「そうですか？ あの人は、悪ふざけの達人でした」

おどけた様子もなく言う八十彦に、日埜は思わずため息を漏らした。大体、悪ふざけの達人というのもおかしな言い方だ。

「まあ、いい。それにしても今更だが、どうして夜渡蓮に縁も所縁もないあの娘さんを雇うことにしたんだい？」

「縁ならとうの昔に。それに、似ているからです」

言って八十彦は指指した。その指先は、漆塗りの箱を通り過ぎて日埜の方を指す。

「そこで、着物を揺らしている娘に」

天愛が店に戻ると、東雲は暇そうに硝子瓶を磨いていた。今日も客は少なく、暇すぎるほど暇なのだ。店内の商品が必要以上に綺麗に光っているように見える。別に東雲は商品を磨くことを趣味にしている訳でも、メインの仕事にしている訳でもない。

天愛を見て、「なんのはなしだった」と興味なさそうに聞いてきた。

「何の話しもなかったです。変な女の子の絵を見せられて、その子は私とそっくりなんだよって言われただけでした。いつもの嫌がらせです」

「天愛ちゃん、別にあの人はいつも意味なく嫌がらせをするわけじゃないよ」

「あるんですか？ 意味」

「あると思いたい。そうじゃないと、報われない」

硝子瓶を磨きながら言う東雲を天愛は、思わず哀れみの混ざった目で見てしまう。

「それにしても、最近来ないですね。えと……希少な？ お客さん」

「ああ、そうだねー。けど、そんなしょっちゅう来るわけじゃないから」

東雲は笑いながら言って、硝子瓶を机の上に置いた。磨くことに飽きたのか、その目はきよろきよろと、することを探して店内を見渡したが、最後には隣に座る天愛に辿りついた。

「どんな、絵だった？」

「え？ あ、狐の面を付けた、女の子の絵でした」

東雲は、いかにも興味があるようにふんふんと頷く。

「それって、誰なんだろうね？」

「昔、ここに村があつて、そこに住んでた子だつて聞きました」

「村？ 一体いつの話しなんだそれ。それしか言つてなかったの？ 八十彦さん、一体なにがしたかつたんだろ」

「そりゃあ、いやがらせなんじゃないですか？」

「そんなの、嫌がらせのうちに入らないよ。てか、暇だねー。希少なお客さんどころか、普通の客も来ないね」

頼杖について眠そうに言う東雲を横目で見ながら、天愛も硝子戸の向こう側を見た。白線を引かれたアスファルトの道路の向こうには空き地が見える。草が生え始めたその場所の向こうの方には、古びたレンガの塀が見えた。いつもと変わらない風景だ。

天愛はふと首を傾げた。寺島少年がやって来た時、外の風景はどうなっていたのだろうか。今と変わらない風景だったように思うが、意識をして見ていなかったからだろうか。どうしても思い出せない。もし、本当に寺島少年が過去から夜渡蓮へやってきたというのなら、その背景が今と同じでは違和感がある。

「あの、東雲さん。前に寺島っていう男の子が来たじゃないですか？ あの子がこの店に入ってきた時、外の風景ってどうなっていました？ どうしても思い出せなくて……」

聞くと、東雲は少し眠そうに、ああ、と頷いた。

「覚えてないってことは、劇的な変化があった訳じゃないってことだよ」

「へ？」

「外は、今と同じ風景だったよ。干渉してきたのはあの男の子だけだ。あの男の子だけが、門をくぐってこの店にやってきた。だから別に俺達にあちらの風景は見えないよ」

「そういうもんなんですか……」

「あんまり深く考えない方がいいと思うよ。考えても答えなんか多分見つからないから。俺ももう諦めてるし。不思議なことが多すぎるだろうけど、まあそのうち分かることもあるんじゃないかなあ」

もう何年も前からこの夜渡蓮に通っている東雲が言うのだから、その通りなのだろう。通い始めてまだ数ヶ月しか経っていない、ましてやあの現象に一度しか遭遇していない天愛に、夜渡蓮の真実なんて知ることはいできない。

ただ、なにか掴めそうで掴めないものが、この店には漂っている。それは八十彦や東雲の言動の端々や、赤い着物の少女、それにあの狐面などに、見え隠れしては天愛に少しの違和感を残すのだ。けれどその違和感の原因も、なにか知ろうとしても脇を通り過ぎていく。「東雲さんは、彩織さんのお面の下の顔を見たことあるんですか？」
「あるよ。まだ先代がこの店の店主だった時、八十彦さんはお面つけてなかったし」

「……どんな顔してるんですか？」

天愛が何故か少し後ろめたくなりながら聞くと、東雲は首を捻った。

「別に……普通だよ？　そういえば俺、八十彦さんとちょっとだけ似てるって言われたことあるなあ。八十彦さんが言う、天愛ちゃんが見て驚くつてのがよくわからないけど」

「実はおじいさんだったりとか」

「しないしない。そうなると先代が化け物になっちゃうよ。八十彦さんはあんななりだけど、若いよ。推定二十二、三歳」

「推定？」

「実際ちゃんと歳聞いたことないから。あんま気にしたこともない

なあ。八十彦さんに直接聞いてみれば？」

「いや、いいです」

出来る限り自分から八十彦に話しかけたくなかった天愛は、きっぱりと断った。

「あなたが椿さんかな？」

「え？あ、はい。そうです……けど」

「綺麗な苗字だね。私は日埜と云います……お名前は？」

「……天愛です」

数ヶ月前にも聞かれた名前を天愛は、少し顔を顰めながらまた名乗った。

既視感という言葉が一瞬頭を掠めたが、日埜との出会いは実際にあったことで、昨日も日埜はいつものように夜渡蓮にやってきてお茶をしてから帰って行ったのだ。

天愛は、埃を拭き取ろうと手に持った木箱を慎重に元の場所に戻しながらも、目の前に佇んで穏やかな笑顔でいる老人から目を離さなかった。

落ち着いたスーツ姿に、帽子といういかにも老紳士らしい風貌。

白い髭を蓄えた口元は、優しく笑みのかたちを作っている。どう見ても、日埜その人だ。

けれど、日埜は、天愛に対して初対面のように振舞っている。苗字だけは知っているようだが、それも天愛の名前なのかどうか確認してきたのだ。

タイミングが悪いことに、いつもなら助け舟を出してくれる東雲も、今は八十彦に言われた使いで、外に出ている。天愛は、日埜がこんな悪ふざけみたいなことをしない人だと信じていたから、まさかボケてしまったのではないかと不安になって視線を泳がせたあと、結局助けになる人物も見つけ出せずに、日埜に視線を戻した。今日は染野もいないのだ。

「……あの、日埜さんですよね？」

「ええ、そうですか？」

「昨日も、お茶と一緒に飲みましたよね？」

天愛の様子を少し不思議そうに見ていた日埜も、その言葉で合点がいった様で「ああ、」と声を上げた。

「お嬢さんは聞いていないのかな？」

「え？ なにがですか？」

実はボケているんですよ、と告白されたらどうしようなどと失礼極まりないことを想像した天愛は、内心ときどきしながら首を傾げた。

「日埜は、二人いるんですよ」

「……え？ ふたり？」

全く意味を理解できない天愛は、本気で首を捻った。日埜は、分裂でもするのだろうか。

時間帯をランダムに行き来する骨董店があるくらいなのだから、分裂する老人がいてもそこまで不思議ではないかもしれない。そこまで考えておいて、天愛は自分の考えの滑稽さによりやく気付き、顔を顰めた。

「ええ。日埜は二人いるんです」

日埜はもう一度そう言くと、店内をぐるりと見渡した。

「何年経つても、ここは代わり映えしないな」

まるで何年もこの場所に来ていなかったように日埜が言うものだから、天愛はもう考えることを諦めて、東雲が帰ってくるのを待つことにした。

「物の出入りが少ないみたいなんで……」

「そのようだね。その部分も代わらない。ところでお嬢さん、狐はいるかね？」

「あ、はい。奥の居間に……」

「そうかい。上がらせてもらってもいいかな？」

「はい。どうぞ」

老人が日埜本人だと疑わない天愛は、何も考えずにいつも通り奥へ入ることを促した。老人は帽子を片手で胸元へ持っていくと、一礼をして靴を脱ぎ、いつもの様に土間を上がって暖簾の向こうへ行

つてしまった。居間の方から聞えてきた八十彦の言葉に、天愛はまた首を傾げることになる。

「ああ、お久しぶりです。日埜さん。どうなさったんですか、あなたが此処へ来られるなんて珍しい」

落ち着いてはいるが八十彦の声色には、わざとなのか、ほんの少しの驚きの響きが混ざっていた。

それにしても、珍しいとはどういうことなのか、天愛にはやはり全く分からない。日埜は、ここ最近毎日のようにこの夜渡蓮へやってきてはお茶を飲んでいる筈なのだ。八十彦とは、確か一昨日の夕方頃にお茶をしていた。八十彦がいう風に、そんな遠い日ではない筈だ。

「久しぶりだね。どうだい、ここ最近のところは。狐は見つかりそうなのかい？」

「途方もないですね。……けど、最近あの娘がよく現れるようになりました」

天愛はつい耳を澄まして二人の会話を聞いていたが、急にいきおいよく開いた硝子戸の音に肩を震わせた。静かな店内に、大きく響き渡った硝子戸の音のあとに、更に元気な声が響く。

「ただいまー。東雲、ただいま帰りましたー」

「……東雲さん、もしかして酔ってます？」

やけに上機嫌な東雲の顔を見て、天愛は眉を顰めて聞いた。外はまだ明るい。それに、東雲は八十彦の使いで常連客の家に行っていた筈だ。それなのに、入ってきた東雲からは、かすかに酒のにおいがする。

「いや、ちょっとお客さんに飲まされちゃってさー。俺の酒が飲めないのか！　って……本当に言う人いるんだねえ」

東雲は、困った困った、という風に、わざとらしく肩を竦めた。

「お水、飲みます？　というか、飲んでください。入れてきますから」

「わるい。ありがとう、頼んだー」

顔色は全く変わらないけれど見た目よりは随分と酔っていたのか、東雲はそう言うと言商品の椅子に座り、頭を後ろにぐだつと垂らして目を閉じてしまった。そんな東雲を横目に、天愛は土間を上がる。台所へ行くには、八十彦のいる居間の前を通らないといけないが、今は来客中だから大丈夫だろう。

急いで台所へ向かう途中、ちらつと居間の方を見てみると八十彦と日笠は何か話し合いをしているようで、その内容がやはり全く理解できない天愛の耳から耳を通り抜けた。染野がいないのだから、自分が二人にお茶を出さないといけないことを思い出した天愛は、慣れた様子で茶器を出すと、お湯を沸かし始めた。

夜渡蓮にきだしてから、お茶は数え切れない程淹れている。お茶を出しても、あの狐の主人は口にすることはない。少なくとも、八十彦が茶を飲んでいるところを天愛は見たことがなかった。その癖、お茶を淹れると定期的に言ってくるのだ。

湯を沸かしている間に、東雲の水を切り硝子のコップに注いで、二人分の湯のみも出した。八十彦の屋敷は、食器までもが大抵骨董だ。それも普通に使っているが、聞いたところどれも大した価値のあるものばかりらしく、天愛はいつも割らないように緊張していた。

盆に載せた急須に熱した湯を入れると、渡り廊下の方から居間へ向かった。部屋の前で膝を折る。こんなことは此処へくるまでしたことがなかったが、染野を見て覚えた。八十彦を尋ねてくる客は老年寄りが多く、たまに気難しい人もいるのだ。今では天愛も慣れたものだった。

「失礼します」

「どうぞ」

「お茶をお持ちしました」

「ああ、ありがとう」

八十彦の言葉を合図に、天愛は居間へ入る。いつ入っても、居間は乱雑に置かれた本棚に入りきらない古書で散らかっている。それ

は客が来た時でも変わらずだ。

天愛がお茶を炬燵机こたつに置く間、先ほどまで続いていた二人の会話は止んだままだった。居心地が悪くなつた天愛が伺うように目線を上げると、まじまじと天愛を眺めていたらしい日埜と目がばっちり合つてしまい、天愛は咄嗟に目を逸らした。

「いや、本当によく似ている」

「そうでしょう。とくに、目元なんかはそっくりでしょう」

当の本人である天愛を目の前に置いて、二人がそんな会話をしたものだから、天愛は立ち去るにも立ち去れず、けれど益々居心地悪く眉ねに皺を寄せた。

もしかすると先日、日埜が言っていた、昔この周辺に住んでいたという娘のことだろうか。その娘は、この二人にとつて余程重要な人物なのかもしれない。天愛はこの間といい、今といい、感慨深げな二人の様子を見てふとそう思った。

「お嬢さんは、昔この場所にあつた村に住んでいた娘さんを知っているかな？」

日埜に聞かれて、天愛は隠しきれずショックを顔に出してしまう。やはり、日埜はボケてしまったらしい。知っている人がボケることがこんなにショックなことだとは。それは、つい先日日埜本人からされた質問だ。

天愛がショックで茫然と日埜を眺めていると、八十彦が苦笑混じりに言つた。

「日埜さん、それはこの前言いました。彼女は、そのことだけは知っています。絵も見せたんですよ」

「ああ、それは悪かつたね。しつこく言ってしまうところだった」

「……あの、忘れちゃったんですか？」

天愛がぶしつけな言い方かもしれないと心の片隅で思いつつもそう聞くと、八十彦が面の下で目を細めた。その目は、微笑んでいるようにも見えるが、狐面で顔を覆い隠している以上、知ることはできない。面の方は、当たり前だが相変わらず人を馬鹿にしたよう

な不気味な笑みを湛えている。

「日埜さんは、忘れてはいないよ。知らなかったただけだ」

日埜が何かを言う前に、八十彦がそう言った。

「あの、すみません。よく意味が分からないです……」

「ああ、君は別に意味を知らなくてもいいよ」

さらりと言われた八十彦の言葉に、天愛は一瞬哑然としたあとすぐに腹が立ってきて、乱暴な仕草で盆を掴むとそのまま東雲の為に用意しておいた水が零れる位の勢いで立ち上がった。失礼します！と叫ぶように、明らかに苛立ちを含んだ声で言つて、そのまま居間をあとにし、苛立ち紛れに引き戸を閉めた。トンツと小気味よい音が廊下に響いたが、天愛は腹立たしい気持ちを抑えることができず、ずんずんと店へと向かった。

「ああ、ありがとう」

戻ってきた天愛を見てか気配を察してか、天愛が台所へ向かう前と同じ体制のまま、東雲は間延びした声で礼を言つたあと、のろのろと体を起こして天愛が机に置いた盆の上を覗き込んだ。切子硝子の中にあつた筈の水は、天愛が乱暴に扱つた為に、今は殆どお盆の上で、薄い水の膜を作っている。コップの中には、一口ほどの水しか残っていない。

東雲は先ほどの天愛の起こり具合を耳にしていたのか、微妙な笑い方をしたけれど何も言わずにそれを一気に飲み乾した。

「すみません、本当はもうちょっと入ってたんですけど……お水。いれなおして来ますね」

「いや、調度いいよ。ありがとう。腹、たっぷんたっぷんだしさ。ところで、またなんか八十彦さんに言われたの？　つか、誰かお客さん来てるよね」

東雲が黒い革靴を指差しながら言うものだから、天愛は何度も頷いた。

「あの、日埜さんが変なんです！　昨日会つたのに、私のことを知

らないような感じで、最初に会った時と同じ風に、名前を聞いてきたんです！ 昨日も一緒にお茶を飲みましたね、って聞いたら、日埜は二人いるんですよって！ あの。もしかしたら日埜さん……こんなこと言うの失礼って分かっているんですけど、あの……少しボケてきたんじゃないかって思ってた……」

一氣にまくし立てる様に、最後は少しいにくそうに天愛は言った。

東雲は天愛が言い終わると同時に、堪えていた笑いを盛大に吹き出した。酔っているからか、余程天愛がおかしなことを言ったのか、東雲はそのまま文字通り、腹を抱えて笑う。

「は、はら痛い……！」

「笑いごとじゃないです！」

「ちよっ待つて！……そんな真剣そうに……！」

「真剣なことなんです！」

天愛が言いたいことが伝わらない悔しさからか、目を潤ませて必死に言うと、東雲は益々笑いだし、待てというように手のひらを天愛に向けた。

「彩織さんは、日埜さんは忘れてた訳じゃなくって知らなかっただけだって言うし、意味が分からないって言ったら、私には関係ないからみたいなこと言ってきたんです！ 一体どうということなんですか！？」

「最初に、答えは出てるだろ」

東雲は今だ止まない笑いを堪えながら、泣きそうないきおいで問い詰めてきた天愛にそう答えた。

「双子、だよ」

「え……？」

「八十彦さんも人が悪いなあ。それに日埜さんも。はっきりと断言はいいのにねえ。見ただけじゃ、どっちがどっかなんて判らないくらいそっくりなんだから。日埜さんは、二人いる。血を分け合った、兄弟。双子のじいさんだよ」

天愛は声も出せずに、脱力した。

「本当ですか？ おじいさんの双子なんて見たことないです。それに、あそこまでそっくりな双子がいるんですか？」

「いるんだなーそれが。それに、おじいさんの双子も、おばあさんの双子もそりゃいるよ。まあ、日埜さんの場合は見事としか言いようがないけど。実際二人並べて見ても、どっちがどっちかなんてさっぱりだよ。性格は……どうなんだろう。穏やかそうな雰囲気とかは一緒だけど、どっちもよく分からない人だからなあ」

東雲は言つと、まだ残っている酔いの為か額を手のひらで擦った。
「いつも来ている人の方が、お兄さんだよ。確か。まあ、それも実は曖昧ではつきりとは分からないんだけど。弟さんが来るのは珍しいなあ。何か言ってた？」

「いつも来られてる日埜さんと、全く同じ質問をされました。昔村に住んでいた娘によく似ているって。親戚とかですかね？」

「親戚だったら親戚って言っんじゃない？ 初恋の相手とかかもよ」
東雲は最後にからかうように言つと、にやつと笑った。けれど東雲が言うことも可能性としてはないわけではないので、天愛は腹を立てることもなくただ首を傾げるだけだった。

暫くそうやって二人で日埜や八十彦についての憶測を出していったけれど、東雲に関しては殆どふざけた馬鹿馬鹿しいものばかりだった。その間客は全くこなく、奥からは八十彦と日埜の声が時々聞えてきた。

「あれ」

天愛は赤く染まっていく外の景色を眺めながら、小さく首を傾げた。何かいつもと違うことに違和感を感じていたのだが、その原因が何か分かったのだ。

今日は、鈴の音を聞いていない。

天愛にとつてはいいことなのだけど、このところ毎日のように耳にしていたものだから、なければないで違和感を感じてしまう。それに、赤い着物の少女の姿も目にしていない。

「なに、なんかあった？」

「いや……今日は、鈴の音を聞いていないんです。それに、女の子も見えていません」

暇そうにしていた東雲が、少しばかり目を輝かせて聞いてきたので、天愛は少しばかり迷ったあと正直に話してしまった。天愛も同じく暇を持て余していたものだから、話しのネタにもいいとぼんやりと考えたのだ。

東雲は首を傾げる。

「なに、最近は毎日聞いたり見たりしてたの？」

「……はい、実は」

「ふうん。てかさ、天愛ちゃん、その女の子の正体とか考えたことがある？」

「そりゃあ、見る度そのあとで考えるんですけど、全く分からないです」

「八十彦さんなら知ってるのかなあ。もともとこの店に居たっぽいしね。もしかしたら、染野さんとかもなんか知ってるかも」

思いのほか東雲が真面目に答えてくれたことに少し驚きながらも八十彦には元々聞くつもりがなかった天愛は染野の名前が出たところで深く頷いた。染野にも聞いて、返ってきた答えがもし天愛の思っていた以上に不気味なものだったら嫌なのだけれど、最近の出現率を考えると聞いてみた方がいいのかもしれない。どのみち一人で考えていても、答えはきつと出てこないだろう。

「東雲さんは、考えたことがあるんですか？ 女の子の正体」

「うん。実はさ、俺も見たことがあるんだ。天愛ちゃんが来るよりも前……中学くらいいん時に。このくらいの背のさ、赤い着物に山吹色の帯の女の子だろ？」

東雲が言いながら手で少女の身長を表す姿を、天愛は茫然と眺めた。東雲が手のひらを動かしているのは、調度、いつも見る少女の背丈位だ。確かに合っている。

「本当ですか？」

「うん。本当」

うんうん、と頷きながら言う東雲を凝視しながら、天愛はあからさまに眉を顰める。

「どうして、言ってくれなかったんですか？　ていうか、嘘ついてたんですか？」

「ごめんね。あんまりにもいちいちおもしろい反応だったからさ。それに俺、今は見えないもん。見える天愛ちゃんがちょっと羨ましくって」

「羨ましくなんかいいですよ！　すごい怖いんですよ！」

まるで八十彦のような物言いをする東雲に、天愛は詰め寄った。けらけらと笑う東雲に苛立ちを募らせた天愛は、自身を落着かせる為に深呼吸して制服のスカートを握る。相手はただの酔っ払いだ。それにしても悪ふざけが過ぎると思うけれど、此処では怒った者が負けなのだ。

「……で、東雲さんはどんな風に考えたんですか？　女の子が誰なのか」

「んー？　座敷童子とか？」

「ふざけないで下さい」

天愛もそう考えたことがあったけれど、東雲からははぐらかそうとしている気持ちが見えたので、その意見を叩き落した。

冷静になって考えてみれば、こんな話を真剣に話し合うのもおかしいことなのだけれど、場所が場所だ。それに、天愛もこの件に關して真剣なのだ。

手の届きそうなところにあるのに掴めない答えほど、気になるものはない。

「ふざけてないふざけてない。この家の守り神みたいなもんじゃない？　それかただの幽霊か。ほら、見たとおり古い家だからさ。あ。あと、あの女の子がこの店の不思議と關係してるのかなーって考えたことはあるよ」

そんなことを考えもしなかった天愛は、その意見に妙に感心して

しまう。天愛の中では、それぞれ別件として考えられていたのだ。天愛にとって、幽霊のことはもはや疑いようのない真実で、時間交差の話しの方はまだまだ半信半疑の状態だ。同じ場所の出来事なのに、分けていた。

けれど、繋げるというのも突飛な話しかもしれない。それぞれのことに何か意味があるのなら、もしかしたらその意味でそれらは繋がるのかもしれない。

真剣に考える天愛の横で、東雲は文机に頬杖をつき、大きな欠伸をした。

「……ああ、そういえば多分そろそろだねえ。お客さんが来るの。今回は、目を凝らして見てるといいよ。何か分かるかも」

「え。まさか、あの希少なお客というやつですか？ いつごろ……？」

「あと、二、三日つてとこかな」

「どうして分かるんですか。前に、鼻が利くとかなんとか言っただけ」

「ただの勘だよ。けど、どうしてか外れたことがないんだなーこれが。次はどんなお客さんだろうねえ」

気の抜けた笑みを浮かべながら、東雲はどこか楽しそうに言った。

酷く冷たい風が吹く日だった。

東雲は用事があるからと休みをとって、店内には天愛と染野が二人でいた。暇だからと、染野は昔話を始め、天愛も染野が作った梅昆布茶を飲みながら染野の若い頃の話しを聞くことになった。ここ数日のところ、夜渡蓮の客数は以前のものより少なく、学校が終わってから働く天愛は客を全く見ていないほどだった。そしてその日もそんな調子だったのだ。ただでさえ普段から少ないのに、本気で店が潰れる心配を天愛はしてしまう。

「女学生の時は、映画をよく見に行ってたんよ」

女学生という響きに高等さを感じた天愛は、興味を惹かれて目を大きくした。天愛は以前から、染野はお嬢様育ちだろうな、と思っていたのだ。お店をしていたからもあるかもしれないが、一つ一つの動きが上品なのだ。お茶の淹れ方一つをとっても、身の内から滲み出すものもあるのか、天愛が真似しようとしても到底真似しきれないだろう。

染野は昔の光景を思い出したのか、楽しそうにくすくすと笑う。

「今みたいに綺麗な色もついてないけど、二週間に一回の楽しみやつたの」

「二週間に一回もですか？」

天愛は思わず聞き返した。いくら好きと言っても、かなりの割合ではないだろうか。染野は天愛の驚きっぷりに恥ずかしくなったのか、はにかむように笑った。柔らかに微笑むその様は、この老人を少女の様にも見せる。美少女だったであろう染野の若い頃の姿を想像しながら、天愛は染野を見た。

二人がそんな風に会話を楽しんでいる時だった。珍しい客人がやってきたのは。

天愛は、戸が開かれたすぐあとにやってきた覚えのある耳鳴りに、

ぎゅつと顔を顰めた。染野の方は特に変化もなくいつものほほんとした様子で、客人にいらっしやいませ、と告げた。

耳鳴りの意味をすぐに理解した天愛は、すぐに東雲の言葉を思い出して戸の方を見た。入ってきたのは、スーツ姿をした若い青年だ。その姿は小奇麗で、帽子を被って手には大きな革の鞆を持っている。スーツの上から羽織ったコートは、質が良さそうだ。その青年が戸を閉め切る前に、天愛は戸の向こうを見つめた。硝子戸の向こうは、いつもとなんら変わりのない景色。けれど、戸の隙間から見えた景色が、一瞬自分の見知っているものとは違ったような気がして、天愛が目を円くしている間に戸は閉められた。硝子戸の向こうは、いつもとなんら変わらない風景だ。ほんのりと赤く染まり始めた道路を小学生くらいの子供たちが楽しげに通り過ぎていく姿が見えた。

「こんにちは。こちらに、狐の店主はいらっしやいますか？」

柔らかな声で天愛は先ほど入ってきた青年に目を向けた。優しい顔には、人懐こい笑みが浮かんでいる。狐、と言うからには此処の店主が狐面を付けていることを知っていてやってきたのだろう。

天愛は困った様に染野を見た。目の前に立つ青年が違えようもなく『希少なお客』であることは分かったのだが、どう対応しているのか分からない。間の悪いことに今此処にいるのは天愛に染野の二人だけだ。天愛はまだ新米アルバイトで、染野は八十彦の世話をするお手伝いさんで普段店に出てくるとも滅多にない。けれど、そんな天愛の心配を他所に、染野は浮かべた微笑みを崩すことなく小首を傾げた。

「店主は今出ておりまして。御用でしたら私がお聞きしますが」

落ち着いた様子で言う染野に天愛は心底ほっとしたが、ふいに青年に見られていることに気付き背筋を伸ばした。その様子を見てか青年はくすりと笑う。

「いえ、急用ではありませんから。また改めます。けど、その前にお店を見せて頂いても？」

「どうぞどうぞ」

愛想良く答えたのは染野で、天愛は慌てた様にこくこくと頷いただけだ。そのことでか青年がまた笑んだので、天愛は恥ずかしくなり俯いた。どうやら、相手には天愛の慌てっぷりが丸分かりの様だ。

天愛は、染野の言動である程度緊張を解してはいたが、解けきった訳ではない。一度目の時は事後に知ってしまったが、今はこの客がどういう客なのか分かつているのだ。半信半疑だったとはいえ、いざその客を目の前にしてしまうと信じきっている自分がいることに気付いていた。それに、先ほど戸の隙間から見えた景色だ。ほんの一瞬のことであつたから、幻かとも思つたのだが、青年の身なりはどこか古めかしい。今時こんな若い男性で、スーツ姿にツバ付き帽子を被る人などいるだろうか。極めつけはその手に持つ革のトランクだった。夜渡蓮でも革のトランクが商品として置かれているが、それと青年の持つ物は似通っている。一見してお洒落にも見えるそのトランクとスーツを合わせているところが、どこか古めかしく怪しかった。けれど、青年の髪色は薄茶色で顔立ちもどちらかというと、今時と言つてもおかしくはなかった。最近の若者の様にも見えるのにそんな格好をしているから、青年は益々怪しく天愛の目に映つた。一体、いつの時代の人なのだろうか。近世には違いないだろうが、見ただけでは分からない。もしかすると、ごくごく最近なのかもしれない。

青年は、天愛の不躓な視線にも気付いていないのか、わざと気付かないふりをしているのか、慣れた様子で店内を見回つた。様々な型のランプに虫取り瓶、鉛筆削りに蠟燭立て。中でも青年の気を引いたのは、小さな銀の羊だったらしい。青年の親指よりも少し大きいくらいのそれはイギリス製の物だと、天愛は以前東雲から聞いていた。

青年はその銀でできた小さな羊を摘み、持ち上げるとまじまじとそれを見た。

「それが気に入りましたか？」

染野がいつの間にか淹れ直してきた三人分のお茶を文机の上に並

べながら聞くと、青年は困ったように微笑んだ。人好きしそうな笑顔に天愛は徐々に残っていた緊張を解いていった。

「ええ。これを頂けますか？」

「ありがとうございます」

天愛は青年からその羊を受けとった。小さいのに、中々ずっしりとしたそれは毛並みまで精密に表現されている。以前天愛が金額を聞いた時には驚いたものだが、青年はそれを聞いても驚いた様子もなく長財布から数枚の札を取り出し差し出した。けれど、それを受け取らないといけない天愛は差し出された札を見て目を円くした。青年が差し出したのは『千円』とは書かれているが、天愛の見たことのないものだったのだ。けれど歴史の授業で何度か目にしたことのある絵を見て、天愛は眉を顰めた。

「聖徳太子……？」

「三千円、ちょうどお預かりします」

そうにこやかに言つて、札を凝視して動かない天愛に戸惑った表情を浮かべていた青年から染野は札を受け取った。偽札か、はたまた玩具のお金かと疑っていた天愛は染野の行動に驚いたが、はっとして慌てて銀製の羊を包んだ。相手はいつの時代の人なのかも分からないのだ。天愛の知らないお金を持っていたのも不思議ではない。

「すみません。お待たせしました」

小袋に入れたそれを手渡された青年は、ありがとうございます、と先ほどのことなどまるで気にしていない様に言つて微笑んだ。

「学生の様だけど、この手伝いをされているのかな？」

青年に聞かれて天愛ははい、と頷く。すると青年は笑みを深くして、染野の方を見た。

「私は、何度かこの店に訪れているのですが、覚えておられますか？」

その青年の言葉に、天愛も隣りにいる染野を見た。染野も笑みを絶やしはしなかったが少し不思議そうに小首を傾げた。

「以前は、これと同じ様な銀製の白鳥の置物を買わせて頂きました。

その時は男の子もいたのですが」

その言葉によやく合点がいったように、染野は小さくああ、と呟いた。けれど首を横に振ると青年に対し、申し訳なさそうな顔をした。

「すみませんこんな年寄りになると、中々物覚えが悪くなってしまう。特に若い方のお顔は、若い方が私みたいなおばあちゃんの区別が付かないのと同じくらい、覚えるのに苦労するんです」

染野の言葉が嘘だと知っていた天愛は、目をぱちくりさせて染野を見たあとに青年へと視線を向けた。青年は特に気分を害した様でもなかったが、少しだけ哀しそうな表情を見せた。男の子とは、恐らく東雲のことだろう。この青年も十分に若く東雲とそこまで年が離れているようには見えないが、見た目ほど年若くはないのだろうか。

天愛がじつと青年の姿を眺めていると、青年は染野に向けていた視線を天愛に移して苦笑する。

「お嬢さんも、その時おられましたよ。狐の店主の娘さんですよね？」

天愛は目を円くした。狐の店主の娘、ということは八十彦の娘ということになる。狐面を外しているところを見たことがないから、天愛には八十彦の本当の年齢など分からなかったが、それでも体型などを見てみるとまだ若いように見える。とてもじゃないが、高校生にもなる娘がいる様には見えなかった。どうもおかしい。青年が言うことは、矛盾だらけだ。それに、天愛が此処の娘である訳がない。

「……え。いや、私は……」

ただのアルバイトです。そう言おうとした天愛を止めるように、染野はそつと天愛の腕に掌を当てた。

「そんなこと、言ったかしら？」

「ええ、貴方から聞いたんですよ。染野さん」

それには流石の染野も驚いた顔をした。この青年は誰かと人違い

をしている訳ではないらしい。以前、この夜渡蓮にやってきて確かに白鳥の置物を購入したのだろう。天愛から見れば染野はこの青年を知っている様にも見えたが、知らないようにも見える。どこか探るように話しているふしがある。それに比べてこの青年は染野のことを確かに知っているのだろう。天愛に関しては本当に人違いだろうけれど。

その時、りんつと鈴音が鳴り天愛は後ろを振り返った。ここ数日間には聞かなかった音だ。廊下の方にじつと目を殺して天愛はあの赤い着物を探してみたが、どこにも見当たらない。

「おや」

感心したような声で呟いた青年の方を聞き、天愛は我に返って姿勢を正した。けれど当の青年は声と同じ様に感心した様な表情で、じつと暖簾の向こう側に続く薄暗い廊下を見つめたあと、天愛を見た。

「どうやら、貴方は狐と縁があるようだ」

「……狐、ですか？」

「ええ。狐です。黄金色の、見事な尾を持つ狐だ」

狐と言われて咄嗟に八十彦の狐面を思い出していた天愛は、青年が言う本物の狐を示すであろう言葉に戸惑った。分かるはずもないのに助けを求めるように染野の方を見ると、染野は二人の方を見ずにただ黙って茶を啜っていた。

「あの、狐なんて見たこともないんですけど」

よくよく考えてみれば、天愛は本物の狐も見ることがない。小学生の頃、祖母が北海道旅行へ行った時に買ってきてくれたポストカードで初めてその姿を知ったくらいなのだ。縁があるとは思えな。えない。まさか、また奇妙奇天烈な話しになるのかと思えば、天愛はそれを避けたくて逃げ口を探し始めた。オカルト話しはもうたくさんだ。時間を行き来する骨董店に狐面の店主。赤い着物の正体不明の子供、時折聞こえる不思議な鈴の音。それらに慣れつつはあるが、流石にそれ以上のことが降りかかると頭がこんががりそうだ。

青年は手で口元を覆い隠すと、何かを考えるような表情で店内をぐるりと見渡した。当惑したままの天愛はそんな青年の仕草にも気付かずに、視線を彷徨わせていた。ぐるぐると回る思考を押し留めるのに必死なのだ。青年が最後に自分を見て笑ったことにも気付かず「それでは、後日また来ます」とやけに爽やかに言われ、ようやく顔を上げた。

「ああ、名乗り忘れてました。黒葛原守衛つじはら もりえと云います。狐の店主にどうぞ宜しく、とお伝え下さい」

青年はにこやかに言うと、小さなビー玉を天愛に手渡した。訳も分からずに天愛が目を白黒させているうちに、青年は優雅なお辞儀をして店を出て行ってしまった。その時にも見えた戸の間からの景色に天愛は目を疑ったが、硝子戸が締められればその景色も、たった今まで此処にいた青年さえも幻だったような気がした。けれど、手元に残るビー玉は本物だ。

「……染野さん」

「なあに？ 天愛ちゃん」

最後、何も話さなかった染野は柔らかに笑いいつも通りの口調で聞いた。

「なんですか、今の人」

「さあ。また来られるみたいやから、その時に聞いてみたらいいと思うよ。さあ、私は狐の店主の散らかった本でも片付けてこようかしら。天愛ちゃん、店番宜しくね」

染野はよっこいしょ、と立ち上がると三人分の茶器が載ったお盆を持って去っていった。

人差し指と親指の間でビー玉を転がしながら、天愛はそれを光りに透かす。少し気泡の入った薄い水色のビー玉だ。それは少し懐かしい気分になる物だった。

それを渡された理由も、次に青年がこの店の門をくぐってやってきた時に聞いてみよう、と思った。

その日の帰り、店を出た天愛は意外な人物が門前に佇んでいるの

を見て目を円くした。薄暗い場所で電柱の影に隠れるようにしていたから人がいることに気付かなかった天愛は、びくりと体を震わせたあと、ぼかんとその顔を眺めた。相手は街灯で照らされた青白い顔で笑う。

「綾香……？ どうしたの？ こんなところで」

「いや、ちょうど近く通りかかったからさ。もしかしたらもう終わる頃かなあつて思ったんだ」

「寒いから中に入ってくればよかったのに」

そう言つて天愛はマフラーにしている大判ストールを手繰り寄せて、肩を竦めた。今日は染野しかいなかったから、綾香が夜渡蓮に入っても八十彦と顔を合わせるといふことはなかったのだ。正確には、面を合わせるだが。外は冷えるし、天愛の友人が店に入ってきたとしても染野は文句を言う様な人ではない。むしろ歓迎してで迎えてくれただろう。そう思い天愛は橙の灯りで包まれた硝子戸の向こうを見た。電気は点けていったままでいいと言われたから、そのままだ。外から見たほんのりと明るいその室内は、やはりどこか異質なものに見える。

「ねえ、最近おもしろいことはあつた？」

まるで久しぶりに会ったかの様な綾香の口調に、天愛は怪訝そうに眉を顰めた。綾香とは今日も朝から顔を合わせ、学校が終わると同時に天愛は夜渡蓮へ、綾香は部活へとそれぞれ別れたのだ。それからまだ四時間ほどこか経っていない。それに、普段綾香はそんなことを聞かないのだ。そこで、天愛はあることに思い至りああ、と呟いた。

「夜渡蓮のこと？ とくになにもないよ」

天愛は、綾香や他の誰にも夜渡蓮で起こった不思議な出来事のことを話していなかった。言つても、冗談か頭がおかしくなつてしまったのではと疑われるのが関の山だ。特に夜渡蓮に不快感を抱いている綾香には、冗談でもそんなことは言えない。

二人は喋りながらどちらともなくゆっくりと並んで歩き出した。

街灯で伸びた二つの影は、長く暗い。天愛は、いつもそんな影を見るとぞっとする。いつもなら東雲が駅まで送ってくれるのだが、東雲がいない時、天愛はこの道を一人で帰るのがいつも恐かったから、綾香が来てくれたことに少しほっとしていた。

「狐の店主は相変わらず変だけど？」

「そう、店主は相変わらずだけど」

本当に苛立ちを含んだ口調で天愛が賛同すると、綾香はおかしそうにくつくつと笑った。

「狐面の店主に、古めかしい骨董屋があ。まるでホラーだね」

ついでに顔の見えない着物の少女に、得体の知れない鈴の音までついてくる。

「けど、天愛はちよつとその場所に馴染んできたみたい」

その言葉に天愛は反論することはできなかった。確かにあの店は、当初天愛が思っていたほどに居心地の悪さを感じる場所ではなくなっていた。恐らく天愛が慣れてきたせいもあるのだろう。狐の店主はあの横暴さと不気味な狐の面を抜けば、案外普通の人間の様にも見えるし、染野の作る食べ物おいしい。それに、東雲とは最近友人の様にもなってきた。東雲は、同じ敵を持つ時折裏切る仲間と言ってもいい。時間どうこうの不思議はさておき、天愛はあの赤い着物の少女にも鈴音にも、裏に広がる薄気味悪い竹林を見ることが慣れてきていた。

「けどさ」

街灯に群がっていた蛾の一匹が、羽をばたつかせながら天愛たちの前を横切った。白いその姿は薄暗闇の中でも目立つ。綾香は指先で二度、自転車に付いたベルの表面を弾いた。鈍い音が人気のない住宅街の道に、やけに大きく響く。

「慣れた頃に、思わぬ落とし穴に嵌るもんだから気をつけてね」

まるで根拠のない言葉だ。そこにはからかいも含まれている。けれど、それが嫌な予言のようにも聞こえて、天愛は寒さに肩を竦めた。

「それって、ラムネのだよね」

眠そうな、欠伸混じりの声で天愛は顔を上げた。

所狭しと並べられた商品の間の細い道で、東雲はしゃがみこんで大きな箱を掃除している。その大きな箱は海賊船に乗っていきそうな古びた木でできたずっしりと重い箱だ。人二人でやっと持ち上げられる。

「これですか？」

「うん。それ。どうしたの？ 懐かしいなあ」

東雲の言葉で、天愛は納得した。先日客である青年が天愛に手渡したビー玉は、ラムネの瓶に入っているビー玉とそっくりなのだ。もしかすると、本当にラムネのビー玉かもしれない。天愛は青年の顔を思い出して顔を顰めた。あれから一週間経つが、日をまた改めて来ると言った青年は、それっきり姿を現す気配もない。東雲にそのことを言つと、東雲はもしかするともうこないかもしれない、と言った。

「この前、東雲さんがいない間に来たお客さんがくれたんです」

天愛がそう言つと、余程意外だったのか、東雲は目を円くして天愛の手のひらに載せられたビー玉を凝視した。

「それを？ お客さんが？」

聞きなおして首を傾げる。けれど、箱を拭く手は止められることなくせつせと動いている。

「希少なお客さんが、ねえ。ふうん」

「え、なにかあるんですか？ もしかして、物貰ったりしちや駄目とか……」

「ふうん、別にそんなんじゃないよ。ただ、意外だなあと思って。それで、そのお客さんは何か言つてた？」

その意外さがどうしてなのか分からない天愛は小首を傾げた。希

少な客が来たと聞いた時は大して興味がなさそうな顔をしていた。それが、今になって興味が湧いてきたかの様な口ぶりにも不思議さを感じたが、割とこの男も気まぐれなところがあるのだ。

天愛は小さなビー玉をブレザーのポケットに入れて頷いた。染野のことや天愛のことを知っている様だったということももう伝えている。他にも、青年はよく分からないのことを言っていた。

「私が、狐と縁があるって言っていました」

「へえ」

びたり、と手が止まった。

「誰なんだろうね、その人」

東雲は、天愛の言葉のことを別段不思議に思ったわけでもないらしい。ただ、青年が何者かが気になったようだ。先ほどまでほのかにあった笑みは消え、表情のない顔で箱を見つめている。その様子になにやら只ならぬ雰囲気を感じた天愛は、不安になった。けれど、それも束の間のことだった。すぐに東雲の顔には先ほどまでの柔らかい表情が戻り、につこりと微笑んだ。その表情を見て、天愛はあ、と思う。青年と東雲は笑い顔が少しだけ似ている。だとしたら、寺島少年と綾香が血縁者であったように、東雲とあの青年も血縁者なのかもしれない。それは突飛な考えだと天愛は自分自身で思ったが、以前東雲はこの店の者と関係のある人間が現れる確率も高い、と言っていたのだ。

悶々とそんなことを天愛が考えているうちに、東雲は吹き掃除を終えて天愛の横に座り込んだ。シャーという、はねと歯車が回る音と、カチコチと振り子の揺れる音がやけに耳につき、天愛は柱に掛けられた振り子時計を見た。こんなにも可動する音がうるさい時計を見たのは、ここに来て初めてだった。最近では慣れてきていたが、それでも時々うるさく感じる。それにぜんまいを巻かなければ止まってしまうから、時たま東雲が天愛が巻いているのだ。

「もう日が沈むねえ」

東雲が伸びをしながら言った。その気の抜けた様子に天愛は苦笑

する。今日はまだ客らしい客が一人も来ていない。日垫が少し顔を覗かせたが、差し入れたと箱入りの饅頭を置いてお茶も飲まずに出て行ってしまった。八十彦は奥の居間でおそらく本でも読んでいるのだろう。相変わらず店に顔を出すことはない。

東雲が言った通り、前の道は夕日で赤く染まっているが、それももうじき青暗く塗り重ねられるだろう。

天愛は制服のスカートを引っ張った。スカートの丈は膝よりも大分下まであり、黒のタイツを履いているからそこまで寒くはないが、それでもこの土間は冷えた。ストーブの上に置かれたケトルは白い湯気を噴き出している。スカートを引っ張ったままぼんやりとその様子を眺めていると、くすくすと笑い声が聞こえた。

「なんですか」

「いや、なんか可笑しくて。制服着た天愛ちゃんがここにいるのが」

天愛は過去の自分の姿を思い出してみたが、ここに来る時は休日を除いて殆どが制服だったはずだ。今更なに言うのだろうか。それとも、制服を着た娘がこの店にいるのが可笑しいという意味なのだろうか。そんなことを考えている内に、東雲は次いで言った。

「昔、狐と云われた男の子がいてね」

唐突な言葉に天愛は目を円くして隣に座る青年を見た。狐、という言葉がやけに強い響きを持って耳に響いた。

「狐と呼ばれた由来は、狐みたいな髪色をしてたかららしいんだよね。妖狐に育てられたと、昔の人達は信じたいらしい。その男の子は、人間の言葉を理解せずに獣の言葉を理解したんだ」

天愛が目をはちくりさせていると、東雲は肩を竦めて、まあ日本昔話みたいなもんだよ、と言った。

「狐は村人たちに忌み嫌われていたんだけどね。ある日村の子供の一人と仲良くなる」

「あの、なんなんですか。その話し」

天愛はやっと口を挟むことができて少しほっとした。急に始められた脈略のないはなしが意味があるものなのかないものなのかも量

り兼ねて困惑していたのだ。天愛の問い掛けに、東雲は微笑みで返すだけだった。その笑みに天愛はもどかしさを感じる。八十彦も東雲も、時折同じ空気を纏うことがある。それは、秘密を知っている者の表情だ。

ボーンと一つの振り子時計が鳴り始めると、それに続くように店中の時計が鳴り出した。もう六時だ。天愛は東雲の答えを待たずに立ち上がった。今日は八十彦に特別な客人が来るから店を早く閉めていいと言われている。

「俺も親父に聞いた話しだよ。こちら辺では知ってる人は知ってる話しだつてさ」

天愛は入り口近くの照明を消しながら、へえ、と相槌を打った。もしかすると、綾香も知っているのだろうか。

「狐に縁があるって言葉で思い出したんだ。で、さっきの続きなんだけど、村の子供と狐が仲良くなるところまではよかったんだけど、村で疫病が流行ってね。その時に狐に目がつけられた。村の人たちは疫病は狐の仕業だと考えたんだ。それを恐れて、村の子供は狐を連れて逃げた。それから数年、二人の姿を見かける者はいたけど、二人はその数年の間に、他の人たちにとって幻みたいな存在になつてしまつたんだ」

幻の様な存在。子供がたつた二人で数年の間どうやって生きたのだろうか。御伽噺のようなものだと分かつていても、なんとなく気になつて天愛は東雲の方を見た。机の上でくると器用にペンを回す東雲は、父に話を聞いた時のことを思い出しているのか、それともこの物語に思いを馳せているのか、どこか遠くを見ているようだった。

「けど、その数年後、領主に村の子供だった娘だけが発見されて連れ帰られた。領主がどれだけ尋ねても、狐のことは殆ど何も言わなかったみたいだよ。ただ一言、黄金色の髪をした少年が本当の狐になつて自分のもとを去ってしまった、とだけ言つたらしい。それからその娘は領主の息子と結婚をしてそのまた数年後に子供を産んだ

んだけど、その子供は狐みたいな黄金色の髪をしていたんだ」

「え……浮気してたってことですか？」

目を円くして言った天愛に対して、東雲は苦笑して首を振った。

「違う。狐はその女の子の前からいなくなってしまったから。その子が嫁入りしてからは一度も姿を現していないし、その証拠に、その子は嫁入りをする時に一つの条件を出したんだ」

「なんですか？」

「狐を探し続けることを許してもらったこと。領主の息子はそれを許した。けど、狐は娘の生涯見つかることはなかった」

そこで東雲は言葉を切って、ようやく鳴り終わった時計を見た。時刻を告げる音を鳴り終えた時計は、歯車やはねの回る音や振り子の揺れる音がしていたが、それでもボーンという鈍い音が鳴り終えた後だと静かに感じられた。

店の前の道路を学校の帰りなのか、寄り道の帰りなのか、ランドセルを背負った小学生たちが楽しそうに笑いながら横切った。先ほどよりも景色は暗く沈みつつある。

「狐と縁があるって言葉で思い出したんだけどね。変な話でしょ」

「はあ……」

オチのない話にどういう反応をしたらいいのか迷っている途中で言われて、天愛は気のない返事を返した。本当にあったことなら、黄金色の髪をした少年は外国人だったと想像できる。それだったなら言葉が通じなかったことも納得できる。海外からやってきた人がまだ珍しい頃だったのなら、その姿を始めて見た人たちが、まだ今よりも身近な存在のように考えていた妖怪などと勘違いしていた可能性もある。

「女の子に、家族はいなかったんですか？」

「いたよ。産婆をしていた祖母が一人。けど、その女の子が村を出る少し前に亡くなったんだ」

まるでその時を見知っているような口ぶりだ。天愛は思わず首を傾げた。先ほどから東雲の口からすらすらと出てくる少女と狐の話

しは、父親から以前聞いて、先ほど思い出したというわりにはよく知っているように見える。よほど何度も聞いた話なのか、東雲にとって印象深い話だったのだろうか。

東雲が口を閉ざし静かになった店内に、時計のボーンとした音が響いた。もう今日は鳴ることはないと思っていたその音に、天愛はびくりと肩を竦ませた。見ると、音を響かせた時計は先ほど鳴ったばかりの時計だった。

「……あの時計、壊れてませんか？」

「ほんとだ。さっき鳴ったばかりなのにね。おかしいなあ」

大して不思議そうにでもなく言うと、東雲は膝に手をかけて立ち上がった。

その後もやはり客が来る様子はなく、その日は結局日埜が顔を覗かせただけになった。狐と少女の話はその後話題に上らなかったが、それはやけに天愛の印象に残った。大した特徴もなく、終わり方も微妙な話だったが、不可解だからこそ妙に印象が強くなったのかもしれない。それに、少女の前から去ったという狐のことが気になった。その話を聞いた時、天愛の中で何かが繋がりがけたのだが、それは結局繋がることなく消えてしまった。けれど、その繋がらなかったことにもどかしさを感じ、ますますその物語について考えてしまう。

もうすっかり暗くなり、街灯に照らされた店の前の道路で天愛が難しい顔をしてバイクを出す東雲を待っていると、リンツと遠くで鈴の音が聞こえた。それに釣られて竹林の方を見たが、そこには明かりもなく、本当のしんとした暗闇に包まれていた。手前の方にある竹より奥は真っ黒で何も見えない。

天愛はぶるりと身を震わせてストールを胸の前で手繰り寄せた。最初是不気味に感じていた竹林も、殆ど毎日のように夜渡蓮に通い続けているうちに見慣れてきていたが、やはり夜のそこは不気味で怖い。

「おまたせー」

間の抜けた声に、天愛はほっと息を吐いた。

東雲はバイクを押すのを一旦止めると、ダウンジャケットのポケットからビー玉を出して差し出した。青年に渡された薄水色のビー玉だ。どうやら店に忘れてしまっていたらしい。別に店に置いたままでも問題なかったのだが、天愛はあ、と声を出しそれを受け取った。

「すみません。ありがとうございます」

「いや、いいよ。あと、ちょっと言うの忘れてたんだけどさ、俺明日休みなんだ」

「え。何かあるんですか？」

東雲はたまに休むこともあるが、天愛と同じく殆ど毎日夜渡蓮に來ているのだ。特に明日、金曜の夜は毎週やってくる客人がいて、その人は東雲と話しをする為にやってきているようなものだった。そのためか天愛が知る限り、東雲は金曜は休んだことがない。

「あー。うん。合コンがある」

悪びれもなく言われた言葉に、天愛は隣りに立つ男の顔をぼかんと見上げた。八十彦が聞いたなら、静かな怒りが天愛にまで降り注ぎそうだ。

暫くその調子で東雲を見ていた天愛にも、少しずつ怒りが湧き思わずむっとした表情になった。アルバイトだからそこまで縛られる必要もないと思うが、そんな理由で休まれて迷惑を被るのは天愛の方なのだ。東雲がいなければ、天愛は八十彦に二人分の嫌がらせとも思える扱いを受けることになる。それにタイミングの悪いことに、明日染野も休みをとっている。

「また今度にしてください。明日は諦めてください」

天愛が強い口調で言うと、東雲は目を円くした。

「明日の合コンは明日にしかないんだよ。もし明日の合コンに俺の運命の人かが来てたらどうするの」

「運命の人ならまた出会えますよ」

力の籠った口調で返されて、天愛はため息混じりに言った。そも

そも、合コンに運命の出会いを求めるという考えが天愛には理解できなかった。東雲は時たま行っているが特定の彼女を作るつもりはなそうに見えたから、運命の人なんて言葉に説得力はない。

「いや、まあ、休みとっちゃったし、明日は八十彦さんも店に出てくれるって言ってたから大丈夫だよ」

天愛はぎよっとして東雲の顔を凝視した。

八十彦が店に出てくるなんて、冗談じゃない。しかも、今の口調からすると、顔を出す程度ではなくずっと店にいるような感じだった。今まで店の方に顔をだすことはあっても、狐の主人が店番をしていたところを見たこともないし、見たいとも思わなかった。日がな一日居間の方で本を読みお茶を飲んでいるか、出かけているかのどちらかだ。確かに天愛一人ではもし客人が来た時分からないことが多すぎるが、それでももしなにか困ったことがあれば、居間はすぐ近くのだから呼んだり質問すればいい。その方が、天愛も気詰まりせずにするものだ。けれど、八十彦はそれを知ってわざと店に出る可能性もある。あの狐面の店主は、天愛が嫌がる姿を面白がっているふしがあるのだ。

八十彦の顔に蓋をする狐面を思い出して、天愛は重いため息を吐いた。

どうにかならないものだろうかと思いつつも、明日のことはもう諦めるしかないと思った。殆ど毎日アルバイトに帰っているが、平日は学校が終わってからだから時間も短い。ほんの数時間を我慢すればすむのだ。

もんもんと考えている天愛を見て、東雲は苦笑した。

「そんなにいや？ まだ慣れない？」

そう聞かれたら、是とは答えにくい。天愛は思わず首を横に振ってしまった。

「……いやというか、苦手なんですよ」

慣れてきた今となっては、八十彦に対しての苦手意識が狐面からくるものなのか、その性格ゆえなのかわからなくなってきた。

おそらく両方なのだが、以前はその身につけられた狐面がひたすら恐ろしかった。

「ああ、始めの頃は尋常じゃない怖がり様だったからねえ。八十彦さんの面見る度に青い顔してたよ」

「そうですか？」

知らん顔で言うつと、東雲は苦笑した。

「八十彦さんもよく毎日狐の面なんかつけて生活できるよね。俺なら我慢できないよ」

そういえばそうだ、と天愛は頷いた。もしかすると夜渡蓮にの間だけなのかもしれないが、よく面をつけたままで生活することができるものだ。

「祭りの時くらいだよ。面なんか見るの」

ぼつりと言われた言葉に天愛はびっくりと体を震わせた。静かな住宅街に二人の歩く音とバイクのタイヤがジリジリと動く音が響く。東雲は天愛の様子に気付いてか気付かずか、明るい調子で笑った。

天愛は、もう何年も行っていない祭りの様子を鮮やかに思い出す。緩やかな橙に染まる提灯に、賑やかな屋台の棟、多くの人の行列。耳につくのは、祭り雛子の笛と太鼓の音だ。

それらを、少し離れた公園のジャングルジムの上から眺めていた。いつも、祭り雛子を聞くと耳を塞ぎたくなる。目を閉じて見えるのは、人を馬鹿にしたようでいて無機質な、狐の面だ。

「天愛ちゃん？」

知らず知らずのうちに立ち止まっていたらしい。天愛は数歩先で振り返つて不思議そうに見てくる東雲を見返した。

見事な黄金色。

ふと、そんな青年の言葉を思い出す。街頭の青白い光りに照らされた東雲の髪色は、まさしくそんな感じだ。自分の内にある微かな記憶とその姿が重なったような気がして、天愛は小さく首を振りそれをかき消した。

「なんでもないです」

微笑んでそう返すと、一瞬東雲の瞳が何かを探るように動いたような気がしたが、天愛はそれに気付かないふりをして帰路を急いだ。

*

皮肉にも、その日は雨になった。

まるで自分の気持ちを表しているかのようなどんよりと重く、雨粒をこぼし続ける空を見上げて、天愛は思わずため息を吐く。こんな調子では、今日も客はやって来ないだろう。過去何度か雨が降ったことがあるが、そんな時は大抵誰もやってこない。ましてやこんな土砂降りでは、夜渡蓮の近くに住む冷やかして常連の客でさえもやってこないだろう。見ると、校庭は大きな水溜りのようになっていた。運動部の殆どが今日は休部になってしまった為に、靴箱周辺は生徒でゴった返していた。綾香はミーティングのあと体育館で部活があるからと、授業が終わると早々に別れてしまった。

「椿、今日もバイト？」

すぐ後ろから声を掛けられて、また漏れそうになったため息を呑み込んで天愛は振り返った。

天愛とちょうど同じ身長をした小柄な男子が、目が合うと同時ににかつと笑った。

「うん。そう。三秋も？」

みあき

「うん。そうそう。今日も働くよー。ところで綾香は？」

偽ることなくきよろきよろと視線を彷徨わせる三秋に、天愛は思わず苦笑した。三秋は綾香の隣り近所に住む幼なじみだ。二人が並

ぶと一見姉弟のようにも見えるが、三秋が綾香のことを好きなことは、たとえ本人が口に出さなくとも天愛には分かった。おそらく三秋もそれを天愛に隠すつもりはないのだろう。たまに相談してみたことも言ってくる。

「綾香は今日も部活だよ」

残念だね、と言う言葉が頭の中で続いたが、あえてそれは口に出さないようにした。言わなくても三秋は明らかに残念そうな表情をしている。

家が近所なのだからいつでも会えるだろうと以前天愛はこの少年に言ったことがあったが、小さい頃はいつでも気軽に遊びに行くことができたけれど、今は昔のことが嘘みたいに気軽に行くことなんてできなくなってしまったという。

「そっぴゃ、椿あの骨董品屋でバイトしてるんだって？」

あの骨董屋、と三秋が呼ぶのは、綾香と同じく彼も幼い頃から夜渡蓮のことを知っている近所の子供だからだ。

言われて、天愛は彼には夜渡蓮でアルバイトをしていることをまだ言っていないかったことを思い出し、眉尻を下げた。別に隠していた訳ではないが、ばつが悪い気分になってしまう。

天愛が頷くと、三秋はうわあ、と呟いた。

「本当だったんだ。狐の店主は相変わらず狐なのか？」

実際に見たことのあるようなその口調に天愛が目を円くすると、三秋は苦笑いした。

「いやさ、うちの死んだじいちゃんがあそこの常連だったんだ。それで俺も小さい頃何回か連れていかれたことがあるんだけど、店主がいつも狐の面をつけて不気味だったんだよ」

その言葉に天愛はますます目を大きくした。天愛たちの通う高校からだ、夜渡蓮は歩いて行ける距離だ。地元の子供たちの多くがこの高校に通っているから、夜渡蓮を知っている者がいてもそう不思議ではないが、常連客の家族ともなれば話しは別だ。

「……そうだったんだ」

天愛が半ば呆けながら言うと、三秋は大きな目を瞬かせた。

「そうなんだよ。今は違うのか？」

「今もだよ……」

天愛は心底うんざりした様子で言った。その様子で全てを察したらしい三秋は、眉をひそめた。

「……相変わらず変な人？ 俺、あの人に散々からかわれたんだよ」「変な人なんだけど……違う人なんじゃないかなあ。若い男の人だし。息子さんだと思うよ」

「ええっ息子も狐の面つけてるの？ そりゃ変だなあ。なんかこええ」

パンツと小気味よい音を立てて三秋は傘を開いた。それに続いて天愛も傘をさす。折りたたみ傘を持っていてよかったと思う。朝は晴々としていたのだ。周囲では傘を持たずに途方に暮れている生徒もたくさんいた。

ふと、聞き慣れた音がした気がして天愛は立ち止まった。周囲を見渡しても、傘をさした生徒たちが校庭の泥が跳ねないように気をつけて歩いているだけだ。赤い着物など見えない。

今聞いた音は、確かに鈴の音だったが、よく考えれば鈴をつけている人などたくさんいることに気がつき、天愛は一人苦笑した。鈴の音に過敏になりすぎている自分がおかしくなる。今まで夜渡蓮以外での不思議な鈴音は聞いたことがなかった。だから、あの鈴の音を鳴らすものは夜渡蓮にいるものだと思い込んでいる。

「椿？ どうしたんだ？」

「ううん。なんでもない。雨足も強くなってきたし、急ごうか」

言って天愛は先ほどよりも少し歩みを速めた。多少の泥が跳ねるのは仕方がない。

リンツと、また鈴の音が聞こえたが、今度は立ち止まって周囲を見渡すことはしなかった。

そこは、広い病室だった。

木造の医院は戦火を免れ、古い歴史を持っていた。その為か人が歩く度に板張りの床はギィギィと軋んだ。

部屋の窓際にぼつんと置かれたベッドの上には、一人の若い女性が寝転ぶことなく座っていた。ベッドのすぐ横に並べられた小さな揺り籠には、産まれて間もない赤ん坊がまだ見えているかも分からない瞳をきよろきよろと動かししている。娘はそんな赤ん坊に構うことなく、じつと窓の外を眺めていた。長く艶やかな黒髪と白い肌は、昼間の陽光を受けて光りを反射していた。

何の変哲もない静かな時間。天愛にはそう見えた。娘の顔を見るまでは。

狐面。

白い面に赤い唇のそれは、静かな風景を嘲笑うかのように笑みのかたちを作っていた。

「椿さん」

静かな声に呼ばれ、天愛ははっと目を開けた。途端、目に入ってきた白い面に体を強張らせた。

見る見る青ざめて行く顔を、八十彦は呆れた様子で見、狐面の下でため息を吐いた。

「まあ、気持ちとは分らないでもないけどね。でも、気を緩めすぎじゃないかな」

流石に言い返すこともできず、寧ろ申し訳ない気持ちになり、天愛は消え入りそうな声で「ごめんなさい」と謝った。

いつもの喋り相手である東雲も染野もいず、一人で店番をしていた天愛は、眠気に勝てず机の上に突っ伏してしまったのだ。外では静かな雨音が続いていて、店内はいつも以上に薄ぐらい。客はやは

り誰もやってくる気配がなかった。それに、店にいるだろうと思われた八十彦が、天愛がやってくると同時に奥へ引っ込んだことに拍子抜けしたのもある。なにはともかく、仕事中に寝てしまったことにかわりはなく、天愛は心の中で自分を叱咤した。「ところで椿さん。今日も向阪さんが来られると思うんだけどね。来られたら奥にお通しして」

向阪さんとは、常連客で今日の心配事の原因の一人だった。厳しそうな老齡の女性で、少し偏屈なのだが、東雲のことはいたく気に入っているらしい。毎週やってきては、東雲と話しをして帰っていく。けれど、天愛のことは眼中にないらしい。いつも天愛は二人が話している横で少し気まずい気分で黙っているしかない。

天愛は、老眼鏡を駆けた厳しい顔を思い出してきゅっと唇を引き締めると、頷いた。その様子に満足したのか、八十彦は奥へ続く暖簾を手の甲で上げた。

「あ、それから」

天愛が、もう去るかと思いい力を抜いたところで八十彦は振り返った。

「今日はもう一人来られるからね」

「え」

「じゃあ頼んだよ」

天愛の言葉を待たずに八十彦は奥へと引っ込んでしまった。そのことにほっとした天愛は、もう一度彼に声を掛けてやってくる客がどんな客なのかを聞くことよりも、知らないまま彼をそつとしておく方を選んだ。触らぬ神に祟りなし、だ。八十彦の場合は自分からやってくるか天愛を呼び寄せるが、わざわざ自分から八十彦に話しかけることは避けたかった。以前八十彦の狐面の下の素顔を見てやると息巻いてみせたことがあったが、今ではすっかり弱気になっしまっている。八十彦の顔に興味がないわけではなく寧ろ今でも強い好奇心はあるが、どうすれば見ることができるかなんて想像もつかない。

今までもう何度になるか分からないほど思ったことだが、どうして八十彦はあの狐面をつけているのだろうか、天愛は小首を傾げた。代々続いてきた狐面の店主。

先ほど見た夢の中で、ベッドに座っていた娘も狐面をつけていたことを思い出して、天愛は一人苦笑した。嫌悪するあまり、夢にまでてきたのか。

そんな風に天愛が一人物思いに浸っている時、カラカラと引き戸が開かれた。

向坂さんだ。

そう思った天愛は、背筋を伸ばして数秒置いてから振り返った。途端、強い耳鳴りと水の中に入った時の様な鼓膜への圧迫感を感じて思わずぐつと目を閉じる。

「お邪魔しますよ」

穏やかな声が聞こえて、天愛はそつと目を開けた。見ると、いつの間にか閉じられた硝子戸の前で、先日もやってきた青年が佇んでいた。てっきり向坂さんだと思い込んでいた天愛は、青年の唐突な登場に目を円くして固まってしまった。

「……黒葛原さん」

なんとか掠れた声で言うと、今度は青年の方が目を円くした。

「こんにちは。今日はお嬢さんお一人なのですか？」

「いえ、奥に店主がいます」

寺島少年の時は、彼にも変化が見られたのだが、黒葛原には天愛の感じた耳鳴りはなかったのだろうか。耳鳴りの去ったあとでも耳に違和感の残る天愛は彼を見ながらそんなことを思った。つい先日やってきた時も、彼は特に違和感を感じた様子もなかったのだ。東雲も感じないようだったが、もしかすると人によって様々なのかもしれない。

「店主が？ それは珍しい。会わせて頂いても宜しいですか？」

「珍しいですか？ あ、どうぞ」

天愛が手のひらで奥への道を示すと、なぜか黒葛原は苦笑した。

「ありがとうございます。……では、遠慮なく上がらせて頂きますよ」

そう言って、洗練された動作で礼をとる。その様子を見た天愛は、ふいに日笠のことを思い出した。率のない動きや、柔らかな言葉遣いがあの老人に似ている気がして、顔を綻ばせる。この青年に湧いていた妙な親近感の様な感情は、おそらくそれが原因だろう。青年のことを思い出す度に湧いた感情の原因が分かってほっとする。

それを見ていたのであろう黒葛原は釣られたように微笑んで、けれど不思議そうに首を傾げた。

「なにか、楽しいことでも？」

そんなことを聞かれると思わなかった天愛は、靴を脱いで上に上がった黒葛原をぎよっとして見上げた。優しげに細められた目と合い、つい目を逸らして視線を彷徨わせる。急激に顔に熱が昇るのを感じながら、言葉を探す。

けれど天愛が言葉を見つけ出す前に、黒葛原は後ろを振り返った。

「ああ。お久しぶりです、狐の店主」

その声に天愛も顔を上げると、いつ間にかやってきていた八十彦が暖簾をくぐっているところだった。

狐面の下で、ふと笑う様な吐息の音がした。

「俺は、初めてお会いしますよ。黒葛原さん」

黒葛原は目を円くしたあと、恥ずかしそうに微笑んだ。いや、最近よく分からなくなるんですよ、いけないな。そんなことを一人呟く。事情を全く知らない天愛は、そんな会話をする二人を凝視した。黒葛原は、希少な客人の一人ではなかったのだろうか。それらの客人は、取引が終了すると同時に同時代の夜渡蓮に来れなくなるという。けれど、それは来なくなるだけなのかもしれないと東雲が先日言っていたことも思い出す。確かに、もう来なくなってしまった人のその後のことなど、夜渡蓮の店員には分からないのだ。どこまでも受身、と言うのは可笑しいかもしれないが、夜渡蓮の人間には自らその人たちに再び会うことは叶わない。

青年二人は、呆然と見る天愛を残して二、三言葉を交わした。短い会話の内容は、天愛には分からないことばかりだった。黒葛原は、八十彦のことを狐とは呼ばずに丁寧にも狐の店主、と呼んだ。けれど、やはり名前では呼ばないのだ。

「椿さん。じゃあ、ちよつと奥にいるから何かあったら呼んで」

八十彦は言い黒葛原が会釈すると二人とも暖簾の奥へと行ってしまった。

呆然としたまま立ち尽くしていた天愛は、はっとしてまた視線を彷徨わせた。そういえば、今日は染野がいないのだ。お茶を出すのは天愛の役割だろう。それに気付くと気が重くなった。やはり、東雲が染野がいないと少しつらい。黒葛原は嫌いではなく寧ろ好感を抱いているのだが、八十彦と客人がいる居間にお茶を運ぶ作業は気まずく、苦手なのだ。それに、なにかあったら呼んで、と言っていただくくらいなのだから、もしかするとそれまでは立ち入らない方がいいのかもしれない。染野ならそんな時、すぐにお茶をお持ちしますね、と言って確かめるのに、そんなところにまで気が回らなかった。はあ、と一つ溜め息を吐いて、靴に指をかける。八十彦が客にお茶を淹れるなんて到底考えられない。彼は意外と怠惰な性格の持ち主なのだ。

靴を脱いで土間を上がると同時に縁側の方から鈴の音が聞こえてきたが、天愛はそれに構わずに炊事場の戸を引いた。最近ではそれには構わずに無視をした方がいいことに気が付いたのだ。ただ怯えていた時と比べれば大きな進歩とも言えるが、それはただの慣れだった。無視をして気付かないふりをしていれば、それはその内に消えているのだ。

染野がいつも来客用に使っている茶器を出して薬缶で湯を沸かす。不便なことに、此処にはポットという便利なものはない。辛うじてラジオや電話はあるが、クーラーもパソコンもないのだ。テレビも一応一台だけあるらしいが、一番奥の部屋に置いてあるというそれを天愛は目にしたことがない。恐らく埃でも被っているのだろう。

八十彦がテレビを見ている姿など、天愛には想像もできなかった。

リンっと、また鈴の音が聞こえた。その音に天愛は薬缶に視線をやったままで目を大きくした。先程よりも近くで聞こえたそれは、明らかに近づいてきているのだ。天愛は久しぶりに悪寒を感じた。振り向くことはできないが、最後に聞いた音の場所は、恐らく炊事場の入り口付近だ。なんとなく、正体の分からないそれに見られていた様な気がした。

リンっと、三度目の音がすぐ後ろで聞こえた。天愛は肩を震わす。助けを呼ぼうかと思ったが、生憎おそろしさで声を出すことはできなかった。

ふと足元を何かが通る気配がして、タイトの上から何かが天愛の脹脛はくけいを撫でた。

「え……」

なんとなく感じたことのある感触に、天愛は足元に視線を落とす。猫が体を擦り付けてきた時の感触に少し似ていたのだ。

黄金色が光の残像のように消えていくのが見えて、目を見開く。

いつもの少女とは違う。人でもない。また鈴の音が鳴り、それは戸の向こうに現れた。黄金色の狐だ。それは、大きな尻尾を揺らし黒く円らかな瞳で天愛を捉えていた。

「……うそ」

小さな声で天愛が呟くと同時に、狐はさっと身を翻してその場を去ってしまった。天愛は追いかける暇もない、と自分でもよく分からない衝動に押されて、その後を追った。正体の分からない焦りに捕らわれる。今その狐を捕まえないと、もう二度と会えないと何故か強く思い、それに疑問を感じる暇もなかった。

狐の姿は不安定なものだった。はっきり見えたのは炊事場でだけで、そのあとは黄金色の残像を時折見えるのみだった。天愛はそれをはや歩きで追いかける。屋敷の中は広いが、縁側で殆ど繋がっている。狐はその縁側をとことと歩いているようだった。けれどそれも、途中までで狐は完璧に姿を消してしまった。天愛は焦燥感を

覚えその姿を探した。縁側に面した居間の方からは、八十彦と黒葛原の会話する声が微かに聞こえてきたが、もうそれも気にすることはなかった。

再び鈴の音が鳴り、天愛が顔を上げると、裏にある竹林がその目に映った。縁側からはその風景がよく見渡せる。昼間でも闇を孕んだような薄暗いその竹林の前に、黄金色の姿が小さな煙のように浮かんで見えた。天愛を待っているかのように、じっとその場で尻尾を揺らしている。

天愛は誘われるように、靴も履かずに縁側を降りた。狐がまたその身を翻す。竹林の中へ呑みこまれていくその姿を追って、天愛は走った。

暖かな季節が過ぎていく。

新しくやってくる季節は、今年も厳しいものとなるだろう。冬籠りのために、村人たちはその準備に追われていた。できる限りの食物を貯め込み、保存食を準備しておく。

その村は他近隣の村よりは随分と恵まれ、裕福だったがそれでも寒い冬の間に起こるか分からない。大切な水が干上がってしまふ恐れのある夏も怖い、食料の不足する冬も恐ろしい。

けれど、なによりも恐ろしいのは、その時続いていた『神隠し』だった。

都会の方では、もう電気も通つていられるのに、この村の住民たちにとつては遠い都会の出来事よりも、随分と昔から続く営みや古来からの言い伝えの方が近いものだ。夕刻、日の暮れかかった頃に、小さな子供が忽然と姿を消すことがその頃続いていたのだ。

始まりは、薬屋の娘がいなくなってしまったところからだ。

村の外れに住む婆の家に薬を届ける為に出かけたとき、帰らなかったのだ。それから、それは堰を切ったように続いた。次に姿を消したのは、まだ十にもならない少年だった。夕刻、他の子供達と隠れ鬼をしている時隠れたときり見つからなかった。

そんなことが続いた為、大人たちは警戒した。村中、それを神隠しだと信じて疑わず、夕暮れ刻のかくれんぼや鬼ごっこを禁じ、出来るだけ家の中にいるようにと子供達に言いつけた。

我が子を失くすことがないようにと、夕刻から夜に掛けての時間帯は、子を持つ大人たちが順番で村中やその近隣を見回るようにもしていたが、それでも子供たちがいなくなることを止められなかった。

「なにしてるんだ？　なんだい、それ。地方史……？」

急に掛けられた声に、東雲晃はけて大げさではないため息を吐いて本を閉じた。論文の為に必要な本を借りに図書館に寄ったのだが、つい目にした本を手にとって読み込んでしまったのだ。その為に、会いたくもない人物に見つかってしまった。

「こんにちは、おじさん。物凄く久しぶりですね」

わざとらしく言っただけで、黒いスーツを着込んだ男は微笑んだ。さらっと嫌味を言うようになったなあ、と大して気に障った様子もなく言う。まだ若々しくその姿は下手をすれば二十代にも見えるが、彼は一児の父だ。それも、子供はもう立派といえる歳になっている。

「今まで何処にいたんです？　神隠しにでもあったのかと思いましたよ」

「君、若いのに古い言葉を使うね。あと、敬語も覚えたんだね。たしか、もう大学生だったかな？」

ちらりと東雲が持っていた本に目をやったあと、関心したように男は言った。ちらちらと、周囲の目が向けられていることに気付いた東雲は、小さくため息を吐いた。会話のせいで目を向けられている訳ではないことは分かっている。自分も目立たない方ではないと思うが、この男は特に目立つのだ。

「話があるのなら、付き合います。夜渡蓮に行きますか？」

「いや、近所のカフェにでも行こう。珈琲の美味しい店を知ってるんだ」

ある筋の者が乗っかっていそうな黒い車に乗って着いたのは、雰囲気の良い、小洒落たカフェだった。天井が高く、広々とした店内には若い客が多い。先ほどよりも強い視線を感じながら東雲と男は一番奥のソファ席に着いた。

男の方は上機嫌のようで、始終にこにこ微笑んでいる。薄茶色の髪は遺伝だが、子供には引き継がれなかった様だ。彼の息子は、見事とも言える黒髪だから。

東雲は、彼がこんな場所にいることに強い違和感を感じていた。

「で、今まで何処にいたんです？」

店員が持ってきたレモン水を一口飲んでから、東雲は訊いた。

「急にいなくなつてすまなかつたとは思っているよ。仕事で海外に行つてたんだ。急なことだったんでね、彼には何も聞いていないかい？」

「なにも。遠くに行つた、とだけ」

「ふうん。ところで、どうだい？ 最近は。なんでも、若い女の子が店で働く様になつたそうじゃないか」

東雲は、もう一口冷たい水を咽に流し込んだ。水の中で浮かんだレモンの薄切りが、氷に押されて縦に浮く。グラスに付いていた水が手首に伝つた。

男が言っているのは、天愛のことだ。一体誰からその話を聞いたのだるか。東雲は、今度は彼が帰つてきた理由を知りたくなつた。彼が帰つてきた理由は、他でもなく夜渡蓮にあるのだろうか、それは一体なんなのか。まさか、天愛がアルバイトとしてやってきたことと関係があるのだろうか。

東雲は目を細めて男を見た。薄茶色の髪に、穏やかで整つた容姿。その顔は随分と昔に見た青年の顔と似ている。そして、それは血の繋がりのある東雲とも似ていた。兄弟と間違えられる可能性があるが、彼と東雲とでは、親子ほどの歳の差がある。

「特に、変わりはないですよ。相変わらず時々希少なお客はやつてくるし、八十彦さんは狐面を着けたままだ」

「そうか。彼は、狐としての仕事は上手くこなしているのかな？」

「おじさん、俺ばっかりに聞くんじゃないくて、本人に訊けばいいんじゃないかな？」

以前と同じ口調で言つた東雲に対して、男は肩を竦めてみせた。

「本人に聞くよりも、君に聞く方が分かりやすいんだよ」

東雲は言い返す代わりに、大きな溜め息を吐いた。久しぶりに面倒臭い人を相手にして、早くその場を去りたくなる。

「それにしても、君、今日は夜渡蓮は休みかい？」

「夕方から用事があるんだ。おじさんこそ仕事は休み？ 八十彦さんは知ってるの？」

「長い休暇を貰ってね。彼はそのことを知らない。まあ、近々会いに行くよ。あの屋敷の真の主である彼女は、それを嫌うのだけだね」
そう言って、男は肩を竦めてみせた。その時ちょうど店員が運んできた珈琲をため息と共に飲み込んだ東雲は、男が持っていた大きなトランクを目にした。先日夜渡蓮にやってきた不思議な男の客が持っていた物とそれはよく似ていた。

「そういえば、この前黒葛原さんっていうお客が来たんだけど……おじさん知ってる？ 希少なお客ってのは間違いないと思うんだけど、他のお客とは雰囲気は全く違ってて」

東雲が言っていると、男は目を細めた。細められたその目は、狐面の穴から覗く目とよく似ている。

「彼は、女主人の古くからの知り合いだよ。渡りの人間だ。夜渡蓮を創業する時、深く関わった人物だね」

「へえ、あの人が？ なんとなくそうなんじゃないかなーとは思ってたけど。狐のことも知ってたみたいだし」

「彼が狐のはなしを？」

意外そうな男の様子は、珍しいものだった。いつも人を食った態度でいる彼は、へらへらとした笑みを絶やさず本心を余り表に出さないのだ。狐の話は男にとって余程意外だったのだろう。東雲はまじまじと男の顔を眺めた。

黒葛原が言ったのは、天愛のことだった。彼女には狐と縁があると。

「意外そうだね」

東雲が言っていると、男はいつもの笑みを取り戻す。

「少なくとも、彼は僕の代で狐のはなしをしたことは一度もない。いいかい、彼がその狐のことを言うのは、狐が傍にいる時だけだ。一体どんなことを言ってたんだい？」

「さつき言つてた、新しい子に言つたんだよ。狐と縁があるって。それだけ」

その言葉で、男の笑ひはますます深いものになった。

彼が天愛のことを聞いてこないのは、おそらくもう大体のことを知っているからなのだろう。名前も、彼女がどんな容姿をしているのかも。夜渡蓮の常連客に聞いたのか、調べたのかは分からないけれど、過去彼女が夜渡蓮に間接的に関わっていたことも知っていたのこの反応だろう。東雲はうんざりとしながら男の言葉を待った。手の内で転がされているような感覚は、あまり好きではない。

「毎年、近くの稲荷神社で祭りがあるだろう。もう十年くらい前になるかな。彼がその祭りの日に亡くなったのは」

カランとレモン水の氷が動いた。なんの突拍子もない男の言葉は、東雲に嫌悪感を感じさせるものだった。夏祭りに良い思い出はない小さい頃は毎年楽しみにしていたその祭りは、その翌年から全く面白みのないものになってしまった。

「ちょうどその祭りには僕も行っていたんだ。祭り雛子のなか、彼が小さな女の子と一緒に楽しそうにいるのを見かけたよ。赤い浴衣を着たその女の子があまりにも女主人と似ていたからよく覚えてる。事故のあとに知ったんだけどね、彼女の名前は確かツバキさんだったかな」

東雲が顔を顰めて男を見ると、男は優しげな笑みで言った。

「本当に、縁とはおそろしいものだね」

男と別れたあと、東雲は悪い空気を吐き出すかの様に大きな溜め息を吐いた。次にいつ会うことになるのかは分からないが、できるだけ長い期間会いたくないと願う。

初めて出会ったのは、東雲が中学生の頃だった。その時彼はまだ現役の狐として夜渡蓮にいたのだ。初めてみたその姿にまだ少年の

域を出ない東雲は不気味さを感じたものだが、まさか狐面の下にある様な笑顔を隠しているとは当時思いもしなかった。その本性を知ったのは、次に夜渡蓮を訪れた時のことだった。彼は、子供の悪戯の様な嫌がらせで東雲をからかい遊んだのだ。

夜渡蓮と狐の話しは、親戚内では知る人ぞ知る話だった。その歴史は実はそんなに長くもない。大正時代に創められた骨董店、夜渡蓮は戦火を免れ今でも当時のままの屋敷で開かれている。狐を探す為に創められた店。かつて少女だった女主人は、狐を見つけ出すことができなかった。けれどその執念とも言える思いは、子から子へと伝えられ、今も続いているのだ。彼らは狐を探すだけに代々その面を被ってきた。狐に見つけてもらえる様に。代が代わってもその面さえ被れば、きっと狐はいつか見つけてくれると信じて。

東雲からすればそれは馬鹿げた話でしかなかった。いくら待っても、その待ち人は来ないだろう。例え来たとしても、もうどちらも生きてはいない。それでも彼らは狐を探す。さもなくば長い呪いは解けないのだとでもいう風に。

「馬鹿げた話したと思わない？」

「それに付き合う君も随分風変わりだと思いますが」

老人は静かに言う。東雲は朗らかに笑うと老人の乗った車椅子を押した。

街路樹から落ちる木漏れ日が心地よい。もう日も傾きかけているが、気持ちの良い天気だ。

「そういえば、この前お爺さんと同じ名前の人が夜渡蓮に来たんだけど……覚えてる？」

それはおかしい質問だったが、老人は懐かしそうに目を細めるとゆっくりと頷いた。

「覚えています。まるで昨日のこの様にね」

「言わないんだから人が悪いよなあ。俺、その人が来たって聞いた時びっくりしたもん」

「先のことは言うものではないですからね。椿さんはお元気ですか」

懐かしそうな目をしたまま、かつては青年であつた老人は訊いた。黒葛原。それが老人の持つ苗字だ。天愛に狐に縁があると言つた張本人。彼女もまさかその青年が年老い、此処にいるとは思わなう。希少な客である筈の彼が、夜渡蓮と深く関わつてきた人物であるということも。

俄かには信じ難い出来事があり、人物がいるということを知つたのは、東雲も夜渡蓮へ行つてからだつた。

渡りと呼ばれる彼は、いくつもの時代を渡る術すべを持っていたといふ。その秘密を東雲は知らないが、おそらく先天的な何かなのだらう。

夜渡蓮の客が違う時の戸を開け始めたのは、女主人が亡くなつてからのことだつたというが、彼女は生前から彼に、夜渡蓮がある条件を満たした時に客人が違う時の戸を開けるように仕掛けて欲しいと依頼していたらしい。その条件とは、その時の気候や風などによるらしいが、黒葛原はそこまでは言わなかったし、言われても東雲は到底理解できるとは思わなかった。ただ、東雲にはなんとなくその時が分かるのだ。希少な客が訪れる時。虫の知らせの様になんともなく勘付く。黒葛原とは遠い血縁にあたるせいかもしれない。

「今日はさ、昔の話しが訊きたくて、会いにきたんだ」

東雲が言つと、老人はいいですよ、と短く答えた。

雪之丞が妻と出会ったのは、もう随分と前のことだった。鷺輪原さぎわはらの森で佇んでいた美しい娘を雪之丞が見初め、連れ帰ったのだ。聞けば身寄りもないという。

連れ帰ったばかりの頃は、娘は放心状態だった。返事はするが、話し掛けても二三言口にするだけで自ら言葉を発することもなかった。

誠実な雪之丞は、娘を連れ帰りはしたが、屋敷の小間使いたちに娘の世話をさせ自分は時折話しをしに行くだけだった。対して言葉を交わしたわけでもないのに、雪之丞はどうしようもなく娘に惹かれていくのを感じていた。娘には、妙な引力のようなものがあつたのだ。美しさは強い力を持つことを娘と出会い、彼は知った。けれど、強く惹かれながらも触れてはいけないような尊さも感じ、雪之丞は踏み込めずにいた。

屋敷の住人たちはみな雪之丞が連れ帰った娘を魔性と思っていた。どれだけ言い寄られようと、娘たちにたいした関心も持たずにいた雪之丞なのだ。きつと、あの美しい娘は魔性のものにちがいない。だから、雪之丞と娘いち一との婚礼が決まった時には、みな目を円くした。まさか彼の父親である屋敷の主人がどこの者とも分らない娘を一族に迎え入れるとは思わなかったのだ。

更に皆が驚いたのが、式の当日のことだった。娘は、白無垢の花嫁衣装を着込みながら、狐の面を付けていたのだ。みな、その異様に度肝を抜かれ、やはり人間外のもののだと噂した。その日から、娘は一時も言っていないほど狐面を外すことはなかった。次第に、使用人や一族のものたちは一の顔を忘れていった。一が狐面を外すのは雪之丞の前でだけで、それは契約のように守られ、いつそ一途にも見えた。

娘は日毎窓の外を見て過ごした。その姿はまるで何かを待っている

るようで、娘の小間使いである小さな少女は気が気でなかった。いつか娘は、急に現れた何者かに連れ去られてしまうのではないかと思つた。けれどそんなものはとうとう現れず、娘だった一はいつしか女性になり、子を産み、年老いて屋敷で天寿を全うした。

一方、夜渡蓮では一が亡くなつてから不可解なことが起こるようになった。時たま不思議な客が訪れるようになったのだ。最初にそれを知つたのは、その時の店主で一の息子である三十重^{みつえ}だった。彼は一からそうなることを聞いていたのか、少しの動揺もなくその不可思議な客を迎え入れたという。

それから、夜渡蓮は時たま訪れる人々を希少な客として迎え入れるようになったのだと、黒葛原は語る。

「それは、俺でも知つてるよ」

自分から話をせがんでおいてその言い草はあまりにもあまりだったが、車椅子の老人は気を害した様子もなく鷹揚に頷いた。

隣りの道路を乗用車が走り過ぎる。現実的な風景と、二人の会話はあまりにも似つかわしくない。

「君は何を聞きたいんですか」

老人の質問に、東雲はにやりと笑う。その笑い顔が彼が苦手とする男の顔と似ていることに東雲自身気付かない。

「俺が聞きたいのは、おじいさんの昔話だよ。結局狐は見つかるのか見つからないのか」

「それはさつき君が馬鹿げた話しだと言つたことですよ」

「でも、それに俺は付き合つてる。ゴールがあるなら、最後まで関わつていくつもりだよ。けど、それが無いならそれほど馬鹿げたものはないと思わない？」

「途中を飛ばして結末を知りたがるのは不粋ですよ」

「それ、渡りのあなたには似合わない言葉だよ」

「はは、と東雲は軽やかな笑いを漏らした。それはそうですね、と老人は一つも表情を変えずになく呟く。それが可笑しかったのか、東雲はますます笑う。」

もともと、彼は老人の答えに期待はしていなかったのだろう。それ以上それ以上そのことについて問い詰めるわけでもなく、あっさりと引いた。

「いいや。じゃあ、狐のはなしを聞かせて」

まるでそれが本題とでも言うような声で、東雲は言う。

老人はそれによって遠い昔、狐のはなしをした女主人のことを思い出した。東雲も、夜渡蓮に関わってきた人間だから、ある程度のこととは知っているだろう。彼の欲しがっている様な情報を果たして持っているだろうか、老人は小首を傾げた。

そもそも、東雲は老人と遠い血の繋がりがあがあるが綾織の血筋でもあり、どちらかといえばその血の方が濃い。いくつにも枝分かれした分家の子供だ。それでも、彼はもう何年も夜渡蓮で働いているし、あの店が抱える事情にも通じている。

「君は大体のことを知っているのでは」

「それが、知らないことだらけなんだ。狐のことも、八十彦さんの前に狐の店主になるはずだった子のことも」

「……狐の店主は代々女主人が選んできましたからね。いつも、狐に最もよく似た男が選ばれてきた。亡くなった彼のことは、私もよく知りません」

「じゃあ、天愛ちゃんのこととは？ どうして今まで部外者を関わらせることなかった夜渡蓮にあの子が招かれたの」

老人は目を細め、全く馬鹿げた話ですが、と前置いた。

「狐の店主が選ばれる理由と同じですよ。狐との再会は、女主人の長年の悲願です。その可能を少しでも増やす可能性のあるものを彼女は蒐集する。彼女は、とてもよく似ているでしょう？ あの着物姿の少女に」

東雲は呆れたようにため息を吐いた。

「そんなことでねえ」

「そんなこと一つで何かが変わってしまうこともあるからですよ」
そう言って小さく微笑む老人の顔を東雲は眺めた。皺が刻まれた

顔には、以前見た写真に写っていた青年の面影がある。彼はこの歳になるまでどのような人生を歩んできたのだろうと考えても、到底想像もつかなかった。少なくとも他の時代に渡ることができてそこには居着かなかつたから今この姿で此処にいる。

ふと、セーラー服を着た少女と目が合った。東雲が微笑むと、少女は愛らしい顔ではにかんだ。

「お久しぶりです、東雲さん。いつもおじいちゃんの散歩に付き合ってもらって、ありがとうございます」

そういつて頭を下げた少女は、老人にも笑顔を向けた。

「いや、付き合ってもらってるのはいつも俺の方だし。それにしても樟葉ちゃん、女の子っぽくなつたねえ」

しみじみとした口調で東雲が言くと、少女は恥ずかしそうに頬を染めた。

「うちの孫娘をからかうのはやめて下さい」

孫娘。

その事実強い違和感を感じる。彼は普通の人の様に結婚し、子を育んだ。そして今では孫までいるのだ。

「からかつてないよ。人って変わるんだなあと思って」

「根本的なところはよっぽどなことがない限り変わりませんがね。

晃君、君も随分と変わりました」

「根本的なところは変わってないけどね」

にやりと東雲は笑う。それに対して老人は苦笑を浮かべた。

今では柔らかな空気を纏う青年だが、中学生の頃は随分と荒れていたのだ。その頃の東雲を老人はそこまでよく知るわけではないが、彼のことは幼い頃から、親戚付き合いで年に二、三度は顔を合わせていた為に知っている。東雲は小さな頃から少し不思議な子供だった。潑刺としていて、小さな頃から友達もたくさんいた様だが、大人の目から見てもふいにどこか神秘的ともいえる空気を纏うことがあった。それも、血筋のせいなのかもしれない。

彼が、個人的に老人と接触をとってきたのは、彼が夜渡蓮に通い

始めた頃からだった。老人は東雲に渡りのことを話したことがなかった。家族でも知っていたのは老人の姉と、亡くなった妻のみだ。今日の前にいる孫娘は、そんな不可思議なことなどとは無縁なところで生きている。彼は、夜渡蓮で渡りのことを知ったのか、それとも彼自身で老人の他とは違うところを嗅ぎ分けたのか、老人は知らない。以前は前者だと思っていたのだが、今ではもしかすると彼自身で気付いたのかもしれないとも思える。

「じゃあ、もう行くね。今日はありがとう守衛さん」

東雲が言って軽く会釈すると、樟葉が少し驚いた様子で目を大きくした。

「よかつたら家に寄ってお茶でも飲んでいって下さい」

慌てて言う孫娘の様子に、老人は彼女には判らない程度のため息を漏らした。彼女が東雲に対して恋心のようなものを抱いているのは明らかだ。それに気付かない東雲でもないだろう。けれど、東雲の好みを少しは知る老人は、孫娘に望みはないこともよく知っていた。望みがあればそれはそれで困るのだが、若い孫娘が少し憐れに見えるのも確かだ。

東雲は苦笑すると、小さく首を横に振った。夕方から用事があることを告げると、挨拶もそこそこに二人と別れた。

——きつねさん、きつねさん

鈴音のような、愛らしい少女の声が響く。

枯れ木のように身体中に皺を刻んだ老婆が、娘に狐の面を着けさせた。美しいものは、とても人の心を惹きつけるが、それは決して良いことばかりではないよ、と老婆は少女に言い聞かせる。時にそ

れは魔性と呼ばれ、悪いものを惹きつけることがあるのだ。だから、老婆は少女の顔を隠した。狐の面は少女の愛らしく、美しい顔を覆い隠した。

その日から娘は村の子供たちにかかわれたが、それでも老婆に着けられた狐面を決して人前では外そうとしなかった。やがて子供たちは、いつまでも狐面を外そうとしない娘に不気味さを感じ始めた。

誰もが少女の顔を忘れ始めた矢先のことだった。まだ幼い子供が神隠しに遭い始めたのは。

ぼつりぼつりと消える様に、子供がいなくなったのだ。どれだけ大人たちが警戒しようとも、それは止めようもなかった。そんな大人たちをあざ笑うかのように子供たちは姿を隠していく。

ある日、子供の一人がぼつりと漏らした。これは、狐面の少女の仕業なのではないかと。

なんの根拠もないその言葉は、じわじわと子供たちに拡がり、やがては不安に塗れた大人たちにまでも拡がった。

同時期、森で黄金色の髪の少年の姿が時折目撃されていたのだが、その少年と少女が会っているところを見たという子供が声高に言った。少女が狐の化け物と手を組んで、子供を攫ったのだと。

それでも大人たちが踏みとどまったのは、老婆のお陰だった。老婆は少し風変わりだったが賢く、村人たちに一目置かれる存在だったのだ。けれど、その枷も娘は失ってしまった。年老いた老婆は、娘にけして狐面を外してはいけなと言い遣し、死んでしまったのだ。それ以降、娘への風当たりは強くなった。山と森に囲まれた村は狭く、人々の目は曇ってしまった。日に日に少女は暴言だけではなく、暴力までも振るわれるようになっていた。誰も止める者はいない。中にはそれに疑問を持つ者もいたが、その者も家族である幼い子供を失うと娘に辛く当たった。

或いは誰でもよかったのかもしれない。不安を押し隠すことのできない大人たちは子供たちよりも次第に娘に辛く当たった。それで

も、子供たちが姿を消してしまふという神隠しはあとを絶たなかった。

娘が姿を消したのは、老婆が亡くなってから一月も過ぎない頃だった。

それから、間もなくして村の男の家で「神隠し」にあつた子供たちの死体が見つかった。男は、子供たちがいなくなり始めた頃、それを「神隠し」と言つた者だった。

村人たちは後味の悪い思いを抱きながらも、娘のことを捜そうとはしなかった。男の家に娘の死体はなかったのだ。黄金色の狐の神様がきつと娘を連れ去つたのだらうと誰かが言つた。

——きつねさん、きつねさん

また声が響く。

川の流れに逆らつているようだ、天愛は思った。目を開けることができない。けれど暫くして、自分がどこか柔らかいところに寝転んでいることに気付いた。それが布団だということに気付いたのは、そのもう少し後だ。

懐かしいが、最近では毎日の様に嗅ぐ畳のい草のにおい。ぱたぱたと枕元を過ぎる子供の足音。

ようやく目を開けることのできた天愛は、古びた木の梁のある天井をぼんやりと眺めた。すぐく長い夢をみた気がしたが、それがどのようなものだったかは思い出せない。けれど夢の余韻は天愛を物寂しい気分にした。あれは、誰かの夢だ。

ぱたぱたと足音がまた響き、天愛は目線を横へと移した。真つ先に目に入つたのは、子供の白い足と赤い着物の裾だった。ぼんやりとしていた頭からさつと血の気が引く。そこまで間近に赤い着物の子供の姿を見たのは初めてのことだった。天井を見上げていた時には子供の姿は目に入らなかったのだが、子供は天愛のことを見下ろしているようだ。顔を見上げなくとも分かる。子供の足の指先は、天愛の方をじつと向いて動かない。

天愛は、まるでそうすれば悪いことが起こるとでもいう風に、動

きを止めた。息を潜めて子供の足を見つめる。何秒か、もしかすると何十分かもしれないと天愛が感じるほど、天愛と子供は互いに動かなかったが、やがて子供の方が動いた。くるりと天愛の目の前で踵を返すと、最初と同じ風にぱたと足音を響かせながら部屋を出て行った。それでも天愛は暫く動くことができずにいた。足音が過ぎて大分経つてからようやく身体を起こすと、周囲を見渡した。

十畳ほどのその部屋には、特になにか家具を置かれているわけではなく、部屋の真ん中にぼつんと敷かれた布団に天愛は寝ていたらしい。硝子戸からは柔らかな日差しが差込み、その縁側の外には広い庭が広がっていた。その向こう側には竹林が見える。どう見ても夜渡蓮の風景だ。

天愛は小首を傾げて、自分が夜渡蓮で寝ていた理由を探してみたが結局分からなかった。制服を着ているところを見ると、泊まってしまった訳ではないのだろう。もしかしたら倒れでもしたのだろうか。

体を起こして布団の上からもう一度周囲を見渡すと、天愛は縁側へ出た。炊事場の方を向いて染野を呼んでみたが、屋敷の中はしんと静まり返っていて染野どころか誰もいない様に思えた。八十彦がいても、彼は普段本を読んばかりであり物音を立てないせいかもしれない。それに読書中は、彼自身他の音をあまり受け付けないのだ。

天愛は小さなため息を漏らすと、長い廊下を歩いた。

いつもは八十彦がいる居間を少し覗いてみたが、彼の姿はなかった。炊事場に染野の姿もない。

異変に気付いたのは、店を覗いてからだった。たくさんある照明器具にはいつものように灯りが灯されているのにも関わらず、そこには誰もいなかった。

まるで何か悪い夢を見ているようだった。

天愛は背筋を立ち上る怖気と必死に戦いながら店内を見渡した。そうして、強烈な違和感に眉を顰める。いつもと変わらない店内のはずなのに、置いてある商品や天愛の見知った物でも置き場所が違ったりと、とにかく何かと違うのだ。

店の真ん中にある木の柱を見て、天愛はぎょつとした。いつか客に買われたという蛙の能面がそこには吊るされていたのだ。

それに、他にも買われていくのを天愛自身見たことのある物がいくつか置かれていた。

「どうして……」

思わず口の中で小さく呟く。つい先ほどまでいた店内がそんな急に変わる訳がない。八十彦もいくらなんでもこんな手の込んだ悪ふざけはしないだろう。蛙の能面を見て、天愛は泣き出しそうになった。空耳だと思いたい鈴の音は響いている。夢なら覚めてほしいと願うが、店独特のにおいや手に触れた壁の質感は本物だ。

ずらりと並んだ古物の向こうにある硝子戸から差し込む明かりを見て、天愛はようやく少し安心できた。夜渡蓮の様子は普段にもまして異様だが、外に出てしまえばいいのだ。幸い外はまだ明るい。

さっと土間を見渡してみたが靴は見つからなかったが、この際靴は後でもいいと思い、天愛はタイツのまま下に下りた。ともかくこの異様な状態から一刻も早く抜け出したかった。けれど、それも叶わなかった。商品の間を通り抜け硝子戸の前に着いた時、その前には赤い着物を着た小さな子供が立っていたのだ。天愛は驚きで身体を大きく震わせ、立ち止まった。少女のすぐ後ろの硝子越しに明るい景色が見えるのに、天愛は恐ろしさで動けなくなってしまう。今まで少女は、天愛の目に時たま映る程度だったのだ。けれど今は天愛の行く先を邪魔する様に、すぐ目の前に立っている。それなのに

やはり顔だけが靄がかかったように薄ぼんやりと見えて見えない。まるでのっぺらぼうの様だ。

少女は口を開いた。それが分かったのは、薄ぼんやりとした顔の下の方に黒い影が出来たからだ。ゆっくりとその口は動く。声は聞こえない。恐ろしいのに天愛は目を離すことも出来ずに、言葉を成すように動く少女の口に釘付けになった。

『き』『つ』『ね』『さ』『ん』

少女の口はそう言っているとしたか天愛には思えなかった。

「きつね、さん」

殆ど無意識に少女の言葉を呟く。口に乗せるとその言葉は妙に舌に馴染んだ。

赤い着物に少女の言葉。

天愛は目を見開き後ずさった。先ほどとは違う恐怖が足から立ち上がってくる。遠い祭りの日、赤い着物を着てその言葉を口にしたのは天愛だ。遠くから響く祭り雛子を背に、ジャングルジムの上で狐の少年が笑った。

どんつと背中がぶつかったが、天愛は振り向くこともできなかった。遠い日に記憶が引き戻される。目の前の少女の姿が、子供の頃の自分の姿と重なって見える。もしかすると、その少女の顔は子供の頃の天愛のものではないだろうか。

「落ち着いて。彼女はそう性質が悪いものではありませんよ」

肩に触れた体温と共に、頭の上から静かな声が降ってきた。最近ではすっかり聞き慣れたその声に、天愛は昔の記憶から引き戻された。

きつと振り返らない方がいい。今狐の面を見てしまえば、再び古い記憶に吞まれそうな気がした。けれどその存在に安心したのも確かで、天愛は肩に置かれた手を拒むこともしなかった。

ぎゅっと目を閉じて少女の存在を視界から追い出す。

「彼女は、この店の主人なのです」

「え……」

天愛が目を開いた時には、少女の姿はなかった。まるで幻でも見ていたようだった。つい先ほどのことなのに、目の前に少女が立って何かを口にしていた姿が嘘だったように思える。

暫く呆然と前を見ていた天愛はゆっくりと振り返った。藍染の着物に思っていた通りの狐面が目に入る。しかし同時に目に映った髪色は、八十彦の漆黒ではなかった。橙の照明に薄く透けるその色は黄金色だ。それは、東雲を思い出させるものだった。静かだがよく響く声は八十彦のものそのもので、髪の色は東雲のものと酷似している。

天愛は言葉を発することもできずに目の前の人物を眺めた。そもそも東雲の髪色が地毛だとも思っていなかった天愛は、東雲と同じ髪色にそれほど驚きはしなかった。同じ様に染めれば同じ様な色になる。彼女を驚かせたのは頭为天辺から足までを含めたその姿だった。背格好やその声は八十彦そのもののなのに、それを否定する髪色は強い違和感を引き出す。けれど、その違和感よりも大きな感情が天愛の中で蠢いていた。目の前に立つ彼の姿を昔、見たことがあったのだ。その時、天愛は彼を『きつねさん』と呼んだのではなかっただろうか。

「ちひろくん……」

遠い夏祭りの日、内緒だよ、と言って狐面を顔から外した少年の名前を天愛は思い出すと同時に呟いていた。静かな店内でその呟きは狐面の男にも聞こえたのだろう。ちひろ？ と首を傾げた。そのことで天愛は彼が本人でないことに気付き、視線を落とした。そう、もう天愛が『きつねさん』と呼んだ少年はいないのだ。

「私は誰か知り合いの方と似ていますか？ 自分で言うのもなんですが、私の様な奇体な格好をした男はそうそういないと思いますが」
「……あの、ここの店主は狐面を被っている人なんじゃないんですか？」

訊きたいことはたくさんあったが、八十彦たちのことは何故か訊けなかった。

彼は、八十彦の親戚なのかもしれない。けれどなぜかそれは否定されてしまう様な気がしたのだ。

「狐面を被った本当の店主は先ほどの小さな娘ですよ。わたしたちはあくまでも仮の店主です」

「仮の？」

「ええ。狐面は仮の店主の証。おかしいでしょうが、この狐面をつけることは大切なことなのです」

一瞬、天愛の中で細かな糸が繋がかけ、けれどすぐに解けた。

今がチャンスなのかもしれない。八十彦がつける狐面の秘密をこの青年ならば、話してくれるのではないだろうか。

「ところで、あなたはどうしてあんなところにいたんですか」

「え？ あんなところ？」

「この裏の竹林です。まるで気が抜けた様にぼんやりと立たれてたんですが、私が声をかけても反応もなく……失礼ですが肩を揺すって呼ぶと気を失われたんですよ。覚えてないですか？」

身に覚えのないことに驚いて天愛が首を振ると、青年は小首を傾げた。当たり前のことだが、その様子だけでは青年がどのような表情をしているのか想像もつかない。それ以前に天愛は青年の顔も知らないのだ。

「あの、さっき仮の店主って……」

「ああ、こんなところで立ち話もなんですから、大広間の方へどうぞ」

のんびりとした青年の言葉に、天愛はただ頷き返すことしかできなかった。

通された広間は、いつも八十彦がいるはずの場所だった。たくさん積み重ねられた古書の山に、大きな座卓。時代劇にでも出てきそうな木の肘掛け。そのどれもが天愛にとっても見慣れたもので、けれどどこかが違う。

青年は先ほど、あの赤い着物の少女こそがこの夜渡蓮の店主で、狐面は仮の店主の証だと言った。では、狐面をつけた青年はこの夜

渡蓮の飯の店主だということになる。代々受け継がれてきたという狐面の店主。それが青年だということは、ここに八十彦がいないのは当たり前のことなのかもしれない。

天愛は薄々気付きかけていた。今度は、自分が夜渡蓮に客として招かれたのだと。到底信じられることではないが、そうすれば合点はいく。

二人が座卓の前に着くのと同時に、廊下から「失礼します」と若い女性の声が聞こえた。間もなく静かに開けられた障子の向こうから、着物を着込んだ若い娘が姿を現した。まだ幼さを残した愛らしい顔立ちをしているが、薄っすらと紅を引いたその顔は落ち着いた大人の表情をしている。

「お茶をお持ちしました。目を覚まされたんですね」

「ああ、小春さん。ありがとう。ちょうどさつき目覚められたみたいだよ」

「よかった。四壺さんが娘さんを抱きかかえて来られた時には、度肝を抜かれましたのよ」

「え、あの……すみません」

朗らかに微笑みながら言う娘に、天愛は頭を下げた。

「いえいえ、そんな謝らなくても。けど、私もお話しに混ぜていただいてもいいですか？」

座卓にお茶を並べた小春という娘は、小首を傾げた。訊いたものの、座卓の上にはきちんと三人分の湯のみが用意されている。元から話しに混ざるつもりだったのだろう。天愛が狐面の男に伺うように目を向けると、小春と同じ様に小首を傾げられた。天愛がよければいいということなのだろう。

「あの、私は大丈夫です。えっと……」

「ああ、申し遅れてすみません。私、木下小春と申します。その店主の世話をさせて頂いてます」

「あ、私、椿天愛といいます」

「あれ、私は自己紹介しましたっけ？」

どうやら狐面をつけた男は随分とマイペースな人らしい。声は八十彦と同じでも、のんびりと間の抜けた様子で言われれば、八十彦とは性格が似つかないことが伺えた。

「まあ、だからもてないんですよ。四壺^{よひ}さん」

随分な言い方だったが、青年は気分を害した様子もなく「そうだねえ」と言った。どうやらこの狐の店主は人もいいらしい。そんな二人の様子は雇い主と雇われ人には見えず、仲の良い姉弟の様に見える。

「失礼しました。私は夜渡蓮の店主、綾織四壺です」

青年の苗字は、やはり八十彦と同じもので、天愛は今更驚きもしなかった。もしかすると親戚なのかもしれない。八十彦が仕組んだ大掛かりな嫌がらせなのかもしれない。けれど、そんな天愛の希望を籠めた勘繰りは当たることにはなかった。

四壺の横に置かれた新聞に、殆ど無意識に目を向けると、そこには見慣れない写真や文字が記されていた。そして、その日付に天愛はぎょっとして思わず目を逸らした。新聞には、大正十二年八月二一日と記されていたのだ。見なかったことにした方が懸命に違いな。い。さもないと僅かながらに残っている冷静さを失くしてしまいうだ。

天愛が嫌な汗を流していると、小春が陽気な声でお茶を勧めた。

「それにしても、どうして椿さんはあんな所にいたの？」

小春の直球な質問に天愛はどう答えていいかわからず、視線を彷徨わせた。ただでさえ混乱しているのに、目の前にいる人たちに怪しまれているかもしれないと思うと余計に頭が働かなくなる。まず、どうして自分が此処にいるのかさえわからないのだ。夜渡蓮にいたのは分かる。いつもどおりアルバイトに来て炊事場でお茶の用意をしていると、狐を見たのだ。その狐を無意識に追いかけてしまった。「狐を追いかけてたんです」

正直に口にしてしまうと、その場の空気がしんとしたものになった。先ほどまえ朗らかな笑みが浮かべられていた小春の顔も、ぼ

かんとしたものになる。おかしいことを言っていると十分に分かっている天愛は、居た堪れない気持ちになって俯いた。

「狐が、竹林に？」

天愛にとつて気まずい沈黙を破ったのは、静かな声だった。その声には少しの驚きが混ざっている。

天愛は小さく頷いた。

「信じてもらえないかもしれないですけど、私、ここでアルバイトをしているんです」

「あるかいと？」

「え、あ、働かせてもらってるんです」

「はあ。ということは、お客さんではないということですね」

四壺は天愛の言葉に疑うでも質問を投げかけるのでもなく暢気な声で言った。希少なお客がやってくる夜渡蓮の店主なのだ。珍妙な客人には慣れているのだろう。

「お茶の用意をしている時、足を動物の体が撫でる感触がしたんです。それで後ろを見たら、狐がいたんです。それを追いかけて……竹林に行ったら、気付けばお布団で寝てました」

「狐が……お嬢さん、あなたの雇い主の名前は？」

「え？ 綾織八十彦さんですが……」

「その店主はまだ狐の面をつけていますか？」

「はい。つけてますが」

この店で働いていてその雇い主がこの店の店主であることは自然なことであるが、同時に店主である四壺の口から「店主」と言う言葉を聞くのは違和感のあることだった。彼はなんの疑いも持たずに天愛の言葉を信じたのだろうか。

天愛の答えの後に、狐面の下で大きな溜め息が漏れるのが聞こえた。同時にがっくりと落とされた肩と頭は、表情こそ見えないが彼の落胆の気持ちを大きく表していた。

「八十、か。ということは、私の代では見つからないということだ。それどころか、私が生きている間には見つからないということか」

何が、と訊きたかったが、青年の落胆ぶりに声を掛けることもできずに天愛は呆然とその姿を眺めた。本当に八十彦とは随分と違った性格をしている様だ。八十彦が落ち込む姿など、天愛には想像もつかない。

「私たちは、狐を長い時間をかけて捜していました。それがあの女主人の願いだからです」

青年の言葉は、天愛にとっては唐突な内容だった。え、と思わず声を漏らすと、四壺は顔を上げた。狐面のくり貫かれた瞳から、静かな色を湛えた目が見えた。それは八十彦とも、東雲とも似ている。「狐って、私が追いかけた狐ですか？」

「恐らく、そうでしょう。こんな近くにいたなんて……それとも、あなたが連れてきたのか」

「あの、言われていることがよく分からないんですが……どうして狐を捜しているんですか？」

「あなたの主人はこの店の秘密を話していないのですか？」

「時間が、交差するとだけ」

天愛がぼつりと言うと、小春はまあ、と呆れた様子で呟いた。

「八番目の店主は随分と意地悪な方なのね」

「小春さん」

静かな声で咎める様に娘の名前を呼んだ四壺は、狐面の位置を正す様に少し持ち上げた。

「その店主にも何か考えがあるのかもしれない。椿さん、私たちの間では幾つかの決まり事があります。一つは、先の話しを自分から聞かないこと。自然と耳に入ってしまったことは仕方がないということです。もう一つは、この夜渡蓮の秘密を外には漏らさないこと。けれど私たちにも協力者が必要です。此処の秘密を知る人は親族以外にもほんの少しではあります。狐を捜すというのはこの店の店主の仕事であり、親族と協力者たちも知るところであります」

「はあ」

「だからあなたが知らないというのは不公平だ」

「四壺さん、あなた先ほど考えがあるのかもしれないと言ったばかりじゃないですか」

「まあ、少しくらいはいいでしょう。もしかすると最後の狐の店主になるかもしれない八十彦へのささやかな嫌がらせです」

その言葉に天愛は目を円くさせた。嫌がらせとは、一体どういうことだろうか。それほど重要な話であるのなら話してくれなくとも結構なのだが、好奇心が秘密を露見しようとする四壺を止める言葉を出させなかった。今止めてしまえば、目の前の青年はあっさりと話すことを止めてしまいかもしれない。そうなれば天愛はこの先、もうその秘密を知りえることはないのかもしれないのだ。

呆れたように溜め息を漏らす小春の姿が目端に映ったが、天愛は四壺から目を離せずにいた。

ボンボンと、振り子時計の鈍い音が鳴り響く。部屋に差し込む斜陽は橙色を増していた。

「狐というのは、元々ある少年の通り名でした。黄金色の髪をした少年のことを皆狐と呼んでいたのです」

秘密とは言っても、そう大層なことではない。ありふれた恋愛小説のような話ですよ、と狐面の青年は言った。

夏祭りの時期、祖母の家に預けられるのは天愛にとって毎年の恒例だった。

祖母の家の、近所の神社で行われる夏祭りはそれなりに有名で、天愛とその弟は祭りに行く為に毎年前日二日前から祖母の家に滞在するのだ。そして同じ頃に泊まりにやってくる従兄弟たちや祖母と共に祭りを満喫する。

今では遠い、毎年の当たり前だった風景。それは、天愛が小学低学年から高学年に上がる頃になくなってしまった。他の従兄弟たちは今でも集まっているのかもしれないが、天愛の耳にはそんなことは入らない。天愛だけがある年から夏の集まりには参加しなくなったのだ。

夏祭りの日。まさかこの時は次の年以降夏祭りに出向かなくなることになる等、想像もしていなかった。

人ごみのなか他の従兄弟達と逸れてしまうのは、その中でもまだ幼い子供だった天愛にとって恐ろしいことだった。逸れない為には人ごみをすいすいと進んで行く少年達に必死で付いて行かないといけない。年長の少年がいつも気にはかけてくれたが、自分以外の四人の従兄弟達皆の状況を把握しきることはできない。

ふいに天愛は前を歩く少年たちから目を逸らした。いつもなら気になることもないお面の屋台に、どうしてかその時強く興味を惹かれたのだ。

赤い屋台の垂れ幕を背景にずらりと掛けられた面は、その時流行の船隊ものや愛らしいキャラクター、ひょっとこ等だった。そしてその中に、一つだけぽんと他の面よりも少し小さめの狐の面が吊るされていた。天愛が興味を惹かれたのはその狐の面だった。なんてことはないただの面。他の面と違うところも特にはないが、天愛には何故かその面が際立って見えたのだ。

祭り囃子に混ざり、微かな鈴音が聞こえた。魅了されたかの様に狐面に釘付けになっていた天愛は、どんっと肩を押されて尻餅をついた。

「ごめん！ 大丈夫？」

肩にぶつかられたことよりも急に現実に取り戻された様な感覚に陥った天愛は、目を数度瞬かせてから声の主を見上げてぎよつとした。

天愛に謝罪の言葉を述べたのは、彼女と同じ年頃の少年だった。その顔には、天愛が先ほどまで見つめていたものとそっくりな狐面を被っていた。それだけではない。親が染めたのか、髪は黄金色をしている。藍染の浴衣に木の下駄は別に可笑しなところなどないが、同じ年頃の少年にしてはなんと奇抜な姿だった。それでも、祭りの中ではそれほど目立たないのか少年に目を留める者は少ない。

「怪我してない？」

そう訊いて少年は手を差し伸べる。天愛は無意識にその手に自分の手のひらを重ねていた。

ぐいと手を引かれて立ち上がると、少年は狐面の下で目を細めた。

「……きつねさんの、お面」

「ああ、お祭りだから。怪我は？」

「ない」

天愛は少年の狐面を見上げたあと、首を振った。話しながらも少年が狐面をとる気配はない。

よかった、と少年は面の下でほっと息を吐いた。そうしたあとで、何かに気づいたように左右を見渡した。

「一人？ もしかして迷子？」

「うん。迷子」

「うわあ……。こちら辺の子？ 家族と来てるの？」

「いとこのお兄ちゃんたちと来てるの。おばあちゃん家から来た。お祭りの最後はいつも近くの公園で花火をするから、そこで会えると思う」

狐面の少年は黄金色の頭をがしと掻き、うーんと唸った。表情は見えなくとも、少年が悩んだ表情でいることが天愛には分かった。迷子の少女を放っておくことができない、人の好い子なのだろう。

いつも逸れてしまうと泣きそうになるほど不安になるのに、この時はそんな暇もなかった。少年は面の下で小さく何かを呟くと、天愛の手をとって歩き出した。それには天愛も少し驚いたが、少年が狐面をしていたせいと同じ年頃の少年と手を繋ぐ時の気恥ずかしさは湧いてこなかった。それどころかほっとした気分になり、その手を強く握り返す。

「逸れた時に待ち合わせる場所とかないの？ おばあちゃんの家の場所は覚えてる？」

「ない。おばあちゃんの家には多分今誰もいないよ」

「そつか。じゃあ、さっき言ってた公園に行こう」

「きつねさんは誰かと一緒にじゃないの？」

天愛が訊くと、少年は無言で振り返り天愛の方をじっと天愛を見た後またゆっくりと歩き出した。

「きつねさんじゃないよ。……まあ、それでもいいけど。僕の名前は千尋。お前は？」

「あまな。椿天愛」

「変わった名前だなあ」

そう言っている間にも景色は少しずつ変わっていく。通り過ぎていく屋台からは甘いにおいや塩っぱいにおいがしてきた。下駄の上に飛んだ砂が指の間に入り込んで少し気持ち悪い。手のひらに触れる熱は熱い。

不思議な感覚だった。出会ったばかりの少年に手を引かれて、熱に浮かされた景色の中を進んでいく。少年の顔は見えないけれど、天愛は彼のことを信用しきっていた。

「待って、のど渴いた。ジュース買って行っていい？」

「いいけど。呑気な迷子だなあ」

二人は近くの屋台で氷水に浸かったラムネを買い、また歩き出した。

広い境内の終わりを告げる社をくぐっても、屋台は道路にまで続いていて。連なる提灯の灯りはアスファルトを橙色に染めている。

千尋は天愛の言っていた公園に見当がついていたのか、天愛に何を訊くこともなく進んでいく。片手で抱きかかえたラムネの瓶から腕に水が滴り、天愛は目線を落とした。

腕に下げた巾着袋からはおばあちゃんに買ってもらった林檎飴の竹串が飛び出している。赤い浴衣の裾は転んだ時に付いたものが払いきれていなかったのか、少し白く汚れていた。繋いだ手は少し汗ばんでいる。夜は涼しいが、それでも歩き続けていると身体は少し火照ってくる。千尋は狐面をつけたまま暑くないのだろうか。

「きつねさんのお面、外さないの？」

「外しちゃ駄目なんだ」

天愛は目を円くさせた。千尋は好き好んで狐面をつけていると思っていたのだが、違うのだろうか。彼の口ぶりからしてみると、それは誰かに強制されているようだった。

「どうして？」

「うちの決まりだから。目印なんだ。これがないと見つけてもらえないかもしれない」

「誰かを待ってるの？」

「うん」

そこで会話は途切れた。

橙の灯りは遠いものとなり、いつの間にか蛍光灯で照らされた公園が目の前にあった。

「まだ誰もきてないみたいだな。もしかしたらお前のこと探してるのかも……どうする？　ここで待ってる？」

「一緒に待っていてくれる？」

蛍光灯で白く浮かび上がる公園は少し不気味だった。いつもは四人の従兄弟たちと祖母と来るから気にはならなかったが、もし一人

でこんなところに残されたら堪らないだろう。千尋が頷いてくれたので、天愛はほっとした。

ベンチに二人並んで座り、天愛はラムネを開けてもらって飲んだ。瓶を傾けるとカラコロと硝子球が瓶にぶつかる音がして、口の中で炭酸が弾けた。

その時、リンツと鈴の音が近くで聞こえた。もしかすると猫がいるのかもしれない。

「ちひろくん、飲まないの？」

「飲むよ」

けれど彼は瓶を開けたつきり口をつけてはいない。天愛が飲み終わっても、瓶を満たす透明な液体は一向に減らなかった。

天愛は飲み終わった瓶を逆さまに動かし、中を覗いたりした。中に入ったビー玉をとりたいのだが、どうすればいいのか分からない。いつもは祖母にとってもらっていたのだが、どう見たってその小さな口からビー玉は出てきそうになかった。

「かして、とってあげる」

「とれるの？」

「うん。向こう向いてて」

その言葉に従って天愛は顔を背けた。少しの間のと肩を叩かれて振り向くと、千尋の手の上には薄く青みがかった硝子球が載っていた。

「すごい！　ありがとう。どうやったの？」

「内緒」

穴から覗く目が細くなる。きっと狐面の下で微笑んでいるのだろう。

天愛はその仮面の下にある表情を見てみたくて、顔を近づけた。細まっていた目が驚いたように円くなる。

「ずつつとお面つけてるの？　暑くない？」

「……別に暑くないよ」

見開かれた目は一瞬あとにまた細められた。優しそうな目をして

いる、と天愛は思う。その目を見れば好意的な感情を抱かれているのが分かった。

内気で毎年会う従兄弟達とも最初は上手く喋ることができないのに、この少年が相手だと違った。それも、彼が狐面をしているせいなのかもしれない。狐面や髪色を覗くと、千尋は従兄弟たちとなんら変わらない普通の少年だ。けれど、目の前に実際にいるのに狐面が現実感を少し遠ざける。物語の中の登場人物と話しているような気分だった。

「ほんとに似てるな……」

ぽつりと言われた言葉を天愛は聞き取ることができなかった。天愛が小首を傾げると、千尋はふと面の下で笑った。

「お前、毎年この祭りには来てるの？」

「うん」

「そっか」

その時だった。遠くから天愛を呼ぶ声が聞こえてきたのは。公園の入り口から走り寄って来る少年達の姿が見える。聞きなれたその声は年長の従兄弟のものだった。

「あ、お兄ちゃんたちだ。ちひろくん、お兄ちゃんたち来たよ」

大きく手を振ってから振り返ると、千尋は立ち上がり天愛を見下ろしていた。

「うん、じゃあ行くね」

そうあっさりと言い残して、狐面の少年は天愛が止める間もなく走り去ってしまった。

それからほんの一時共に過ごしただけの少年は、天愛の心の中に居座り続けた。後から思えばあれが初恋だったのかもしれない。殆ど何も知らない、顔も見ただけの少年相手に可笑しいかもしれないが、面から覗く、優しく細められた目に強く惹かれたのだ。けれどそれも時間が経つほどに薄まっていき、春になれば思い出すこともなくなっていた。

そして次の夏、祭りで天愛と千尋は再会した。人ごみの中で彼の

姿を見かけた天愛は考えるよりも前に走り出していた。従兄弟達と逸れてしまう恐怖よりも、その時に千尋を見失ってしまうかもしれないという焦りの方が大きかった。

一年前よりも随分と背が伸びた少年は、けれど変わらない優しい目目で天愛に笑いかけた。

狐の店主が静かな口調で語ったのは、随分と昔の話しの様だった。昔、と言っても今いる夜渡蓮も恐らく、天愛からしてみれば昔になるのだろう。

遠い昔の話しは天愛には想像もつかない、夢物語の様な内容で、その様なことが本当にあったとは信じがたいことだった。

彼らは、夜渡蓮ができる前から狐を探し続けてきたらしい。そしてその鍵となるのが狐面だ。狐は、狐面を目印に彼らを見つける。その時こそ長く続いた女主人の悲願が叶う時だ。死しても狐を求め続ける女主人の執念によってこの不思議な店は続けられている。かつて幼い村娘と狐の話しは東雲にも聞いたことがあったが、あれは夜渡蓮に伝わる話しのほんの一部分だったのだろう。狐と呼ばれた少年は死後、本物の狐に姿を変え少女の前から消え去ってしまったのだという。

女主人と狐の少年の話しのなか、天愛は遠い夏祭りの日のことを思い出した。それと同時に強い罪悪感が沸いてくるが、それは口に出さなければ零れない。

夜渡蓮からあの夏祭りが行われる神社は近い。千尋は、見つけてもらう為に狐面をつけているのだと言わなかっただろうか？ だとしたら、彼は夜渡蓮、綾織の家の者だったということになるのかもしれない。子供の頃の曖昧な記憶は頼りにならない。今思い出してもあれは夢だったのではないだろうかと思う程なのだ。けれど、何か記憶違いをしていたとしても、こんなにも奇妙な一致はありえる

のだろうか。

「あなたが夜渡蓮に呼ばれたことには意味がある」

いつの間にか俯いていた顔を上げると、四壺が面の下で目を細めていた。優しいそれは、千尋のものとよく似ている気がした。

「女主人にあなたはよく似ているのです。だから女主人はあなたのことを欲しがった」

天愛は呆然と四壺の面を眺めた。

その話しは以前聞いたことがある。あれはかつてこの場所にあった、村に住んでいた少女のことだった。

ようやくここで話しが繋がり、天愛は総毛立った。とても嫌な感じだ。思いもよらない自分の過去との繋がりや、あの日、夜渡蓮を訪れた時から女主人と呼ばれるあの小さな娘に利用されていたのだと思うと気持ちが悪い。

「……どうしてですか？ 似てたからって」

「狐が見つけてくれる可能性が増えるからです」

「それだけですか？」

「ええ、おそらくそうでしょう」

あまりにも単純な理由に言葉も出せなくなる。

ただ狐と再び会いたいのが為に、子孫まで巻き込んだ女主人の執念は凄まじいものだろう。ただ話しを聞いただけでは、女主人が狐にそこまで執着する理由が分からない。

「巻き込まれたあなたからすれば迷惑な話かもしれませんが……どうか彼女に付き合ってやって下さい。あなたが狐を見つけたのなら、彼女と狐がまた出会う時は近いのかもしれない。私もその瞬間に立ち会いたかったのですが、叶いそうにはない」

その声には寂しげな響きが混ざっていた。彼は本当に女主人と狐が再会することを強く望んでいるのだろう。彼女の為に狐面を被り続ける夜渡蓮の飯の店主たちは皆そうなのかもしれない。恐らく、あの八十彦でさえもそうなのだろう。

そんな風に言われて断れるはずもない。可笑しなことに巻き込ま

れるのは確かだが、それは夜渡蓮の特殊さを知ってから諦めがついている。それによって何か害を被ることもないだろう。ただアルバイトを続けられいいだけなのだから。

天愛が小さく頷くと、狐の店主は微笑むように目を細めた。

夕日が沈みかけた頃、天愛は夜渡蓮の戸を開けた。

戸をくぐる瞬間、馴染みの強い耳鳴りに襲われ振り返った硝子戸の向こうには、もう四壺と小春の姿はなかった。門前にはアスファルトの道路にその向かい側には緑生い茂る空き地がある。戸の内側から見ていた景色と変わらない。外の現実的な空気に触れた瞬間、先ほどのことは夢のように思えた。

狐と女主人の話を頭の中で反芻する。今まで天愛の前に何度も姿を見せてきた赤い着物の小さな少女が自分とそっくりなのは分かった。そっくりと言っても、天愛自身は彼女の顔を何故か見る事ができないから本当なのかどうなのかは分からない。そもそも全てが嘘の様な話なのだ。何もかもが半信半疑。自らの目で確かめてみないことにはこんな不可思議なことを信じることができない。目で見たとしても今度はそれを見た自分のことを疑ってしまいそうにはなるかもしれない。

アスファルトの道路をランドセルを背負った子供たちが走り抜けた。静かな住宅街に子供たちのはしゃぐ声はよく響く。家々の窓からはぼつぼつと灯りが漏れ始めていた。もうすぐ街灯にも灯りが灯されるだろう。

「きつね」

ぼつりと呟く。

その言葉は昔からあまり好きではなかった。縁起が悪い名前だ。天愛は一度閉めた戸にもう一度手をかけた。一呼吸吐いてから、ゆっくりと横に引く。そこには、以前と変わらない天愛がよく見知った夜渡蓮の風景が広がっていた。

「ああ、おかえり」

いつもと変わらぬ穏やかな声で言われた言葉は、先ほどまで天愛が直面していた不可思議な出来事など知らない様な口ぶりだった。

けれど彼女が急にいなくなったことを彼は知っているはずなのだ。天愛は疑う様な眼差しで狐面の店主の面を見た。

「俺のお面に何かついてる？」

「いいえ……あの、私いつからいなかったですか？」

可笑しな質問に天愛は言った後で自分自身眉を顰めた。

「いつから？ さあ、気づいたらいなかったからね。お客さんが来ていたし、君がいなくなっていることに気づいたのはついさっきだよ。買い物にでも行つてたのかい？」

その言葉は天愛からしたら惚けの様にも聞こえた。けれど本当に知らなかった場合、彼の知りえぬ所でこの店の秘密を知ってしまった後ろめたさがある。だったら洗いざらい話してしまおうか。この不思議な出来事を自ら八十彦に話すのは躊躇われるが、隠しておく必要もない。

「あれ、どうしたの？ 二人揃つてこんなところで」

あつけらかんとした声に天愛は拍子抜けした。今日は休みのはずの東雲が門前でバイクを押している。

「君こそどうしたんだ。今日は休みをとってたじゃないか」

「ああ、うん。用事が意外と早く終わつたからちよつと顔出そうかと思つて。天愛ちゃん、大丈夫だった？」

「え？ はい……」

「とりあえず二人とも中に入りなさい」

八十彦に促され、東雲はバイクを停めに、天愛は戸の中へ入った。東雲の存在は天愛を安心させた。どう見ても今の時代に生きている彼の姿は、この不思議な空間の中でも天愛に現実感を与えてくれる。

狐面を見ることには慣れてきたが、怖いと思う気持ちはまだ残っている。それに八十彦とはやはり合わない。二人で先ほどのことを話さずにすんだことに天愛は知らず安堵の息を漏らした。

「おはようございまーす」

いつもの癖か、東雲が陽気な声で挨拶しながら入ってきた。首に

巻いていたマフラーをとり、ダウンジャケットを脱ぎながら土間に行く。ジャケットを壁にかけた東雲は、ぼんやりと土間に立ったままの天愛を見て訝しげな顔をした。

「どうしたの？ 天愛ちゃん。てか、そういえばどうして戸口で立ってたの？ もしかしてどっか行ってた？」

「あの、そのことで言いたいことが……」

「いいよ。座りなさい」

いつの間に用意したのか、茶器の乗った盆を持った八十彦が暖簾の向こうから姿を現した。

「お客さんは……」

「もう帰られたよ」

「うつわ。八十彦さんがお茶の用意するなんて、雨が降るかも。やべ、俺今日傘持つてきてない」

「いいから座りなさい」

静かな声に少しの苛立ちが混ざっていることに二人は気付き、慌てて座った。天愛は土間上に、東雲は近くにあった椅子に。天愛は八十彦の隣りに座ってしまったことを後悔したが、場所を移動するわけにもいかない。極力正面にいる東雲を見ることにした。

「で、言いたいことってなんだい？」

改めて訊かれると天愛は話すことを躊躇った。一体どこから話せばいいのだろうか。炊事場で狐を見つけたところから？ けれど四巻が言っていた話しが本当であれば、過分な期待を抱かせてしまうかもしれない。まだ狐と女主人が出会えると決まったわけではないのだ。

「信じてもらえないかもしれないですけど、わたし、夜渡蓮に希少なお客として招かれたんです」

東雲が僅かに表情を動かしたのが見えた。八十彦の方は見れない。

「その時の店主の名前は？」

天愛の言葉に驚くでもなく、八十彦が尋ねる。その声に釣られて横を見れば、八十彦は天愛に目を向けることもなく慣れた仕草で湯

呑みにお茶を淹れていた。

「四壺さん、でした」

はい、と湯呑みを渡され、それを両手で受け取りながら天愛は答える。

綾織、四壺。たしかあの時の狐の店主はそう名乗っていた。まだいない先の店主である八十彦の名前を訊き、彼が何代目か分かった様な口ぶりだった。名前にある数字は、夜渡蓮の店主の代数を表すのだろうか。まるで囚人のようだ。

「なるほど。四代目だね」

今度は東雲がいつもと変わらぬ調子で言った。

「で、君は一体何を売り買いしたんだい」

「……情報を」

八十彦の目が細くなる。自分の膝を見つめだした天愛は、それに気付かない。

「この時代の夜渡蓮のことを私が話して、店主は私に狐のことを教えてくれました」

不意に、赤い着物の裾と白い足袋が自分のすぐ前にあるのが見えた。少女がじつと天愛の方を向いて立っている。その正体が分かつても、不気味さは消えない。むしろその執念や執着心を理解できない天愛はますます彼女を怖ろしく感じた。けれどその願いを叶えてあげたいと思う気持ちが少しはあるのも事実だ。天愛の想像もできない時間を彼女はただ只管に狐を思いこの薄暗い骨董店の中で過ごしてきた。それはまだこれからも続く。狐が見つかるまでは。

「そう。それで、君はこれからどうする？」

「ちよつと、八十彦さん、どうするってなんだよ」

「別に変わりません。ここでアルバイトを続けます。それだけです」
思っていたよりも落ち着いた声が出た。顔を上げると、もう着物の少女の姿はなかった。東雲が少し驚いた様な顔をして自分を見ていることに気付いたが、何も言わなかった。隣りを見ると、八十彦が面の下で目を細めているのが見えた。やはり四壺に似ている。

今になつて最初八十彦が言つていた言葉の意味を知る。「この面の下を見れば君は驚くだろう」それは、きつと祭りの日にあつたあの狐面の少年に似ているからだ。けれど天愛は驚くことはないだろうと思つた。妙に細かなところを覚えているかと思えば、凄く曖昧なところもある。天愛は千尋の顔をはつきりとは思ひ出せない。細められた優しい目を思い出すことはできても、その顔の全貌を思い出すことはできないのだ。思い出すのはいつもあの不気味に笑う狐面。血を吸つたように赤い紅。

「そうか。ありがとう」

それはいつもと変わらない柔らかな落ち着いた声だつた。

黙つていたことを謝るでもなく、何かを天愛に訊くでもない。彼には訊きたいことがたくさんあつた。夜渡蓮のこと、その店主たちのこと、そして千尋のこと。

きつと千尋は綾織の家の者だ。女主人のために狐面を被り、狐を捜していた。見つけてもらおうとしていた。そしてその思いを幼かつた天愛は踏みにじつてしまった。その罪滅ぼしの思いもある。自分のせいで彼ができなかったことを代わりにしよう。それで全てがなかったことにはならないけれど、ほんの少しの慰めにはなる。

「天愛ちゃんつてさあ」

八十彦が奥へ行つた後のことだつた。小さな声で東雲が言つた。

「最初もつと弱い子だと思つてたよ」

「強いとは思わないですけど……」

「うん、でも女主人に利用されていることを知つたら逃げ出すと思つてた」

それは弱いとは少し違ふだろう。逃げ出さなかつた方が弱い場合もある。

東雲は言つたあとで八十彦の淹れたお茶を飲み、舌を出した。出廻らしの様な薄めのものが好きな東雲には、八十彦の淹れた濃いお茶は苦かつたのだろう。

気付けば外はもう夕日が沈み、暗くなったアスファルトの道路の上では街灯が点いていた。あと一時間ほどで閉店だ。

「八十彦さんは最初、夜渡蓮を継ぐはずじゃなかったんだ。先代がいた頃は、普通の学生だったらしいよ」

意外な言葉に天愛は目を円くした。八十彦も人の子だ。学生だった時期があっても可笑しくはないが、想像もできない。

「お面もつけてなかったってことですか？」

「うん、そう。むしろそれを嫌がってたらしい。馬鹿馬鹿しいってそれが、俺がアルバイトに来る様になった頃には狐の店主は八十彦さんになってたんだ」

「……どうしてですか」

嫌な予感がしたが、訊かずにはいられなかった。湯のみを持つ手のひらに汗が滲む。

「もともと、八十彦さん以外に継ぐはずだった子がいたんだけど」

それ以上は聞かない方がいいのかもしれない。けれど天愛は口を挟むことができなかった。憶測ではなく、本当のことを知りたいという気持ち言葉が言葉を遮ることを阻んだ。どの道、自分がしてしまった罪は消えないのだから知っておいた方がいい。起こってしまった出来事は、魔法の様に言葉一つで変わることはないのだ。

「亡くなってしまったんだ。まだ小さい子供だったんだけど、ジャングルジムの上から落ちて」

驚くことはなかった。ああやっぱり、という気持ちと再び強い後悔の念に襲われる。

夜渡蓮の住人だからといって、狐面を被り現実離れた人だとはいえ、人の子だ。何かがあれば簡単に死んでしまう。

幼い天愛はそんなことも分からなかった。彼は、千尋はどこか人と違う、特別な子だと思っていたのだ。それが間違いだったと知った時にはもう遅かった。

「……天愛ちゃん？ 大丈夫？ 顔色が悪いけど」

「大丈夫、です」

その声は少し震え、弱弱しかった。

やはり夜渡蓮とは昔から繋がっていた。あの夏祭りの日、狐面の少年と出会った時から。ならば、今天愛が此処にいることは何も不自然なことではないのだ。

ジャングルジムの下から見上げた少年はいつもの様に優しげに目を細め、狐面の下で微笑んでいた。

彼を「きつねさん」と呼び、地へ落としたのは天愛だ。

それは変わりようのない事実だった。

「なんか元気ないね」

頭の上から降ってきた声に天愛が顔を上げると、綾香が訝しげな顔で見下ろしてきていた。

ホームルームが終わったあと、随分とぼんやりしてしまっていた様だ。教室の中に残っている生徒は疎らで、廊下から騒ぐ声が響いてきている。

「そうかな？ 雨だから、少しだるいのかも」

今日は朝から雨が降り続けている。外から差し込む明かりは僅かで、教室の中は白い蛍光灯の灯りで満たされていた。窓から見える雨空を見るだけで学校から出るのが億劫になる。

今日は珍しく夜渡蓮でのアルバイトは休みだ。昨日東雲の話しを聞いて以来、気分が優れない。当たり前だ。何も感じない方がおかしいのだから。

雨雲が今の自分の感情を表している様な気がして、天愛は溜息をひとつ漏らした。

「雨止まないね。明日は晴れるといいんだけど……じゃあ、私部活に行ってくるよ。天愛はもう帰るの？」

「うん、雨足が弱まったら出るよ。久しぶりにおばあちゃんの家に寄ろうかと思ってるんだけど」

「そっか、気をつけてね」

綾香の後ろ姿を見送ってから、天愛は机に突っ伏した。先ほど綾香に言ったとおり、本当に身体がだるい。これは雨のせいだけではなく、自分自身の感情のせいだろう。いつまでもこんな風にはしていられない。そもそも、思い出した時だけこんなに落ち込むなど調子がいい。それも思い出さない様にしていたせいかもしれない。思い浮かびそうになる度にその記憶を振り払ってきたのだ。

狐面は不吉。記憶を引き戻される。あれは祭りで会った少年の面

だ。赤い紅は血を吸って笑みの形を描く。

「……最低」

小さな声で呟くと、それは教室の隅から響いてきた笑い声に掻き消えた。

天愛が顔を上げる頃には教室にも廊下にも、もう殆ど人は残っていなかった。ぼんやりとしていたから、そんなことにも気づけなかったのか。祖母の家に行くのなら、暗くなる前に出た方がいい。

重い体を椅子から離すと、さつと横を何かが通り過ぎた気がした。周囲を見渡しても人はいない。教室の中に残っているのは天愛の他に、本を読んでいる女子生徒一人と教室の隅で会話をしている男子生徒三人くらいだった。

気のせいだろうと思い鞆を取ると、聞き慣れた鈴の音が響いた。教室の中に、いる。

それは女主人ではなく、きつと狐だ。天愛は再び周囲を見渡したが、急に立ち上がり不審な行動をとる天愛にクラスメイトたちが訝しげな目を向けるだけで、狐の姿などどこにも見当たらなかった。

最近夜渡蓮に毒されすぎているのかもしれない。夜渡蓮の店主たちが捜し求める狐が、まさかこんなところにいる訳がない。そう思えば、夜渡蓮の中にいたこと自体がとても不可解なことなのだが。あんなに近くにいながら、彼らは何故お互いを見つけることができなかったのだろうか。

「椿さん、もう教室締めるけど大丈夫？」

クラスメイトの少女が突っ立ったままの天愛に遠慮がちに訊いてきた。先ほどまで教室の隅にいた男子生徒たちの姿はもうすでにない。その時になって天愛はようやく自分の不審さに気づき慌てた。「うん、大丈夫。ごめんね」

机の上に置いていたコートを羽織り鞆とマフラーを持つと、入り口近くに立つクラスメイトの元まで急いだ。胸がざわざわと騒いでいる。四巻が言っていたとおり、もしかすると自分は本当に狐を誘

き寄せているのだろうか。狐は、天愛を見つけたのだろうか。

雨足は日が落ちるにつれ、ますます強いものとなっていくた。天愛は廊下で教室の鍵をかけたクラスメイトの少女に手を振ると再び周囲を見渡す。僅かに残っていた同級生達の姿ももう廊下には残っていない。ぽつぽつと蛍光灯の光りが漏れる教室があるから、まだ教室に残って時間を潰している生徒はいるのかもしれないが、しんと静まり返った廊下で誰もいない様な錯覚に捕らわれて天愛は身震いした。

「きつねさん」

小さな、本当に小さな声で呟いたあと、馬鹿馬鹿しくなり、同時に息苦しくもなった。そもそも女主人が狐の少年のことをなんと呼んでいたのかも知らないのだ。幼い頃の自分が、千尋のことをそうふざけて呼んだだけ。狐の少年にも、名前はあっただろう。

自分を許せないからこそ閉じ込めてきた記憶。天愛の両親や弟や従兄弟たちは、たった一晚のうちに起こってしまった悲劇から彼女を遠ざけようとしてきた。何が起こったのか訊いてくる大人たちの群れに、救急車の音、従兄弟たちがやってくるよりも先に集まりだした近所の人々。てらてらと地面を濡らす赤い血に、遠くで響く祭り囃子。鉄の檻の中、動かなくなってしまった少年とその傍らにある狐面から目が離せなかった。公園にはたくさんの人が集まっていたのに、その時間違いなく天愛は一人ぼっちだった。大きな手に頭を撫でられるまでは。その時頭を撫でくれた大人の顔も覚えていない。祭りの参加者だったのだろうか。浴衣を着た男の人だったということだけは覚えている。

天愛は気持ちを切り替える様に頭を振った。このまま記憶に浸っていたら、本当に夜になってしまう。手に持っていたマフラーを首に巻き、急ぎ足で階段を下りた。

狐のことは気のせいかもしれない。たえそうでなかったとしても、天愛の方から狐を見つけ出すこともできない。ただ狐がその姿を現すのを待つしかないだろう。

祖母の家に着く頃には、外はもう暗かった。傘を叩く雨音を聞きながら天愛は緩やかな白熱灯の灯りを見る。こちら辺は祖母の家を含め、古い家が多い。家を囲む塀も、玄関を照らす古びた照明も屋根瓦も天愛が小さな頃から変わらない。

戸に手を掛け、鍵が閉まっていることに気づいた天愛は鞆の中を探った。祖母には高校に上がった時に、いつでも家に寄れるようにと合鍵を貰ったのだ。

戸を開けると美味しそうな香りがした。

「お邪魔します」

言つと、戸を開けた時から気づいていたのか、廊下の奥からすぐに祖母がやってきた。着物に割烹着を着た祖母は、天愛の姿を見るなり嬉しそうに微笑んだ。

「いらっしやい、遅かったわね。ご飯できてるわよ。食べるでしょう？ あら……」

何かに気づいたような祖母の声に、天愛は小首を傾げた。その目は天愛ではなく、天愛のすぐ横に向いているがそこには靴箱があるくらいだ。特に変わったこともない様に見える。

「どうしたの？ おばあちゃん」

天愛が訊くと、祖母はまた微笑みを浮かべて首を横に振った。なんでもないわ、という返事に天愛はまた首を傾げたくなつたが、美味しそうな香りに誘われるように祖母のもとへ行った。

食卓には二人分の夕食が並べられていた。大鉢一つに小鉢がいくつも置かれている。祖母がご飯を盛っている間に天愛はお茶を淹れた。家でもそうだが、祖母は天愛がお茶を淹れると喜んでくれる。それに比べて行く度にお茶を淹れると言ってくるあの狐の店主は、湯呑みに口をつけることさえしないのだ。せめて飲んでくれればやりがいもあるというのに。

「あら、思い出し笑い？」

そう言われて天愛は自分が始めて笑みを漏らしていることに気づいた。その前には苦という文字が付くのだが、それをわざわざ訴え

る必要もない。

そういえば、祖母には夜渡蓮でアルバイトをしていることを言っていない。もしかすると母が何か言っているかもしれないが、祖母は夜渡蓮で天愛がアルバイトをしていることをどう思っただろうか。綾香がこの近辺では有名な店だと言っていたが、祖母はあの店を知っているのだろうか。

席に着くと天愛は祖母の姿を見た。柔らかな物腰だが、それでいて厳しい人だ。そのお陰で子供の頃に叩き込まれた食事の作法やお茶の淹れ方には自身を持っている。

「何かあった？」

静かな声で訊かれて、天愛は茶碗に向けていた視線を上げた。

祖母はあの祭りの日のことをどう考えているのか分からない。けれどあの日何度も天愛に何度も謝ったのだ。天愛よりも年上ではあるがまだ子供の従兄弟たちに彼女のことを任せて、子供だけで遊ばせていたために起こった事故だと祖母はそう思っているに違いない。強い責任を感じた祖母はその日、天愛が見たことのない様な悲しそうな顔をしていた。祭りのことを思い出し、気持ちが落ち込んでいたのだとは言えない。

「おばあちゃん、夜渡蓮っていう骨董品屋しってる？」

話を逸らす様に天愛がそう訊くと、祖母は天愛の口からその名前が出たことに驚いたように目をまるくした。やはり知っている様だ。

「どうしたの、急に。知っているものにも、昔からご近所付き合いもあるわよ」

今度は天愛が驚く番だった。知っていると虽思ったが、まさか係わり合いがあるとは想像もしなかった。近所とは言っても隣り近所なわけではない。あくまで同じ町内というくらいなのだ。

「ご近所付き合いって？」

「死んだおじいちゃんが先々代の店主と同級生だったのよ。おじいちゃんが亡くなってからはそんなに係わることもなくなっただけで、

天愛が生まれる前は、よくおじいちゃんが足を運んでいたの。今はお孫さんが継いでいるらしいけれど。八十彦君だったかしら。私が最後に見た時はまだ小さかったけれど、立派になっていたわ」

祖母の口からその名前が出たことに驚き、天愛は啞然とした。ご近所付き合いどころの話ではない。思わず手に持っていた箸を落としそうになったが、そこは祖母の手前だ。箸を握りなおした。

「おばあちゃん、私、そこでアルバイトしてるんだけど……」

まあ、と祖母は天愛の予想を裏切って大して驚いた様子もなく小首を傾げた。

「何を今さら」

「え」

「あなたが通い始めた頃に、もう聞いていたわよ」

「お母さんに？」

そう問いかけながら違和感を感じる。母に聞いていたのなら、「お母さんに聞いた」と言う気がする。嫌な予感がして、箸を握る手に力が籠った。

「店主によ」

危つく倒しかけた湯呑みを持った手のひらが熱い。その熱さとは別に、天愛は頭から血の気が引くのを感じていた。

「どうして言うてくれなかったんですか」

夜渡蓮に着くやいなや、天愛は開口一番にそう言った。

一晩あけた後怒りはもう随分と沈んでいたが、店の前から硝子戸越しに八十彦の姿を見た途端、萎んでいたはずの怒りも膨れ上がったのだ。

責める声も、叫ぶのを必死に抑えている様な苦しげな声だった。

あいも変わらず人を馬鹿にした様な狐面を睨みつける権利くらいはこちらにあるだろうと、天愛は怒りのままに八十彦の面を睨んだ。黙っていた祖母も相当人が悪い。天愛のアルバイトが決まった時、

祖母の家に八十彦から電話がかかってきたらしい。内容は言うまでもなく天愛のことだ。

「言う必要があつたかな」

「必要があるないに關係なく、私の気持ちも少しは考えてください。気分が悪いです」

後ろから「こんなに怒ってる天愛ちゃん、最初以来だねえ」と感心したような声が聞こえたが、天愛はそれをあえて無視した。その口ぶりからすると、東雲も天愛の祖父と先々代が友人であつたことや八十彦が祖母に連絡をとっていたことも知っているのかもしれない。

「君が気分を害したなら謝るけど、そんなに怒ることでもないだろう?」

確かにそう言われればそうなのだが、一度吹き出た怒りをそう簡単に静めることはできない。そもそも言葉とは裏腹に八十彦には謝る気がないのだろう。呆れているという気持ちが狐面をつけていても滲み出ている。

これ以上口を開くと自分でも訳が分からないことを言ってしまう。そんな気がして、天愛は必死で怒りを自分の中に押し込めた。

「東雲さん」

「うん?」

心なしに東雲の頬が引き攣つた様な気がして、天愛は小さく息を吐く。怒っている人間を好きだという人もいないだろうが、天愛の怒りは間違はなく東雲の苦手なものに入っているだろう。

「私、お茶葉を買いに行つてきます」

先日染野がそろそろ買いに行かないといけないと言っていたのだ。昔は配達で持ってきてもらっていたらしいが、今は御茶屋の店主も歳で配達もなくなつてしまったらしい。以前は東雲が行っていたらしいが最近では天愛が買いに行っていた。

やってきたばかりだが、外に出て気分を鎮めたい。訊きたいこともたくさんあつたが、落ち着いてからでないといけない。

東雲も天愛の気持ちを察したのか、うんうんと二三度頷いた。もとも客の少ない店なのだ。天愛がいなくても問題はない。

「うん、行っておいで」

「天愛ちゃん、ついでにお茶菓子も買ってきてもらっていい？ 山水さんとこの」

いつからいたのか、ひよつこりと暖簾の向こうから顔を出した染野がいつもと変わらないのんびりとした調子で言った。

「はい、わかりました」

先ほどよりも幾分か落ち着いた声が出た。目の前に座る八十彦のことはこうなれば完全無視だ。目に映ると気持ちが逆撫でされるような気がするので、見ない様にして店を出た。

「思いの外、気が強い子だったねえ」

天愛が店を出たあと、八十彦が珍しく感心した様な声で言った。

「怒らせたのは八十彦さんでしょ。いい加減にしないとてないよ」

「それでも学生の時はもてていたんだよ」

頬杖を付いてはいはい、と東雲は呆れた様に言う。天愛が哀れでならないが、自分も似たようなものだ。どれだけこの狐の店主に振り回されてきたことか。思い出しただけで東雲は大きな溜息を吐きそうになった。先代もそうだが、先々代も悪ふざけが好きな人だったと聞く。東雲もどちらかというと悪ふざけが好きな方だが、狐の店主達には叶わないだろう。

「あのさ、八十彦さん」

「うん？」

「もしかして、天愛ちゃんのおばあちゃんってさ、春乃さん？」

「あら、晃君知ってるの？」

染野が意外そうに目を見開いた。八十彦はそれには返事を返さずにただ目を細めただけだったが、それが彼の答えだろう。

「……あーあ。女主人もいい性格してるよ」

「偶然だよ」

「そんな偶然ってある？」

「夜渡蓮ではありえる偶然だね」

夜渡蓮で起こる偶然は必然ではないだろうかと思っただ、今さらつつこむ気も起こらなかった。

天愛の祖母である小春の母もまた、夜渡蓮の店員だったのだ。ご近所なのだから全くありえない話しでもないのだが、それでもすごい確率だ。天愛が今聞けばもう言葉も出ないかもしれない。綾織家と血の繋がりもないのに、偶然だけでもう十分繋がっている天愛はある意味すごい少女なのかもしれない。

「……公園で千尋といたのも、天愛ちゃんですよ？」

狐の店主は男にしては少し細長い指で、染野が用意した湯呑みに触れた。天愛が来る少し前に淹れられたお茶は、もう冷めている。

返事はない。東雲はその狐面が店主の顔から離されるのを眺めながら、再び小さな溜息を吐いた。

狐の店主は目を細めて笑う。それは東雲にも少し似た男の顔だった。

静かな住宅街を歩いていると、天愛は一人の老人に呼び止められた。

その老人はコートに縁付き帽子を被り、細長い眼鏡のレンズ越しに天愛のことをじろじろと眺めると自分が呼び止めたにも係わらず不思議そうな顔をして首を傾げた。首を傾げたいのは天愛の方だったのだが、呼び止められた以上知らないふりをする訳にもいかずじつと老人の言葉を待った。一瞬知り合いかとも思ったが、彼女の様子から見ると人間違いだったのかもしれない。

「あんた、椿さんとこの子じゃないか」

ぎよつとして天愛は手に持っていた茶葉の入った紙袋を落としそうになった。人間違いであってほしいと内心思っていたのだが、祖母が祖父の知り合いなのかもしれない。

天愛が頷くと、老人は相好を崩した。

「やつぱり。あんたが小さい時会ったことがあるんだけど、覚えているかな？」

祖母や祖父の友人達なら小さい頃なら何度となく顔を合わせてきたが、その殆どを覚えてはいない。けれどそれをそのまま伝えるのも失礼な気がして、なんと言えいいのか分からずに天愛は視線を彷徨わせた。それだけで答えには十分だったらしい。老人は解かったという風に頷いた。

「覚えてないのも無理はないよ。毎年祭りの時に小春さんが行っていた拋りあいにはいた大勢の中の一人だから。……お使い？」

「はい」

「あんた、お狐様のところで働いているんだろ？」

老人のご近所ネットワークとは恐ろしい。天愛は会ったことも覚えていない老人にそこまで知られていることに目眩を覚えそうになった。お狐様などという奇妙なあだ名で呼ばれるのは、どう考えて

も夜渡蓮の店主しかない。祖母が話したのか、それとも夜渡蓮で働き始めた女子高生のことなど近所の老人達には筒抜けなのか。

邪険にする訳にもいかないが、仕事からだ。店は相変わらず暇だろうが、ゆつくりと話すことも憚られる。それに染野に頼まれた茶菓子はまだ買っていないのだ。

「あの、すみません。わたしこれからまだ行かないといけないところがあるので……」

「どこに」

「え、あの、お茶菓子を買いに」

「それだつたら山水さんとこのじゃない？　一緒に行くよ」

なぜそうなるのだろう。天愛は驚いて目を円くした。確かに山水さんのところに買いに行くのは間違いないが、彼女ももしかすると用があるのだろうか。

元々、天愛はどちらかと言うと人見知りな方だ。小さい頃に顔を合わせていたとしても、殆ど初対面の人と道のりを共にするのは苦行に近い。できれば断ってしまいたかったが、言ってしまった以上断り辛い。

天愛がそんなことを悶々と考えている間にも、二人は和菓子屋への道を進んでいた。

「小春さんは元気？」

「え、はい」

そう訊くということは、天愛が夜渡蓮で働いていることを祖母の小春から聞いた訳ではないのだろう。天愛は隣りを歩く、自分よりも背の低い老人を見た。腰を曲げてはいるが、彼女は早歩きだ。いつもゆつくりと歩く天愛は彼女に遅れをとらない様に慌てた。

「そう、よかった。私達くらいの歳になると、久しぶりの再会が棺の中と外つてこともあるからねえ」

笑えない。

老人はからからと笑ったが、天愛は笑うべきか笑わない方がいいのか分からずに、苦笑いを返すしかなかった。この手の冗談は苦手

だ。夜渡蓮の客は老人が多いが、天愛はその中でもこの人は苦手なタイプだと思った。いくら祖母の友人とはいえ、仲良くはなりにくい様な気がする。

「そういえば、お狐様は、元気にされている？」

「八十彦さんですか？ お元気ですよ」

静かな印象を与える八十彦だが、不健康な訳ではないだろう。今のところ天愛は彼が体調を崩したところも見ることがない。けれど彼が外でいる所も見ることがない天愛には、健康的にも見えなかった。あの古書の積み重ねられた応接間でいつも本を読んでいる八十彦はどちらかと言うと線が細く、色も白い方だ。

「そう。最後に会ったのは去年の市だったかな。立派な店主になった様だったね」

そう言われても、つい最近の八十彦しか知らない天愛はただ曖昧に微笑んで小首を傾げるしかなかった。そもそも彼が日中外で歩いている姿など想像もつかない。先日、彼が学生だった頃があると聞いた時にも大きな違和感を感じたのだが、やはり彼が普通の人間のような生活をしていたということが信じられないのだ。今も言ってしまうはただのぐうたらな引き籠りの様なのだが、彼の纏う雰囲気やいつも被っている狐面がそうは見えさせないのかもしれない。

「前のご店主って」

「ああ、彼は今海外で仕事をしてるんじゃないかな。けど最近日本に帰ってきたと聞いたよ」

意外な言葉に天愛は思わず足を止め、ぽかんとした。

天愛の中で八十彦よりも謎に包まれていた彼の父親が、急に現実的な言葉にぼんつと弾き出された。違和感どころか、頭が受け付けてくれない。東雲は八十彦の父親は気づけばいなくなっていたと言っていたのだ。行方不明にでもなってしまったのだと思っていた天愛は、その人が海外で仕事をしていたなどまさか想像もしなかった。それも最近日本に帰ってきたのだということは、実家である夜渡蓮にも帰ってくるのではないだろうか。

八十彦とは似ているのだろうか。けれど狐の店主が全員変人だったわけでもないだろう。現に四喜は多少風変わりではあったが、八十彦の様に見せかけではなく本当に穏やかな青年の様だった。海外で仕事をしていたというくらいだ。至極まともな人物なのかもしれない。アサコはそれを願った。失礼だとは解かっている、親子揃ってあの様な性格だったら堪らない。

「あの、ところでもしかしてこの辺では夜渡蓮って有名なんですか」
天愛が訊ねると、老人は深く頷いた。

そういえば、以前綾香にも聞いたことがあったのだ。彼女は近所の子供には化け物屋敷だと思われると言っていた。そういう特殊な場所は子供の中でも話題になるものだ。間違いなく子供たちにとっては有名な場所だろう。老人たちの中には、狐の店主が妖怪か何かだと思っている人もいると加えて言っていた。

「昔から続く名家だしねえ。町内では有名なんじゃないかね。曰くつきの骨董店でもあるし」

「町内で？ 曰くってなんですか」

「店主がいつも狐面を被っているだろう。それがまず異質で、それに店の前や中で幽霊を視たという人が多かった。まあ、これは尾ひれはひれだろうけど。あとは、時たま客に奇妙なことが起こる事があった」

ああこの手の話しは苦手だと、天愛はあからさまに表情を引き攣らせた。それでも幽霊の正体に見当がついてしまう自分が嫌でならない。もし老人が言う様に尾ひれはひれではないとしたのなら、おそらくそれは赤い着物を着た女店主のことではないだろうか。

天愛と老人の横を一台の黒い外国車が通り過ぎた。それをきっかけに天愛は周囲を見渡し、そこがもう目的地のすぐ近くだということによりやく気づいた。数メートル先に山水の木彫りの看板が見える。

「昔ある客が店に入った時、たまたまそれを見かけた客の友人が彼を追いかける様に店に入ったんだ。けれどいたのは店の店主だけ。」

店主に若い男が入ってこなかったかと訊いても店主は知らないと言う。釈然としないながらもその友人が店を出て門下を通った直後、店の戸が開いた。友人が振り返ると、彼が追っていたはずの男がそこにいたんだって」

それはどう考えても夜渡蓮のあの不思議な特性のせいだろう。男は違う時代の戸を開けたに違いない。

「男は友人にどこにいたのか訊かれて、不思議そうな顔で言ったそうだよ。『僕はずっとこの店の中でいたよ』って」

試されているのだろうか。それとも、鎌を掛けられているのだろうか。

天愛がそう疑ってしまうほど、老人の口調は淡々としたものだった。なぜ、このような話しをその店に勤めているという自分にするのだらうと、天愛はその意図を探る様に老人の顔を凝視した。けれどもそんなことをしても老人の顔に刻まれた皺の数が分かるだけで、彼女の意図を読める筈も無い。一つだけ分かることは、彼女は天愛よりも長く夜渡蓮のことを知っているということ。そしてそれは天愛が知らないことも知っている可能性があるということだ。

時間云々のことは、八十彦には外で話してはいけないとは言われていない。話しても普通の人は信じないだらうし、信じた人が店に行ったとしてもその怪異に出会うとは限らない。悪くてもその噂が拡がるだけだ。今も十分に可笑しな噂があるのだから、それも今更なことなのかもしれない。けれど、四壺はそのことは秘密なのだと言っていないかただらうか。

「あの、信じられているんですか、その話」

「信じてるも何も、本当のことだらう？ まさかまだ聞いてないのかい」

訝しげに問われて、天愛は苦笑いした。この口ぶりから察するに、彼女も夜渡蓮の事情を知る人なのだらう。

「知ってます。何度か、そういうお客さんが来られました」

老人の円らな目が細められる。その視線はまじまじと天愛の方に

向けられた。

その時、ちょうど和菓子屋の前に辿り着いた。二人は同時にそこで立ち止まる。木枠の硝子戸の向こうに見える店内は狭い。いつもの店番は柔らかな雰囲気のお女がしているのだが、今日はその孫娘一人しかいない様だった。そんなところでこの話しをしてもいいのかと天愛が考えていると、その隣りにいた老人が迷うことなく戸を引いた。いらつしやい、といつもよりも元気な声が店内に響く。外の冷たい空気を開けっ放しの戸から入ってしまうのは申し訳ないと思い、天愛は慌てて老人に続いて店の中へと入り戸を閉めた。

老人は硝子ケースの中に並べられた菓子の中から、さつさと練り菓子を数個選んで注文した。店番の娘がいつもありがとうございませう、と満面の笑みで言う。どうやら彼女はこの店の常連らしい。

お連れ様は、と訊かれ、天愛は慌てて硝子ケースの中を覗いた。花を模ったものや、薄緑色の葉っぱの形をしたものなど、色とりどりの練り切りや饅頭などがそれぞれのケースの中に行儀よく並べられている。天愛はその中から紅と白の椿の練り切りを一つずつ、花びらの形の練り切りを二つ、栗きんとんを三つ頼んだ。天愛自身はこういった甘い物が苦手だったのだが、最近では染野のお陰が美味しいと感じられる様になった。練り切りは外から中まで甘いのだが、苦いお茶との相性はいい。何よりその見た目の美しさは見ていて楽しいものがある。

「ここら辺の年寄りの中には、その客になったことがある者が結構いるんだよ。まあ、女は大体嫁に出たから残ってはいないけどね」
もしかすると、そう言う老人もあの夜渡蓮の怪異に直接関わったことのある人間なのだろうか。

それを訊ねようとして、天愛は老人の名前を知らないことによりやく気付いたが、今更訊き難い。結局訊かずにそのまま会話を続けることにした。

「もしかして、夜渡蓮の……その、違う時間の戸を開けたことがあるんですか」

訊いてから自分の言葉が可笑しくて、天愛は思わず泣き笑いの様な情けない顔をした。こんなことを口にして自分で違和感を感じるなど、まだあの店の不思議を信じ切れていない証拠だ。現に自身も違う時代のあの店を訪れてしまったことがあるというのに、今までそんな不思議なことに一切出くわしてこなかったせいも心の片隅でそのことを否定してしまうのだ。

「あるよ。まあ、私自身ではなくて、私の妹がだったんだけどね」

「妹さんは、何か売り買いされたんですか」

老人は小さく頷き、「銀の羊を売ったんだよ」と言った。その時、店の娘が元気な声で二人を待たせていたことを詫び、紙袋を差し出した。天愛はそれを上の空で受け取る。銀の羊。以前天愛は小さな銀の羊の置物を見たことがあったが、それはあの不思議な青年に買われていった物だった。売り買いのある骨董店では、店員から見れば売り買いをしていく客同士が頭の中で結びつくのでなんら不思議はないのだが、天愛はなにか不思議な気分になった。

違う時代の戸を開けた彼女の妹が売った銀の羊を、違う時代からやってきたであろうあの青年が買ってしまったのだ。長く続いてきた夜渡蓮の営みの中では珍しいことではないのだろうが、天愛からしてみれば不可思議で複雑なことの様に感じられた。

「あんたは、何か売り買いしたのか」

店を出る時、老人は表情のない顔で訊いた。

天愛は首を横に振る。先日の夜渡蓮でのやり取りが思い出されたが、それを一から老人に説明するのは面倒だったし、する必要もない。彼女が訊いているのは、あくまで物品の売り買いのことなのだから。

ありがとうございました、と背後から聞こえてくる明るい声に答える様に振り返り天愛は会釈すると、ようやくこの老人から開放されるのかと少しほっとした。失礼な話だが、この老人のことは出会ったばかりで殆ど何も知らないが、この老人との間に持つ奇妙な緊張感天愛にとって疲れるものだった。老人は普段、愛想笑いなど

しない人なのだろう。先ほどからからと声を出して笑うことはあっても、その目は笑みの形に動くことはなかった。それも、天愛が彼女を苦手と感じる要因の一つかもしれない。何を考えているのか、さっぱり分からないのだ。表情が一見ある様に見えて、実のところあまりない。そういう人なのかもしれないが、天愛は初対面の人に対してそういう人なのだと割り切れるほどの、気の大ささを持ち合わせてはいなかった。

「それじゃあ、ここで……」

そう言つて、夜渡蓮に帰る道に足を向ける。

店を出る前に感じていた怒りは今はもう跡形もない。時折怒りが爆発することがあっても、天愛のそれは大抵長続きしないものだった。

「久しぶりに、私も店に寄ろうかな」

老人のその一言で、天愛の帰り道はどつと疲れるものとなってしまった。

東雲晃の場合

彼の青年が、夜渡蓮に初めて訪れたのは彼がまだ中学生の時のことだった。

親族に、骨董店を生業としている者がいると耳にはしていたものの、彼はその店がどこにあるのかも、店主がどのような人物かもその時はまだ知らなかった。知らなかった方が良かった、とは言っても後の祭りである。まだ十四歳になったばかりの少年は、父の何気ない一言によつて否応なくその骨董店とその店主、店に纏わり付く歴史と関わっていくことになってしまう。

始まりは、「出かけよう」と言う父の言葉からだ。中学校から帰ってきたばかりの東雲は、父親のその突飛な一言にあからさまに眉を顰めた。彼の父親が訳が分からないのは常日ごろのことと言つても間違いではなかったが、その時程、東雲は父を不審に感じたことはなかった。後から彼はそれを虫の知らせだったのだと思ひ返すことになるが、それも後の祭りである。

ともかく、彼は黒いスーツを着込んだ父に引き摺られる様にして、自宅前に停められていた乗用車に乗せられた。主語が完全に抜け落ちた父の言葉からは車がどこに向かっているかなど、彼には見当もつかなかったことは言うまでもない。行き先を訊いても、父は「良い所だよ」と妖しい言葉を舌に乗せるのみだった。良い所、など、夜の仕事をしている父親から出た言葉は、とても良い所などと思えなかったが、東雲はむつとりと口を閉ざした。実の親子でありながら、彼にとつて父との応酬は他のどの様な他人のものよりも疲れるものなのだ。もし怪しげな場所だったなら、着いてから逃げてしまえばいい。

東雲は、子供がいるとはとても見えない父親の横顔から目を逸らし、外の景色に集中した。車は、国道を走り、いくつかの分かれ道を曲がると閑静な住宅街の中へと入っていった。目新しい家や古い

家が立ち並ぶそこには、近くに学校があるらしく、ランドセルを背負った小学生たちの下校する姿が目立った。

何の違和感もない景色だ。けれど、東雲は逆にそのことに違和感を感じた。こんな平凡な住宅街に、父が嬉々とするものがあるのだろうか。東雲の父親は基本、刹那主義だ。三十一歳にもなるというのに、まるで若者の様な生活をしている。世の中の三十台の男性には勿論そういう人がいない訳ではないが、子供のいる三十台の男性としては、東雲の父は少々羽目を外しすぎなところがある。そもそも今の水商売もその性質から、簡単に選ばれたものだった。女性と遊び、会話し、酒を飲みながらも給料が発生する仕事。まさに父親にとっては天職と言えよう。勿論、その一言で簡単に成し遂げることのできる仕事ではないことも東雲は少しは理解していたが、彼の父の場合は飄々とした様子でトップに居座り続けているのだ。その歳から、終わりは見えているが引退してからは経営側にでも回るつもりだろう。

そんな派手な生活がしつくりくる彼には、この本当に平凡としか言いようのない住宅街は似つかわしくなかった。それは東雲の主観ではあったが、車を降りるとそれは主観ではなくなった。近所の若い主婦達が数人集まって会話をしている近くで父は車を停めてしまったのだ。車を出た途端に感じた視線に東雲はうんざりとした。父と学生服を着た自身に対しての彼女達の視線の理由はなんとなく分かっていた。「ご兄弟かしら」と微かに彼の耳にも届いたが、気付かないふりをする。

「着いたよ。ここが良い所だ」

にこやかに言う父に言われて、東雲が顔を上げるとそこには古びた門構えの屋敷があった。門の上には『夜渡蓮』と書かれたこれまた古びた木の看板が下げられている。そこが親戚が営む骨董店だとは、東雲にはすぐには思い当たらなかった。それでも、その異様さに息を呑んだ。りんつと聞こえてきた鈴の音に、肌が粟立つ。

「なんだよ、ここ」

「何って、親戚の家だよ。お前は来るの初めてだろう？　ちゃんと挨拶しろよ」

そう言つて、父は東雲の黄金色の髪をくしゃくしゃと掻き雜ぜると、東雲が振り払つてくるよりも早くに手を退けた。

「ふざけんな。俺は帰る」

「此処には、お前の向こう一ヶ月の生活費が掛かっていると云つてもいい」

仇を見る様な目で東雲は父を見上げた。二人は暮らしている場所是一緒だと言え、その生活は別だ。夜になる頃に家を出て、午前中に家に帰ってくる父とは違い、東雲は朝家を出て夕方、もしくは夜に帰ってくる生活を送っている。その為二人は同じ家の住人でありながら奇跡的な程に顔を合わせる事が無いのだ。父はその月その月の生活費を手渡しするではなく、子供の口座に振り込むという有様だった。言わば、その振込みは東雲にとっての生命線だ。これがなくなつてしまつては、飢え死にすることはなくとも困ることになるのは目に見えている。学校に隠れてアルバイトをするという手もあるかもしれない。けれど、中学生を雇ってくれる所など滅多にないし、そもそも東雲の髪色では面接で門前払いを食らつてしまうだろう。この屋敷に入り、その住人に挨拶をするだけならば安いものかもしれない。

東雲は渋々、父に続き門をくぐつた。再び肌が粟立つような怖気を感じたが、極力それに意識を向けない様にした。

末端の分家である東雲の家は、元々親戚付き合いが少ない。親戚と顔を合わせるのは正月と盆の時、誰かに不幸があつた時位である。それでも東雲は自身にも流れる血の一族が少し風変わりなことには小さな頃から気付いていた。オカルトなことを全面的に肯定するわけではないが、否定することもできないのはその血のせいだろう。親族は、いわゆるオカルトな一族なのだ。何が、という訳ではない。妙な儀式をする訳でもないし、いかにもな霊能者がいたりする訳でもない。少々派手な容姿の者は多いかもしれないが、一見普通の人

たちでしかない。けれど、東雲はその人たちに何かまでもではない秘密がある様な気がしてならなかった。はつきりと言葉に言い表すことはできないが、殆どが不思議な雰囲気纏った人ばかりなのだ。そして、それは東雲自身も例外ではなかった。生粋の日本人であるにも関わらず、地毛が金色だということは突然変異として彼の中で片付けられていたが、それよりも特殊な特徴を彼は持っていた。幼い頃から、異様な程に勘がいいのだ。何かを根拠にして考えが浮かぶわけではなく、唐突に生じた考えが外れたことはない。それに、幼い頃から見たくないものまで見えるのは、彼の父も知ることだった。そもそもそれは父からの遺伝なのだろう。わざわざ口にはしないが、東雲は父も自分と同じものを見ている事には気付いていた。

この屋敷もそうだ。異様な空気を纏っていることには、父も気付いているのだろう。それでも晴れやかな顔で平然としているところは流石というべきなのだろうか。この密度の濃い空気には、慣れるのに時間を要しそうだ。けれど東雲はこの場所と深く関わっていく気など更々なかったで、少しの辛抱だと自分を励ました。この少しの辛抱で、向こう一ヶ月の生活費は約束されるのだ。

それでも、東雲は先ほどから嬉しそうに鳴り響く鈴の音に不快感を感じずにはいらなかった。そこかしこから聞こえてくるその音色と、微かな少女の笑い声の様なものは、紛れもなくまともなものではないだろう。

「うるさいな」

顔を顰めながら東雲が呟くと、彼の前で硝子戸を開けようとしていた父はその手を止めて振り返った。その父親にしては珍しく真剣な顔で東雲の様子を見たあと、嬉しそうに微笑んだ。父の姿など、できるだけ視界から外していた東雲はその様子に気付くことはなかった。ただただ、聞こえてくる鈴の音色と少女の笑い声が五月蠅い様で、顰め面でいた。

からりと音を立てて戸が開かれる。独特の香りがした。父の背中越しに、東雲は店内を見る。薬棚に、硝子のショーケース、気泡の

入った硝子ランプから降り注ぐ灯りは店内を橙色に染め上げていた。
「いらつしゃいませ……あら、こんにちは」

柔らかな声で来店の挨拶をしたのは、着物を着た上品な老女だった。彼女が、この店の店主だろうかと東雲は思ったが、すぐに違うだろうと気付いた。関西訛りの彼女は、元々この土地の人間ではないのだろう。

「こんにちは、お久しぶりです。染野さん」

父は爽やかな笑顔を浮かべて挨拶すると、お辞儀した。相変わらずの外面の良さを東雲はもう気に掛けることもなかった。老人には好青年の様な態度でいるのは、彼の父にとっては当たり前のことなのだ。

「いややわ、今更そんな畏まらんでもいいよ。さあ、上がって頂戴。店主は奥におるから」

「では、遠慮なくお邪魔します」

その様子からして、父はやはり何度かこの屋敷に足を運んだことがあるのだろう。東雲は黙って父に続いた。この様な異様な店の主なのだから同じく異様な雰囲気を持つ人物に違いない、と彼は考えた。一体どんな老人がこの店を管理しているのだろうか。

式台に腰掛けてスニーカーを脱いでいると、視線を感じて東雲は顔を上げた。廊下の奥の曲がり角から、何か白いものが覗いている。それが何か分かった途端、ぎょっとその目は驚きに見開かれた。狐の面だ。狐面を着けた小さな少年が、壁に隠れながら東雲の方をじっと見つめていた。それが人の子だとすぐに気付いた東雲は肩の力を抜いたが、改めて不気味な屋敷だと思った。少年は東雲と同じ金色の髪をしていた。もしかすると染めているのかもしれないが、まだ小学生くらいの少年だ。この古めかしい屋敷の住人が彼の様な子供が髪を染めることを肯とするだろうか。

偶然だ、突然変異だと思い込み、片付けてきた自分の髪色が、因縁めいたものの様に思えて東雲はまた顔を顰めた。おそらく、あの狐面の少年も東雲とは血の繋がりがある者なのだろう。これで、店

主までもが同じ髪色だったのなら決定的だったのだが、幸い店主は彼らの様な明るい髪色をしていなかった。けれど、真つ黒な髪をしていたわけでもない。

父と共に居間に通された東雲は、大きな座卓の前で本を読む男を見て暫く声を出すことができなかった。

「やあ、こんにちは。晃君だね。君がまだ小さかった時に、何度か顔を合わせてるんだけど、覚えてるかな」

覚えている筈がない。少なくとも、彼がその白い面を着けていなかったら思い出すこともできたのかもしれない。東雲は先ほど目にした少年と同じく狐面を被った男を凝視した。藍色の着物を着流しているその男は、この店主に違いない。

——変人。

その感想を東雲はなんとか口に出さずに飲み込んだ。もしかするとふざけているだけなのかもしれないが、男はその面を外す気配もない。先ほどの少年だけならまだしも、此処の住人は狐の面を着用することを義務にでもしているのだろうか。東雲は思ったが、訊こうとはしなかった。それで頷かれでもしたら、眩暈がしそうだ。だから、東雲はあえてその狐面には触れないことにした。

親子が座卓を挟んで店主の前に腰掛けると、間もなくお茶とお茶菓子を手にした染野がやってきた。

美味しそうなお茶の匂いがする。流石に面を外すだろうと期待を籠めて東雲は店主を観察していたが、一向に外す気配はない。

全く、一体どうして急にこんなところに連れて来られたのだろうか。東雲は再び隣りの父の横顔を一瞥したが、その視線に気付いているのかいないのか、父は東雲の方を見ることがなく上品な仕草でお茶を飲んでいた。

「いややわ、忍さん。もしかして、晃君になんの説明もしてないの」
東雲の様子に気付いたのだろう、染野が口到手を当てて小首を傾げた。その少女の様な仕草は、老齡の彼女に異様なほどよく似合っている。彼女の少女時代はさぞ美少女だったのであることが、そ

の容姿からも想像できた。

「主人の口から直接、と思ひまして。愚息は私の言うことなんか全然聞いてくれないんですよ」

言うことを聞くも何も、数ヶ月言葉を交わさないことだつてある。もちろんそこで何かを言われたとして、父の言う通り東雲はふざけた父の言うことなど聞く耳も持たなかつただろう。

東雲はじろりと父を見た。ふざけるな、と叫びたかつたがここで叫んでしまつては、父の思惑に嵌つてしまふ様な気がしてぐつと我慢した。怒るのは、内容を聞いてからでもいい。

「そうか。君には、ちよつとお願ひしたいことがあつてね」

じつと黙つて狐面の男を見ていると、ふと男は何かに気づいた様に東雲の後ろを見やり、面の下で目を細めた。

りんつと鈴音や気配が後ろからしてきていることに東雲自身気づいていたが、気づかないふりをして振り向かなかつた。

男は再び東雲に目を向ける。色素の薄いその瞳は、ふざけた格好には不釣合いなほど穏やかだ。その視線に親しみが籠められていることに気づいた東雲は、眉を顰めた。

「狐と一緒に捜して欲しいんだ」

ぽんつと出された言葉に、東雲は啞然とした。一体どんな大層なお願いをされるのか少し冷や冷やしていたのだが、一体なんなのだろうか。

「あ、狐つて言つても、置物とか、物じゃないよ。本物の狐だから。まあ、本物つて言つても本物じゃないんだけど」

「……ペットでも逃げたとか」

「うん、違う」

東雲は立ち上がった。謎掛けを楽しむような男に、虫唾が走る。間違いなく、男は父と同じ部類の人間だと今更ながらに気付く。付き合つてなどいられない。

「簡単なアルバイトだとも思つてくれればいい。給料は、向こう一ヶ月の君の生活費だよ」

その言葉で、東雲は嫌々ながらもこの場に繋ぎ止められた。

古びた格子戸から見えた月はどこか遠い世界のものの様だった。

ぼんやりとした目で娘はその月を眺め、子供の頃に聞いた話を思い出していた。光り輝く竹から産まれた赫映姫^{かくやひめ}。村の子供が話していたのを離れたところからこっそりと聞いていたから、娘は内容をはつきりとは知らなかったが、たしか、美しい姫君は結局は元いた自分の場所へと帰ってしまうのだ。

月明かりは、劣化した木の床を格子の黒い影を残して照らしていた。その床に散らばる金色は、この世のものではない様に儚げに輝いている。娘はそつと壊れ物に触れる様に、床に寝そべる少年の金色の髪を梳いた。ぬるり、と生温かいものが指先に付く。月を見る様なぼんやりとした眼差しで、娘は白い指を濡らす赤を眺めた。

さわさわと木々を鳴らし、風が吹く。大きな生き物の様に、廃寺を囲む黒い竹林は揺れ、その葉を散らした。格子戸の間から風に舞った葉が入り込み、娘の足元や少年の体の上に落ちた。

娘は被っていた面を外すと、目を閉じてぴくりとも動かない少年の顔にそつと被せた。その時、虚ろな目からは一滴の涙が零れ落ちた。

何度もしゃみをしたあと、天愛は思わず鼻を嚙った。

その日、夜渡蓮は休業日をとっていて、それでも彼女は店に足を運ぶことになった。東雲と共に蔵の掃除を頼まれたのだ。店や屋敷の掃除ならともかくとして、蔵の掃除など理由をつけて断ろうと思った天愛は、咄嗟に良い嘘も思いつかず、東雲の憐れさを誘う視線

に追いやられて結局、蔵掃除を任されることとなってしまった。

流石に以前の正体の分からない不安に襲われることはなかったが、それでもやはり温度が低く暗い蔵の中は不気味で仕方が無い。古い物で溢れかえっているのも不気味さを感じさせる原因の一つだろう。「あんまり日当たりがいいと、物が傷むったって、暗いよねえ。てかやつぱマスクした方がいいんじゃない？ さっきからくしゃみ凄いいけど。埃っぽいもんねえ」

コンビニで買ってこようか、と訊く東雲に天愛はむずむずする鼻を摘み、渋い顔で首を横に振った。夜渡蓮のある閑静な住宅街周辺には、コンビニエンスストアがあまりない。一番近いところで徒歩二十分は軽くなるだろう。薬局もあるが、ともかく天愛はこの仕事を早く終わらせて帰りたいかった。蔵の戸は開け放たれているが、外よりも寒いそこに長いしては本当に風邪を引いてしまいそうだった。

蔵の外には大きな布が敷かれている。その上に天日干しするものを出さなければいけない。力仕事は東雲に任せて、天愛は小物などの掃除をすることになった。小物と一言で言っても、その数は半端ない。天愛が休もうとした時の東雲の潤んだ目は仕方のないことだったのだろう。染野が手伝ってくれたとしても骨の折れる作業だ。

それにしても、そんな骨の折れる作業にどうして此処の店主は手を貸そうとしないのだろうか、と天愛は苛立ち混じりに大きなトラックの蓋を勢いよく開けた。雇用主としても、個人的な、家の物もある蔵なのだ。心の中で文句を言うくらい許されるだろうと、天愛は口には出さずたらたらと文句を連ねる。

そもそも、先日知ったことのせいで、天愛はますますこの店の店主、八十彦のことが苦手になったのだ。そこには嫌いという感情が混ざっていると言っても間違いないだろう。ともかく彼には秘密が多すぎるのだ。そのどれもが自身の心を逆撫するものではないだろうかと思うほどに、彼女の被害者妄想の度は上がっていた。

「ああ、だめだよ。古い物だから、丁寧に扱わないと」

大きな木箱を運びながら、東雲は言う。

一見細身に見える彼のどこにそんな力があるのかと、天愛は意外に思いながら小さく頷いた。東雲の言う通り、少し乱暴に扱ってしまったトランクに再び視線を移す。その中には布張りの冊子がいっぱいに入っていた。木箱を抱えて蔵を出て行くこうとする東雲の後ろ姿を一瞥してから、天愛はそつとその頁を捲った。黄ばんだ厚紙の頁には、白黒の写真が直接貼られていた。どうやら古いアルバムらしい。着物を着た壮年の男性と優しい老齡の女性、そして色素の薄い髪の少年が大人たちの笑顔とは別に、一人口を引き結んだ硬い表情で映っていた。場所は恐らく夜渡蓮の門の前だ。貼られた写真の下には、そこに映っている人物たちの名前と年号が達筆で書き込まれている。

天愛は眉を顰めてその写真を見つめた。なんら変哲のない写真だけれど、そこに映る一人の少年は異色だった。白黒の写真なので断定はできないが、おそらくその髪は金色に近い色合いをしているに違いない。そして、その顔。それは天愛の見知った顔ととてもよく似ていた。あの夏の日、狐面を被っていた少年の顔と。

頁を捲る。その時には掃除のことなど頭から抜け落ちていた。がちゃんと物を落とした様な音が外から聞こえてきたが、それも気にならなかった。大きく見開かれた黒目がちな目は、恐怖に揺れていた。次の頁を埋め尽くす写真は、異様なものばかりだったのだ。そこに貼られているのは、この屋敷で撮られたものばかりだった。そのどれもに、着物を着た佇まいの美しい一人の女性が映っている。縁側に座る姿、その腕に小さな赤子を抱く姿、庭でどこか遠くを見る様な姿。そのどれにも、女性の顔がなかった。女性の顔の部分だけ、黒く滲んでいる。焼かれたのだ。それが誰の仕業か想像もつかないが、天愛はそこに人の念の様なものを感じ、身震いした。冗談で済ませられる範囲ではない。そこには明らかな悪意が籠っている様だった。女性を恨んだ者がそうしたのだろうか。それとも、女性自身が。

天愛はまるでそうしないと何かに襲われてしまつてもいふふう
に、恐る恐るといった素振りでアルバムを閉じた。ぞわぞわと肌が
粟立ち落ち着かない気分になる。そうだ、此処は狐面の娘の屋敷で
もあるのだ。それに気付くと、あの小さな赤い着物の子供に多少は
慣れていた彼女の心に、以前の恐怖が戻ってきた。

「天愛ちゃん？ どうしたの。世界の終わりみたいない顔して」

暢気な声に、天愛は無意識に体の力を抜いた。

「……そんな酷い顔してますか、わたし」

「うん。あ、それ、そんなとこにあつたんだ」

見つからなかった筈だよ、と東雲はぼやき腕を伸ばした。その手
がトランクに入ったアルバムを掴むのを見て、さつと天愛の頭から
血の気が引いた。その様子を横目で見ていた東雲が苦笑する。

「ああ、中身見たの？」

天愛は頷いていいのか一瞬迷つたが、小さく頷いた。

そのことで納得したように東雲も頷く。

「酷いよね、これ。まあ、どの道顔が映ってる写真なんて殆どなか
つただけだよ」

そう言つて長い指が頁を捲るのを天愛はじつと見守っていた。今
頃になつて、掃除の続きをしないと、と思い出す。日が暮れる頃ま
でこんなところであいたくない。

再び早く此処での仕事を終わらせたいという気持ちで彼女が募ら
せているうちに、東雲は先ほどのアルバムの頁を捲る手を止めた。
そこから一枚の写真を取り出すとそれを天愛に差し出す。天愛は写
真を見る前に恐る恐るといった様子で東雲を覗き見た。先ほどの不
気味な写真を見せられるのであれば遠慮したいと思う。

「まあ、見てみなよ。八十彦さんとかが言つてた言葉の意味が、き
つと解るからさ」

渋々と天愛はその古びた写真を覗き込む。そこに写っている人物
を見て、天愛は息を呑んだ。そこに映っていたのは、間違いない彼
女自身の姿だつたのだ。僅かな笑みをその表情に乘せてはいるが、

それが心からのものではないのは、たとえ小さな写真上でのことであつても伝わつてきた。椿の柄の着物に、結いあげることもなく背中に垂れ流した黒髪。そのせいだろうか、この屋敷に嫁いできたという割には、その姿はとても幼く見えた。

「……この人が、女主人ですか？」

訊かずとも答えは分かりきつていたことだが、天愛は思わずそう訊いていた。写真に写っている女主人と彼女は似ているところの話ではなかった。瓜二つと言ってもいいだろう。こんなにも、赤の他人が似ることがあるのだろうかと思ひながら、天愛は自分と同じ顔の人が世界に二人はいるという話を思い出していた。それは誰かが確かめたわけではなく、都市伝説の様なものだったはずだ。けれど、その理由がつくのであればまだ納得もできる。

自身と同じ姿を持つ他人がいると、こんなにも不気味に感じるものなのだ。天愛はその写真から目を離すことができなかった。どこか、なにか違うところはないかと探しても、分かるのはどう見ても同じ顔にしか見えないということだけだった。

「うん、そうだよ。初代の夜渡蓮の店主、綾織いちーさん」

その名前を言う瞬間、東雲の目が懐かしむ様な目をしたことに、写真を見つめていた天愛は気付かなかった。細められた目は天愛の手の中にある写真に向いている。

「当時の綾織の若旦那と結婚して、夜渡蓮を創った人だよ」

「私かと、思いました」

「そうだね。天愛ちゃんとおさんはそっくりだ」

その声の響きに天愛は思わず顔を上げた。

その時ようやく彼女は東雲の表情に気が付き、微かな違和感を感じた。

「……東雲さん？」

「彼女と狐は、お互いの姿が見えないんだ。だから、探せない。見つけられない」

「なのに、捜すんですか」

東雲の言う通りならば、女主人と狐が再び会うことは叶わないだろう。もし目の前にいたとしても、気付くことさえできないのだから。きつと夜渡蓮の人々が狐を見つけたとしても、どうすることもできないのだろう。

呆れたように、東雲は肩をすくめてみせた。

「おかしな話だね。それでも、此処の人たちはほんの少しの可能性にかけて、狐を捜そうとするんだ。ほら、話はこれでおしまい。掃除の続きをしよう。こんなとこにいつまでもいたら、風邪引いちやうよ」

差し出された手に写真を載せると、天愛は再びトランクの中に入っているアルバムの束に目をやった。これはすべて、綾織家のものだろうか。肌が栗立つような不気味さを感じたにも関わらず、彼女の中で彼らへの興味が沸いて来る。それらの冊子はやけに秘密めいて彼女の目に映った。

「気になる？」

そう言った本人の目こそ、なぜか好奇心で輝いていた。

頷いていいのか天愛は一瞬迷った。アルバムは言わば人の家の、それも見ず知らずの人々のプライバシーのようなものだ。東雲の何にたいしてか分からないがあからさまな好奇心を見て、そこに踏み込んでいいものかと思ってしまう。そもそも、東雲は我がもの顔でアルバムを見ていたが、彼も年数は長いとは言え天愛と同じアルバイトだったはずだ。

天愛は口を引き結ぶと首を横に振った。くすくすと笑われて、睨む様に見上げる。

「自分と同じ顔の人がいたら、興味が湧くのは当たり前だと思うけど。一さんは、子供を二人産んだんだ。一人がこの夜渡蓮を継いでもう一人は養子に出された。どうしてだと思う？」

話はここで終わ리と言ったばかりの東雲は、天愛と視線を合わすようにしゃがみこんだ。薄暗闇で見る細められた目は、天愛の記憶を刺激する。

「わかりません」

「そうだよ。別にお金に困っていたわけでもないし。けど、彼女は息子を余所の家に預けたんだ」

話の筋が読めずに、天愛はただただ眉をひそめた。自分の子を養子に出す親の心境など解らないと思う。親になつてみれば、少しは解るのだろうか。

「理由はすごく単純なことだったんだ。子供が、狐と同じ金の髪だったか、旦那と同じ黒髪だったか。一さんは、金色の髪の子だけを手元に残して、もう一人の子を手放した」

「旦那さんは、反対しなかったんですか？」

「さあ、どうだろうね。そこまでは分からないけど、いい気分はしなかっただろうね。それでも彼女の言う通りに子供を手放してしまつたのは、彼女を繋ぎとめておくのに必死だったからかもしれない。一さんは大体その顔を狐面で隠していたし、その穴から見える目はいつもどこか遠くを見てたから」

ぱたぱたと駆ける音が、開け放たれた蔵の扉の外から響いてきた。子供が外で遊んでいるのだろうか。そのすぐあとで染野の笑い声が微かに聞こえてきて、天愛は一瞬その目を外へと向けた。そろそろ小学校が終わつた時間帯なのかもしれない。

よし、と呟いて、東雲は様々な大きさのトランクを積み重ねると、それを持ち上げた。中に何か入っていたのだろうか。重そうにしているのがその姿から分かる。

「東雲さん」

天愛は蔵を出て行こうとする後ろ姿に呼びかけた。東雲は微かに身体を傾けると、首だけで振り向く。

「見たことがあるみたいに言っんですね」

少し垂れ気味の目が、大きく見開かれる。余程、天愛の言葉が意外なものだったのだろうか。何気なく言つた言葉だったので、そんな反応で返されるとは思っていなかった天愛は、彼と同じく目を大きくした。

けれどそれも一瞬のことだった。東雲は目を細めると薄く微笑んだ。

「そうかな？」

それは普通の、当たり前の返事だったに違いないのに、天愛はそれを白々しいものを感じて、すぐにその気持ちを打ち消した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6330f/>

狐と八十一の嘘

2011年11月15日10時48分発行